

層富

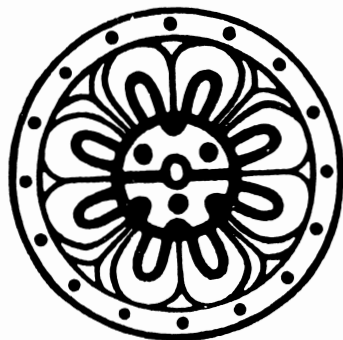
(川口勇書)

会誌名「層富」(そほ・そふ)の由来

私たちが住んでいる平城ニュータウンの地域は、古代には「層富」または「曾布」「添」とも記され、「倭六県(やまとのりくのあがた)の一つでありました。出典は『日本書紀』の神武即位前紀己未年の春二月壬辰朔辛亥(20日)の条にみえる「層富県」によりました。

題字もはじめ小さく、あと大きくしましたのは皆様の将来と本会の末広の発展を願ったものです。

古代大和の由緒ある地名を理事会の賛同を得て会誌の名としました。ご愛顧の程を。(網干善教)



会章

平城ニュータウンの「平」と文化協会の「文」を上下に組み合わせ、単純な円形にまとめ、音如ヶ谷瓦窯跡から出土の古代軒丸瓦の中央部分に配置したものです。蓮華の中の埴輪の顔のようにも、二人三脚で楽しんでいるようにも見えます。

(基本デザイン 朱雀・寛裕)



第十八号 目次 二〇〇一年

| | | |
|-------------------------|-------|-----|
| 巻頭言…………… | 網干 善教 | 1 |
| 記念講演 キトラ古墳から朱雀図…………… | 網干 善教 | 2 |
| 記念講演 世界の植物園…………… | 光岡 祐彦 | 4 |
| 私の歩んだ道(わが半世紀)…………… | 広田 省吾 | 12 |
| 俳句…………… | 柴田 晃良 | 18 |
| 「渋谷越え」に辿りつくまで…………… | 繪内 正久 | 26 |
| ある明治人の日記より(三)…………… | 宮川恵美子 | 33 |
| 西の京慰霊塔公苑内に建つ「萬葉歌碑」…………… | 片桐 一夫 | 41 |
| 旅のアクセント…………… | 片桐 一夫 | 44 |
| 漢詩…………… | 片桐 一夫 | 46 |
| 短歌…………… | 片桐 一夫 | 47 |
| グループからの便り…………… | | 55 |
| 「層富」投稿記事の追記訂正…………… | | 105 |
| 第十八回文化祭記録…………… | | 106 |
| 二〇〇一年総会記録…………… | | 111 |
| 会 則・役員名簿・組織名簿・会員名簿…………… | | |

会長 網 干 善 教

人間の生命は限られている。その限られた期間に精一杯生きようと努力する。その努力は人間の本能であり、理性でもあり、人間の人間たる所以でもあると考える。

人間としてよりよく生きることは、その一つの働きとして知識が必要である。これは努力によって得られるものである。勉学し、体験し、失敗もしてより豊かになる。

文化協会の活動はそうした目的を成就するためにつとめるべきである。より広い知識と経験を積み重ね、より正確な目的と判断をもって、豊かな人生を歩む指標を見出すことにある。文化協会はその一つの場でありたい。

今後も会の充実、発展を計りたい。

総会記念講演要旨

キトラ古墳から朱雀図

関西大学名誉教授 網 干 善 教

去る三月二十二日、阿部山にありますキトラ古墳で、極彩色のすばらしい朱雀の絵を描いた壁画がみつかりました。

今から約三十年前に高松塚古墳が、わが国ではじめて極彩色で描いた星宿、日月、四神や男子八人、女子八人、計十六人の人物の壁画が発掘され、大きな話題となりました。それについて二度目の発見です。明日香では数年前に富本銭が出土し、昨年の正月には“岡”のもと健民グラウンドから亀が見つかり、今度は鳥が出てきました。銭、亀、鶴（鳥）とめでたいものが三拍子揃って現れましたことは、本当にめでたいことです。

さて、今度キトラ古墳で新しく発見されましたのは、凝灰台で作られた石の部屋の南側の壁に描かれた壁画で、赤い色（朱）の鳥でした。高松塚古墳では盗人の侵入に

よって、朱雀と呼ばれる鳥の絵は見当りませんでした。今回のキトラ古墳では鮮やかな朱雀図が見当たったのです。

高松塚古墳やキトラ古墳では遺体を埋葬した石の部屋の東壁に青い色で青龍、南壁に朱雀（高松塚古墳では消滅）、西壁に白虎、北壁には亀に蛇が絡まった玄武という図を描いていたのです。これらの動物の形は、実は天上の星をつないで想像したものです。それに“方色”という方角を色で表わす方法を用いたものです。すなわち東は青、南は赤（朱）、西は白、北は黒（玄）という色で描いたのです。だから、南は朱で鳥（雀）で描いています。しかも決められた西の方角を向いています。

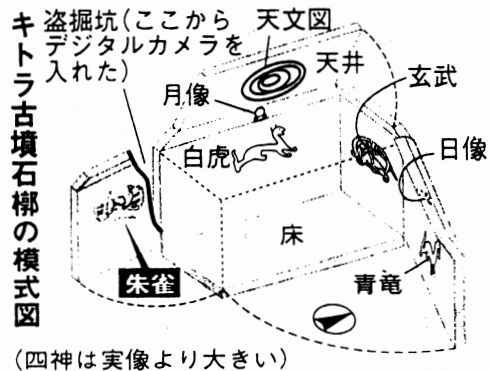
今度発見された鳥の絵を見ますと、今まさに飛び立とうとする姿を力強く描き、迫力があります。筆の使い方をみますと絵師は左利きであったとも思われます。

頭には長い曲線の冠羽、楕円形の目、鋭い嘴、大きい耳朶と肉垂、精悍な表現です。また風切羽という翼を搏たかせ、左足を曲げ、右足を伸ばし、美しく長い尾羽表現しています。

中国や高句麗の古墳壁画にも四神の朱雀図はありますが、キトラのものとは異なります。すなわち高句麗の代表的な壁画古墳である江西大墓、中墓のものは静止する姿を描いています。その他歩行するものもありますが、キトラ古墳の場合は飛び立とうとする瞬間の躍動的な姿を描いています。

また、玄武図も鮮明に写し出されました。東アジアの古墳壁画のなかには玄武図がありますが、蛇の絡まり方に特徴があります。キトラ古墳の場合は高松塚と同様のものと判断できます。

今回撮影されました壁画は四神が揃っており、高松塚古墳で欠けていたものを補ったということでも重要ですが、飛翔しようとする朱雀の絵は日本美術史上極めて貴重なものとして、今後も話題を呼ぶことは間違いありません。



キトラ古墳石槨の模式図

(四神は実像より大きい)

キトラ古墳

高さ3・3メートルの上下2段の円墳で、

下段の直径は約14メートル。高松塚古墳よりやや小さい。

「キトラ」は字名「北浦」のなまり、盗掘坑から玄武や白虎を見た人が「亀虎」と言い伝えたなどの説がある。

被葬者には天武天皇の皇子、貴族の阿倍御主人（あべのみうし）（703年没）らが、壁画の画師（えし）には

高句麗系渡来人が有力視されている。

(二〇〇一年四月四日(水) 読売新聞より)

世界の植物園

イギリス・アイルランド編

光岡 祐彦

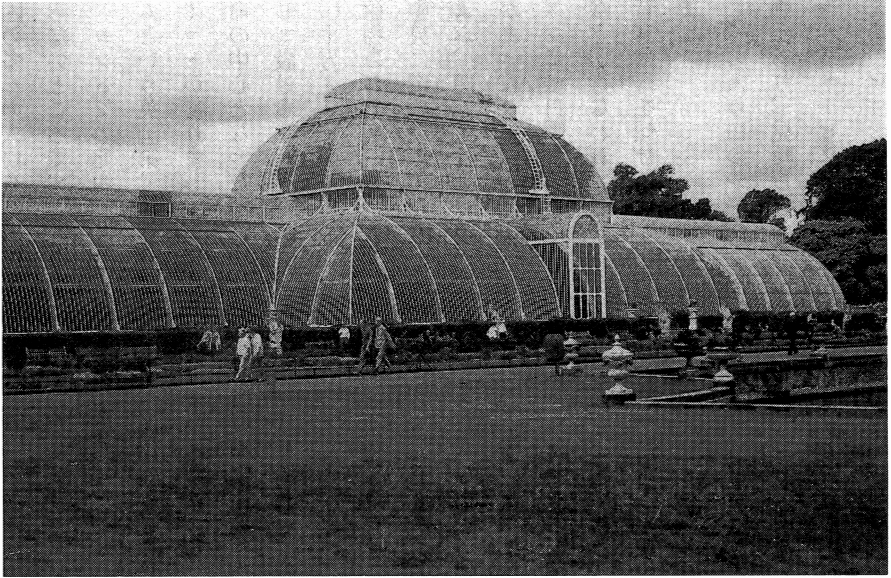
日本の最初の植物園は、東京都文京区の小石川植物園であることは前回お話ししましたが、徳川幕府によって貞享元年（一六八四）に設けられた小石川御薬園がその始まりです。吉宗はその規模をさらに拡大し、敷地内に小石川養生所を設けたことは有名です。現在は東京大学理学部の付属植物園になっていますが、一般に公開されています（都営地下鉄三田線「白山」下車）。

このように、植物園が薬草園から出発しているところは、世界でも珍しいことではなく、現在でも薬学部に所属しているところがしばしばあります。植物は古くから人々にとって食用について、薬用として利用することがいかに重要であったかがわかります。そのため植物を薬になるものと、よく似ているが異なるものに区別することが必要で（専門用語で同定と言います）、植物園では植物を育成、展示するだけでなく、いろいろな基礎研究

が行なわれています。この点が単なる公園と異なるところです。

今回はじめに紹介したイギリスの王立キュー植物園は、植物の同定、登録の面で世界の中心ともなっているところです。ロンドン市内西南部のテムズ川沿いに一二一ヘクタールの広い敷地を擁し、三〇、〇〇〇種の植物が育成、展示されています。地下鉄の「キュー・ガーデンズ」の駅から歩いて一〇分くらいの大変便利なところにあります。園内には大温室が三ヶ所あり、最も古いのは一八四八年に建設されたものですが、パーム・ハウスと称し主に熱帯植物が展示されています（第一図）。ほかにロックガーデン、高山植物園、分類園（科別の展示）、有用植物園などもあり、ざっと見るだけでも一日かかります。

植物の専門家が新種と思われる植物を発見したとき（このような機会は現在非常に稀ですが）、国際的な学術



第一図、ロンドン、キュー植物園の温室パーム・ハウス

雑誌に命名とその植物の性状、生態、類似植物との違いなどを発表し、キュー植物園の標本庫にさく葉標本を送って、異論が出なければ新種として登録されることとなります。キュー植物園はこのように学術的な分類のセンターとなる大変重要な施設なのです。

ロンドンに行かれた機会に、もし時間があれば是非一度訪ねてみてください。中には昔のオレンジ温室（オランジェリー）を改造したレストランもありますし、ガーデニング関係のグッズ、本や、カードなどの土産物を売るポタニカル・ショップもそろっています。また最近日本でも趣味とする人がふえてきた、ポタニカル・アート（植物画）の展示室もあります。

イギリスは緯度から言いますと、ロンドンがカムチャツカ半島の南端あたりに位置し、夏でも日本に比べるとそんなに暑くなく、いろいろな園芸植物がよく育ちます。また冬も近くにメキシコ湾流が流れて、緯度から想像する程寒くありません。ガーデニングに非常に適した気候となっています。日本も夏がもう少し涼しければ、園芸も楽になるのと思いますが、むし暑く雨の多いモンスーン気候なればこそ、イネや多彩な作物も良く育ち、この

国の多くの人口を養えるのだと思うと我慢しなければならぬところでは。

ロンドンの北西、イングランドの中央部にパーミンガムという英国第二の都市があります。数年前もここでサミットがありました。一八一―九世紀のイギリス産業革命の中心となった工業都市ですが、当時の富裕層が出資して設けられた植物園があります。面積も約七三、〇〇

〇平方メートルで、熱帯植物温室、サボテンなどの多肉植物のガラス室もあります。この植物園で印象的なのは中央に広い芝生があり、その真ん中にバンドスタンドとよぶ、四方吹き抜けの白いあずまやのような小さい建物があったことです。一種の野外ステージで、サマーシーズンには日曜日の午後など、実際にプラスチックバンドの演奏などが行なわれているそうです。みどりの芝生に座って音楽に耳を傾けるなど、さぞ素晴らしいだろうと想像します。

園の入り口のやや小高いところにテラスとよばれる一画があり、見晴らしの良い部屋にレストランがあります。セルフサービスですが、メニューと称する定食をとりました。イギリスの植物園のレストランでは、昼食にビー

ルとかワインを飲みたいと思うと、必ず定食を食べなければなりません。たとえばサンドイッチとビールくらいをと思っても、ビールやワインは飲ませてくれません。イギリスではレストランがアルコール飲料を客に出すのには、時間によってなにか条件があるようです。このことはキュー・ガーデンでも、エディンバラの植物園でも同じです。

園内を回り一汗かいたところで、ビールでも飲みながらゆっくり食事するのはじつに楽しいことです。しかし私はいちどこれで失敗したことがあります。それはキュー・ガーデンのレストランで、ローストビーフの定食を食べたときのことでした。イギリスへ来れば有名なこの料理を食べなくてはと思ひ、勢い良かぶりついたところ、これが日本のようにやわらかくないのです。とくに縁がかちかちで、良い色に焦げきっています。歯の丈夫でない私はみごと前のさし歯を折ってしまいました。おかげでイギリス滞在中しばらくは、食事の時には気にせざるを得ませんでした。皆様の中でも歯の弱い方はイギリスのローストビーフにはどうぞご用心の程を。

スコットランドのエディンバラ植物園も王立です。こ

こまで来ると大分北になるので、ちょっと曇ったりしぐれてくると、八月でも肌寒くなってきました。それだけにエリカのコレクションは見事なものです。最近日本でも花屋で、切り花や鉢物で二―三種が売られるようになりましたが、涼しい時期は良いのですが高温多湿の夏を越すのが大変です。エリカはツツジ科の低木で、世界には南アフリカと北ヨーロッパに分布しています。英語でヒースとよばれ、荒野にピンクの小さな花を咲かせ、点々と群落をつくっているのは独特の風情があります。八月にエディンバラ植物園に行かされると、いろいろな種類のエリカや近縁のカルナの花が楽しめます。この植物園のロックガーデンも見ものです。涼しいので、ヒマラヤやヨーロッパの高山植物が多種見られます。

エディンバラから鉄道で一時間あまり西に行ったところに、かつての工業都市グラスゴーがあります。造船や繊維産業で栄えた都市ですが、なかなか立派な植物園があります。ここのハーブ園で、北ヨーロッパに多いアンジェリカを見ました。日本のシシウドやアシタバに似た植物ですが、葉柄の砂糖漬けをケーキの飾りつけに使います。日本ではアンジェリカが入手しにくいので、フキ

の葉柄を代用にします。ヨーロッパではアンジェリカの根も薬用にし、またジンのかおり付けにも用います。因みにジンにはこの他、多種の薬用植物が入っています。例えばアーモンド、レモンの皮、甘草、ネズの実、イリスの根、コエンドロ、肉桂その他です。ジンもともと薬用酒だったのでしょう。

グラスゴーの近郊にペーズリーと言う小さな町があります。一時日本でもペーズリー模様が流行ったのを覚えておられますか。私もこの町がこのデザインに何か関係があるのではと思ひ、物好きにも訪ねて見ました。ペーズリー博物館と言うのがありましたが、改装のため休館していました。そこで市の観光案内所に行き、この町と模様の関係を質ねや々と判りました。もともとペーズリーはインドのカシミール地方のショールの模様だったので。それをイギリス人がもち帰り、評判になったのでペーズリーで盛んに生産され、模様の名になったと言うことなのです。植物とはあまり関係がありませんが、疑問が一つ解けてほっとしました。しかしこんな旅も閑人なればこそです。

イギリスではこのほかライとヨークの町を紹介しまし

た。ライはロンドンから鉄道で二時間あまり南に行った。ドーバー海峡に面した小さな田舎町です。一六〇〇年代にフランスとの密輸で栄えた港町ですが、いまはその面影もなく、古いティンバーフレーム（柱や梁が壁から出て見える）の家並みがそれぞれ美しい花で飾られています。イギリスは地震や台風もなく、湿度もそんなに高くないので、軒の傾いている古い家もじつに大切に現役で使われています。

私は旅先でつとめて町の市場を訪ねることにしています。今回はスライドで、ライやイングランド北部の都市ヨークでの果物や野菜を紹介しましたが、概して気候が涼しいせいか、日本に比べて種類や量とも貧弱です。ブラックベリー、ラズベリーは、いずれもキイチゴの類ですが生のものが安くで売られています。生のまま食べても美味しいのですが、よく鹿などの獣肉料理にソースとして使われます。またフラットマッシュルームと称して、日本にもある西洋キノコの傘の開いたもの（直径七―八センチ）があります（第二図）。イギリスではイングリッシュ・ブレットクファーストと称して、朝食をたっぷりとするのが有名です。トーストに卵、ベーコンまたはハムと



第二図、ライの果物屋、中央下からブラックベリー、ラズベリー、その右フラット・マッシュルーム



第三図、ヨークの市場で、中央左からリーキ（ネギの類）、スエード、イタリア・ウイキョウ

かソーセージ、少量の野菜いためなどがつきませんが、これによくフラットマッシュルームのいためものが出てきます。イギリスの食事は、日本に比べ一般に野菜料理が少ないように思いますが、日本ではほとんど見られない野菜も市場で売られています。ヨークの市場ではマロー、スエード（スエーデンかぶ）、イタリア・ウイキョウなどが目につきました。マローは最近日本でもときどきスーパーで見られるズッキーニと同じものですが、中に肉をつめてオーブンで焼いたりします。ズッキーニもそうですが、これはキウリの仲間ではなく、カボチャの一種です。スエードは日本へも明治に一度入ったことがあります。美味しくなかったのかあまり普及していません。カブの類で、ゆでてマッシュしたり、シチューにしたりして食べます。イタリア・ウイキョウは葉柄が太るウイキョウで、煮たり生食したりチーズのつけあわせにします（第三図）。

さて、つぎはイギリスを離れて西の国、アイルランドに行きましょう。北海道とほぼ同じ広さの島国ですが、北の一部は未だイギリスに属しています。このことはこの国の悲しい歴史を象徴するもので、もとはBC二〇〇

年頃よりケルト人（ヨーロッパの先住民族）が住みついていた国ですが、一二世紀ごろから英国に永く支配され、一九四九年にやっと独立が認められました。しかし北の一部はなお英国の支配下に残され、紛争の種になっていることは皆様ご承知の通りです。言語は一般には英語が話されていますが、公用語はケルトの言葉ゲール語と英語で、道路標識も両語で並記されています。因みにスコットランドとその西へブリデーズ諸島、ウエールズもケルト族で、ゲール語が話されている地方もあるとのことです。

ダブリンはアイルランド（アイルランド共和国）の首都で、町の北はずれのグラスネヴィンに立派な植物園があります。一七九五年に創設された歴史のある植物園で一九・五ヘクタールの広さがあります。アイルランドの気候は英国とよく似ています。夏もさ程暑くなく、日中もさっと通り雨がふるようなことが再々です。時には寒いくらいの時もありますので、セーターやジャンパーで調節する必要があるくらいです。

歌曲で「庭の千草」と言うのをご存じですか。アイルランド人のトーマス・ムアが民謡のメロディに作詞し

たもので、国民的歌曲となっています。植物園の門に入ったところに、一本のバラの株と、歌詞と五線譜の書かれたラベルが立っています。私はこの植物園で、はじめて本当のアマリリスを見ることができました。園芸植物で呼ばれているアマリリスは、実は学名ヒペアストルムと言う属の一種なのです。真のアマリリスは南アフリカ原産で、ヒガンバナやネリネに似た植物でした。この類は「花見ず葉見ず」と言い、花のあるときは葉がなく、葉の出ている時期は花がないという性質のもので、丁度花が咲いている時に出くわしましたが、大型のとても美しいものでした。種名がベラドンナ（美しい婦人）と言うのもむべなるかなと思いました。

アイルランドやイギリスにはルバーブと呼ぶ野菜があり、この植物園のハーブ園で見ました。日本人にはなじみのないものですが、これらの国の市場には大抵見られるものです。ジャムやプディングにして食べるのですが、われわれ日本人には、あまり美味しいものではないとのことです。実はこの植物は漢方で下剤としてよく用いられる「大黄」の仲間で、もともと一六世紀に中国から導入されたものです。こちらの人は野菜をあまり摂らない

ので便秘がちとなり、このような野菜が好まれるのかも
しれません。タデ科の植物で大きな葉の柄が利用部位で
す。この植物園には美しい花の小径があり、両側に珍し
い花々が咲き乱れていますが、その入り口近くに次のよ
うな格言が書かれたラベルが見られました。

Kind Hearts are the Garden

Kind Thoughts are the Roots

Kind Words are the Blossoms

Kind Deeds are the Fruits

これを見て、何とも言えないすがすがしい気分になっ
たことでした。

アイルランドの西の海に、セーターで有名なアラン島
があります。ここでは住民の間で、今でもゲール語が日
常に話されています。この島の船着場近くでゴボウの野
性種が見られました。ゴボウを野菜として食べるのは、
世界でも日本だけです。ところが日本にはこの植物の野
性種はなく、古く中国から渡米したもので、薬用にしか
使われていません。それが日本で野菜となったのは不

思議なことですが、アイルランドやイギリスには野性種
がじるのです。ちょうどアザミに似た紫色の花を咲かせ
ていましたが、何か懐かしい思いがしました。

アイルランドには、ヨーロッパ大陸からケルト人が渡
来する前の先住民の遺蹟が各地にあり、直径八〇メー
トルを越す大きな円形墳墓も見られます（ダブリン近くの
ニューグレンジ）。また氷河期に形成された独特の地形
も見物できます。

海外旅行で植物園を訪ねることは、時間的な余裕がな
いとなかなか出来ないことかも知れません。しかしどの
国でも、植物園はそれぞれの国の市民文化となっていま
す。休日など三々五々市民が植物を見ながら、ラベルに
見入ったりして楽しむ平和な風景がみられます。

植物はこの地球上に二五万種ほどあると言われていま
す。最近言われている生物の多様性を大切にすることも、
植物園の役割は重要です。一度失われた種を、人為的に
再生することはほとんど不可能です。一度失われた文化
を再生することが不可能なように。

わが半世紀

広田省吾

『黒部川第四水力発電所』通称『クロヨン』は、今年古希を迎えた私の心の底に特別の響きをもって呼びかけてくれます。昭和一桁生まれの私達の年代も激動の昭和を生きて来たと思います。日本の国にとって世界相手の戦争から有史以来初めての敗戦は、何もかもが無からの出発で始まりました。

私は昭和二十五年、奈良に本社がある貸し蒲団の会社に入社しました。当時日本の電力不足から、各電力会社は電力補充のための山間にダムを建設、水力発電所を建設していました。私も建設工事場で働く人の寝具を貸出する為岐阜県の丸山ダム、岐阜県と静岡県の県境の佐久間ダム、静岡県の秋葉ダム、そして岐阜県の坂下ダムの工事現場から、社命で大町に赴任したのは昭和三十一年の秋でした。今でも当時の国鉄大町駅から出ると眼前に紺碧の空に光輝く白銀の峰が迫って呆然としたのを覚え

ています。『これがアルプスの山なんだ』と。アルプスの山々から見ると優しい女性的な奈良の山々、又富山に居る時の立山連峰を遙に望んでいたのですが、こんな目の前に、突然現れたように圧倒される思いでした。

関西電力が社運を賭して建設しようとする黒部川第四水力発電工事は極めて困難な工事だと思われました。

今迄の発電所工事との一番の違いは資材の輸送路が無いと言うことでした。富山側から人力とヘリコプターで始まったのですが、とても量と手間で間に合わず長野県大町側からトンネルを通す大町ルートの工事が始まりました。私達の会社は此の工事での最大の取引先は第一工区を担当する間組でしたが、間組の大町側の宿舎が建つ扇沢(地名)まで、職員や労務者用の布団を小型トラックで運搬するのですが勿論、最初の頃は車が通るような道は無く登山道をゴム毬のようにはずみながら走りまし



扇沢雪景色 昭和32年

た。急坂で自力で走れなくなるとワイヤーで車をつなぎ、上にあるディーゼルエンジンの巻上げ機で運び上げたものでした。

大町トンネルの工事は三船敏郎、石原裕二郎主演の「黒部の太陽」などで知られるごとく困難の連続でした。新しく開発された十四連製全面掘削ジャンボ等により順調に進んでいた掘削は日本列島を新潟県糸魚川から、岐阜県を縦断する破砕帯に会って湧水が激しく、遅々として進みませんでした。そして厳冬がやって来ます。私も大町市でマイナス十三度を経験しております。まして現場は標高一千四百米です。工事は一日でも早く完成するため十二月ぎりぎり迄続けられました。越冬をする人の寝具を残して一度に何百人分が戻って来ます。トラロックに蒲団を四、五百枚を積み込むのですが、固定する為ロープで縛る時、作業用綿手袋が引っ付くのです。又完全な防寒用の靴が無かった為、長い時間の雪中の作業は凍傷寸前までいって足の指先がしびれたようになって四、五日正常に戻らないこともありました。

それでも関電、担当区の熊谷組、間組の必死の努力により大町ルートの特トンネルは昭和三十三年二月二十五日

午後七時四十分開通しました。開通直後、間組の職員の人達とトンネルを徒歩で通りました。大町側の事務所から現場事務所へ短波無線で連絡をとり、工所用トロッコで行けるところまで行き、あと開通直後の瓦礫の中を這うようにしてトンネルを出ました。それでも車輛が通れるようになるまで食料等は人力で運んでいました。

開通したトンネルを工用の車輛が通れるようになって資材がどんどん運び込まれました。そのために黒四工事資材専用の北大町駅が作られました。当時の私達の常識を遥にこえた大型の機械や車輛が続々搬入されました。大人の身長くらいのタイヤを履いたダンプトラック（インターナショナル製）小山でも動かしかねない鉄の固まりブルドーザー（キャタピラー社製）等々、国道の輸送には一般車輛の邪魔にならぬよう深夜に運ばれました。堰堤の基礎になる岩盤が出て、工事を早める為、兩岸の斜面を一〇〇トンの火薬で爆破されたりして堰堤のコンクリートの打ち込みは徐々にそして確実に打ち込まれて行きました。

秘境と呼ばれ、人を全く寄せつけなかった黒部峡谷で、山が削られ川底に堰堤が作られて行く様は、そこに蟻の

ように働く人間と自然との闘いに思えて壮絶なものを感じました。

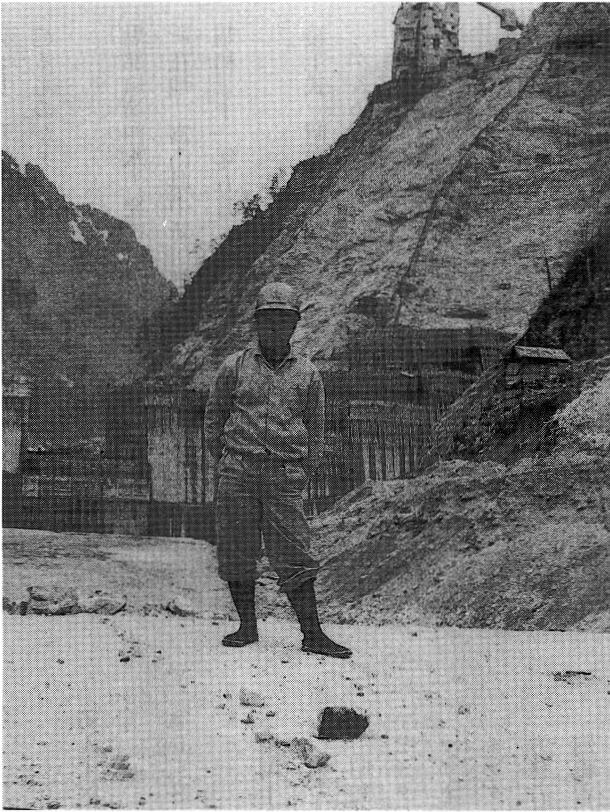
黒部川第四水力発電所は昭和三十八年六月完成しました。私は大町に赴任五年目の昭和三十六年、完成されたダム の 勇姿を見る事なく、大阪に転勤しました。

終戦の年は私は、旧制中学二年でした。全国民が食べることに精一杯の毎日でした。何しろ米の配給にキューバ糖が配られた時代でした。旧制中学から、新制高校への移行、教師も生徒も“民主主義”の名に踊らされて、手探りの日々でした。次に待っていたのは、最近程では無いかも知れませんが就職難でした。

最近、私の人生の中で、青春と呼べる時代は何時頃、だったのだろうかと考えます。学生時代から二十代前半は、国も人も、何もかもが貧しく青春と呼ぶには淋しい気が致します。そして、黒四工事に携わった五年間こそ遅ればせにやって来た青春ではなかったと思います。

大町の五年間は仕事に、私生活にともに我を忘れて打ち込める事が出来ました。私は大町で結婚し大町で長男が生まれました。

当時の建設会社の組織は親会社があり、その下に親方（班長）がいて労務者はその親方の下で働いていました。多くの労務者は季節労働者で主に東北とか九州地方の方々でした。親方の出身地の人がその親方を頼って働きに来ておられました。



黒部ダム 昭和35年

私も始めて経験する大きな工事の現場で、勝手が分からずうろろする私を、かばい暖かく見守ってくださいる親方がおられ、私の長男が生まれた時には、故郷を離れている私を可哀想に思われてか、お宮参りの晴れ着を送ってくださいました。その親父さんが亡くなられて、息子

さんが後を継がれたのですが、親父さん同様、私と仕事を離れたお付き合い合いをしていただきました。

当時としては想像もつかぬ難工事と苛酷な自然とに戦いながら、皆が工事の完成を目指して、それこそ一丸となつて働いたようにおもうのは、私だけだったでしょうか。そして、人と人の触れ合いの大切さを学びました。

私が完成された黒四ダムを訪れたのは大町を去ってから二十九年後でした。ダムは豪快に放水していました。トンネルが出たダム側の山肌に殉職者の名を刻んだ慰霊碑がありました。それ

を仰ぎ見て私の中の当時の事が断片的に思い出されて胸に迫るものがありました。

黒部川第四水力発電所(通称クロコン)概要

所在地 富山県中新川郡立山町

昭和三十一年五月 建設事務所設立・大阪関電本社内

六月 現場開設

竣工式 昭和三十八年六月

ダムの高さ一八六米 ドーム型アーチ式

総貯水量一億九九二九万立米

有効貯水量一億四八〇〇万立米

発電の出力二五万八〇〇〇KW

総工費三七〇億↓最終的五一三億 約七年

所要セメント五七万吨

鋼材一万七〇〇〇トン

大町ルート案 大町市↓ダムサイト迄二一キロ

アルプスをぶち抜くトンネル五、四キロ

第1工区 間組 ダム取水口 水路トンネルの一部

大町トンネルの一部

第2工区 鹿島建設(株) 骨材採取 製造・運搬

第3工区(株) 熊谷組 大町トンネルの一部

黒部ルートトンネルの一部

第4工区 佐藤工業 黒部ルートトンネル

水路トンネルの一部

第5工区 大成建設 水圧鉄管路 インクライン

発電所・変電所

掘削十四連製全断面掘削ジャンボ

(大町トンネル) 導坑・迎え掘り導坑

昭和三十三年二月二十五日PM七時四〇分

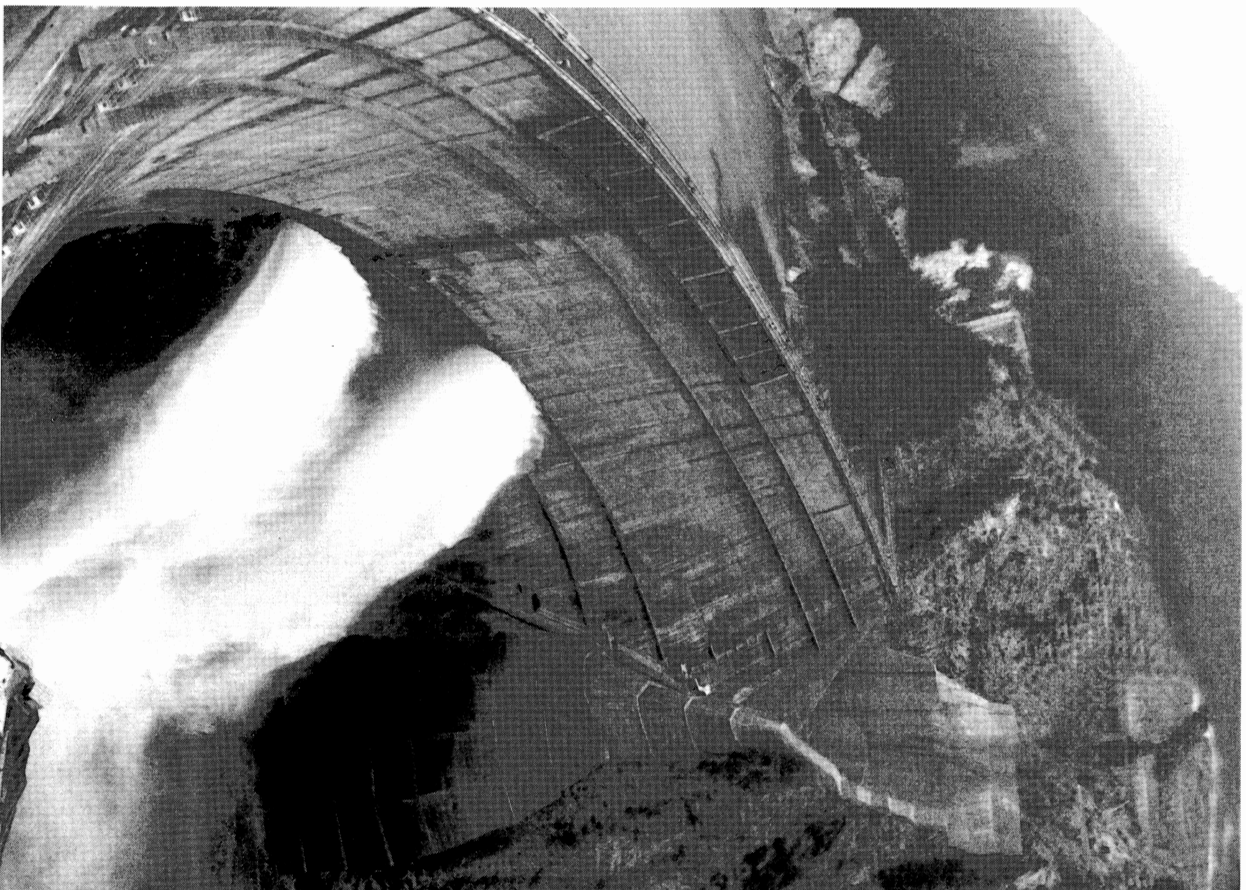
キャタピラー社製 ブルドーザー

マリオン社製 パワーシャベル

インターナショナル社製 ダンプトラック

労務者数延一〇〇〇万人

殉職者一七一人



黒四ダム (六枚合成による)

俳句

前かがみ

故牧野春駒

雪吊の縄ひっぱりし巖かな
二上に弾み落つ日や畑打
寒釣の立ちて人語の蘇る
見てをりし狐の眠りはじめたる
二夕もとの蘇鐵の間を神發たす
朴白き山より雨の来るかな
睡蓮の花傾けし巖あり
蓮池の真中割って通る風
回廊にとりまかれたる炎天よ
天城山へ前かがみなり甘茶佛

木^ぼ

瓜^け

牧野和代

神の桶溢るるもののみな氷柱

咆哮^{ほうこう}の吐く息は黄か春の雨

代々のそも朔^{ついたち}の根深汁

冬川のゆるやかにして音高し

ウインドウにポインセチアとネクタイト

満目の浮草に向く一軒家

何か物言ひたげな木^ぼ瓜^け濡れてるて

一つ空一つの花が占めてをり

さくら人ふえて青空一かけら

花散るや嫉妬の妃眠らせて

虚子の塔

伊藤柳紅

寒夜

上田千代子

散る花の川の右より左より
鉾建てて歪みを正す楔打つ
秋篠の苔より走る水燈めり
虚子塔の露けき路を掃き申す
近景も遠景も良し曼珠沙華

真すぐに朝日あつめし水仙花
娘去いに一人寒夜を深めけり
梵鐘の余韻をつつむ彼岸寺
香煙を風にとられて辻地蔵
あたたかや園児の遊具どれも揺れ

小春

上田善次

鳥帰る

岡良子

へめぐりて梅と出会いし城跡かな
ひらひらと蝶と花びら重なりぬ
種々の色面白き若葉かな
このどぶに根付いて十年布袋草ととせ
腰おろす石の冷たき小春かな

黙々とサンタクロース立つロビー
紺匂ふ作務衣の賀客うひうひし
点の火の面と化したりお山焼
大池の木の橋渡る余寒かな
くの字からSの字となり鳥帰る

鶯の声

柏木一枝

透きとおる鶯の声一人居に

うらら日の娘の待ちくれし昼餉かな

草むしり終へ庭先のチュウリップ

腰痛も生なるあかし雪柳

春風に言葉交せばおなじ齡

上昇氣流

込山山歩

寒林やわが足音と松籟と

葛城の上昇氣流鷹舞へる

涅槃会の腹破れたる魚板かな

蓬萌ゆ土堤に聞ゐる鱸のさしみ

句会果つ空まつすぐに鳥帰る

みの虫

喜多まさ

春被岸曾孫の手とり墓参り

片言の増ゆる曾孫と春惜しむ

出不精の見頃の花に誘はれて

命綱垂らしみの虫下りてくる

長閑さや猫尾を振って応へをり

菴の鳥

周藤智子

菴の鳥けたたましくて夏来たり

千どり児の手を足を誉め小春かな

母病みて木の芽花の芽すくなかり

香をためて露味憎小さく目立ちけり

二つ目の大役終えて緑立つ

家宝

多田文子

社家町

南村照栄

大晦日家宝の短冊掲げけり

沈丁の風向き変る香に逢ひぬ

バス停へ五分足らづを風花す

去にし娘の温みちやんちゃんこを畳む

玄・心と孫の名呼んで三ヶ日

櫓の宿

辻 しま代

風花

西 田 たまみ

一筆が追伸も書き萬年青の実

秋刀魚干す本家に仕舞ふ大漁旗

磯神の岬に今日も浪の華

間延びして五時打つ時計櫓の宿

薄紅葉園の蛇口は緩むまま

小春日や社家町筋のしんとして

大晦日のことも一緒に初日記

手術あと色薄くなり春立つ日

走り出すやうにこぼれて雛あられ

古雛面ざしすこしやつれしか

頬を吹くまのうとちがふ春の風

トラックの荷のことごとくトマトかな

たつぶりと水撒く夕べ土匂ふ

戸を締める音のどこかに夜の秋

風花やパン焼きたたと貼り紙に

節分祭

東京の水軟かき春隣

両の手の荷物下ろして龍の玉

古の面の重さよ節分会

隈どりの一筆箋や冬籠

京の町流れに浴ひし寒椿

西山 佐代子

落し文

春立つと猫に言ひ聞かせてをりぬ

落し文よべの湿りの中にあり

夜に目覚めても大滝は落ちつつ

片陰の切れ切れなるを拾ひつつ

石路咲いて海女の撫でゆく潮仏

藤澤陽子

春雑感

三極の花ほの白く雨の庭

鶴鴿の轉りを消す滝の音

水音の高き山間やまあいを行く通路かな

仏像展都忘れの花を添へ

信貴山頂より
春暁の霞の底の奈良のまち

藤井よし治

墨絵

ゆかた着て帰る無言の夜の雨

袖に来る蟬止まらせて御命日

髪染めて女に戻る団扇かな

過ぎし日や庭うろろと懐手

枕屏風立てて淋しき墨絵かな

堀池敏子

草 笛

雛の笑み

三 井 サチ子

森 田 陽 子

通るたび詣でる寺の鬼貫忌

春を待つ心に赤き服を買う

草笛を吹きゐし子はや就職す

雛の笑み過ぎ来し方を語るげに

眼をこらし摘みし蕨のかくばかり

慰霊碑は落花の中に黙禱す

苗札の付きたるままに貫ひ来し

花みずきピルの東京彩れり

詣らるる頃と庭掃き水を打つ

パレードに湧く御堂筋新樹萌ゆ

生死涼しく

温め酒

村 上 俊 子

山 内 梅 乃

寂聴尼生死涼しく語られし

温め酒顔ほころびて夫若し

受話器置くそこはかとなき秋思かな

養虫の糸一本に柱まひをり

帯解の子のもてあます袖袂

孫と見る月に兔の住む話

輪飾の藁のもつとも匂ひけり

七輪の昔なつかし秋刀魚焼く

髪白き童にかへり雛あられ

秋の風汗して遊ぶ子にやさし

みかんむく

吉澤幸江

球根を植えて日和の登さがり

声一つのこしてかもめ冬の海

立ち動く障子の影や曲り角

みかんむく爪にはじける香りかな

星一つ冴えて手に取る近さかな

古代紫

和田美代子

縫ひ初めは古代紫小ざぶとん

雑草の根つこの力日脚伸ぶ

大いなる地球の円み春の潮

かたまりてあやしくゆれる花芒

冬陽さす一刀彫りとなる木の香

曾呂利新左衛門頼知の事

堺の鞘師、始めて太閤に謁しける時、太閤「汝の姓名は何と申すぞ」と問ひ給ふに、其の者の對ふるやう、「臣が姓名は即ち曾呂利新左衛門と申し候」と。太閤、「ははあ。奇なる姓もあるものなるかな。して、その曾呂利と申す姓には、何ぞ所似にてもありつるものか」と問ひ給ふに、又、對ふるやう、「聊か所似これあり候。別義にあらず。臣の拵たる鞘は堅くして、そろりと入りて敢てつかへず。是を以て曾呂利と申し候」と。太閤「これは奇なり。又、時折、来るべし」と。

他日、太閤に謁しけるに、太閤問うて曰く、「汝の名は何と申せしな」。對へて曰く、「曾呂利曾呂利新左衛門新左衛門」と。太閤怪みて、その重ね言葉を尋ね給ふに、新左衛門對ふるやう、「殿下、先に臣の姓名を問ひ、今、又、重ねて問ひ給はる。故に、臣もまた殿下の意に従ひ、同じく重言を以て答へ候なり」と。

『常山奇談』より

「渋谷越え」に辿りつくまで

柴田晃良

古代を考える『山辺の道』（吉川弘文館）の一八頁に、和田 萃先生は、「奈良山丘陵を越えるルートとして、般若寺の側を通る奈良坂越え、JR奈良線の走るコナベ越え、歌姫越え、渋谷越えの四ルートが存在していたが、平城遷都以前においては、コナベ越えと歌姫越えが用いられていた。」と記述されている。私は、「渋谷越え」と呼称されるルートを全く知らなかったので調べてみたが、地誌類に見だせず氣に止めていた。そして今夏、檀原考古学研究所附属博物館で、『友史会報』第三九四号に「・・・現在、近鉄線が走る「渋谷越え」・・・」とあることを教わった。

そこで、『平城村史』を見ると、

◎大字山陵に小字シル谷（三六二頁）があり、

◎シル谷（近鉄京都線が通じている）にはシル谷川

（渋谷川）が北流して木津川に注ぐ（三六四頁）

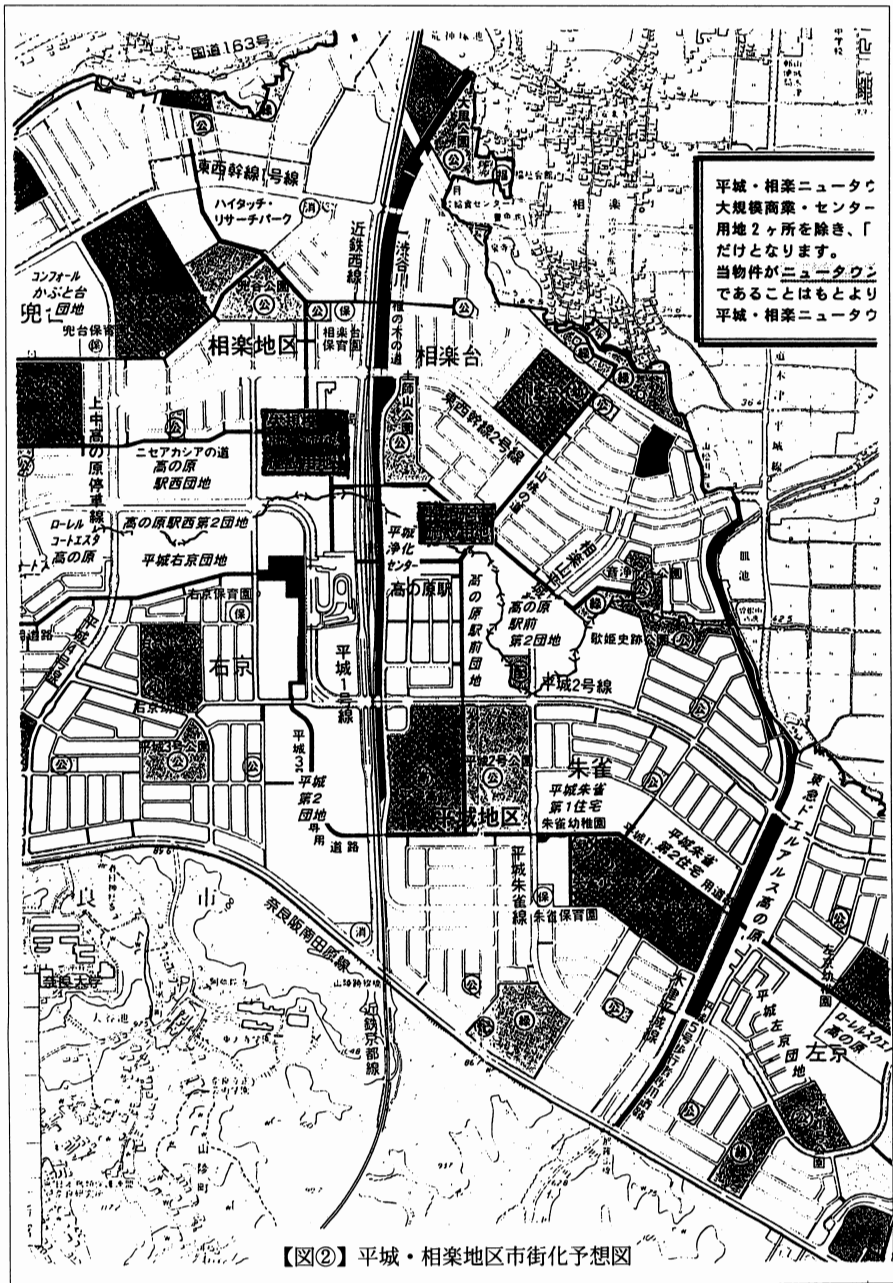
ことが記されている。しかし、

◎歌姫越えが近世において、盛んに利用されていた様子（三五六頁）は記述されているが、「渋谷越え」は全然でていない。

大正一一年測量図【図①】をみると、現在、近鉄京都線が通っている神功皇后陵と成務天皇陵の間には南北の道がなく、歌姫越えの西に、瓢箪山古墳の東側を北へ進み、塩塚古墳の西側を通過して、現在、近鉄線が走っている、シル谷（渋谷）に入り相楽村へ通じる南北の道がある。

また、平成九年七月作成、平城・相楽地区市街化予想図【図②】で、渋谷川は高の原駅のホームの東側を平行して、北へ流れていることを知った。





私は、昭和五六年（一九八一）の初詣に、歌姫町の添御巢坐神社へお参りした帰りに、車の往來を避けて歌姫街道から畦道を西へとると、南北に通じる小徑にでた。

この小徑を行くと、雑木林をぬけて近鉄線の東側を並行して北へ進み、ならやま大通りの高架橋の下にでたことがあった。この小徑の一部分は、今も車窓よりみるこ
とができる。

この小徑は、平成元年修正測量図【図③】にも載っている。

私は、この南北に通じる小徑が「渋谷越え」ではないかと考えて、県立奈良図書館の郷土資料室を訪ねて教えを乞い、あれこれ文献を調べて貰ったが判明せず思案していた処、「やはり、和田サンも執筆されている本にありました。」と言いながら、『探訪古代の道』1南都をめぐるみち（法蔵館）に掲載されているⅡ下ツ道の拡がりとうつろいⅡの中に、「渋谷越え」を見つけて下さった。（和田先生は同書に、Ⅱ史料からみた下ツ道Ⅱを執筆されている。）

そこには、古山陰道―特に南山城部分―の問題点、と題して、足利健亮先生が詳述されている中に、松林宮の

遺構の発見により、下ツ道の北延長イコール歌姫越（古山陰道で丹波へ通じる）という固定観念は、歌姫越の道筋が松林宮域内に当たるから、少なくとも松林宮が存続した時期には古山陰道は歌姫越ルートではあり得なかった。と考えられて「・・・その最も有力なルートは松林宮西壁沿いの北上ルートである。この道がほぼまっすぐ北上して通過する谷には渋谷川が北へ流れ、山田川に合流して木津川に注ぐ。そこでこの道を渋谷越と仮称しよう。・・・」（四二頁）とあり、【図④】の地図「図12下ツ道―渋谷越と旧行政界（仮製地形図による）」が四六頁に載っていた。

これによって、「渋谷越え」は足利先生が考証された、平城京より丹波へ通じる官道「古山陰道」のルートであることを知った。

檀原考古学研究所附属博物館、県立奈良図書館郷土資料室のご厚意に預かり、この知見を得たことを感謝する。

〇〇・九・一九



【図③】平成元年修正測量図

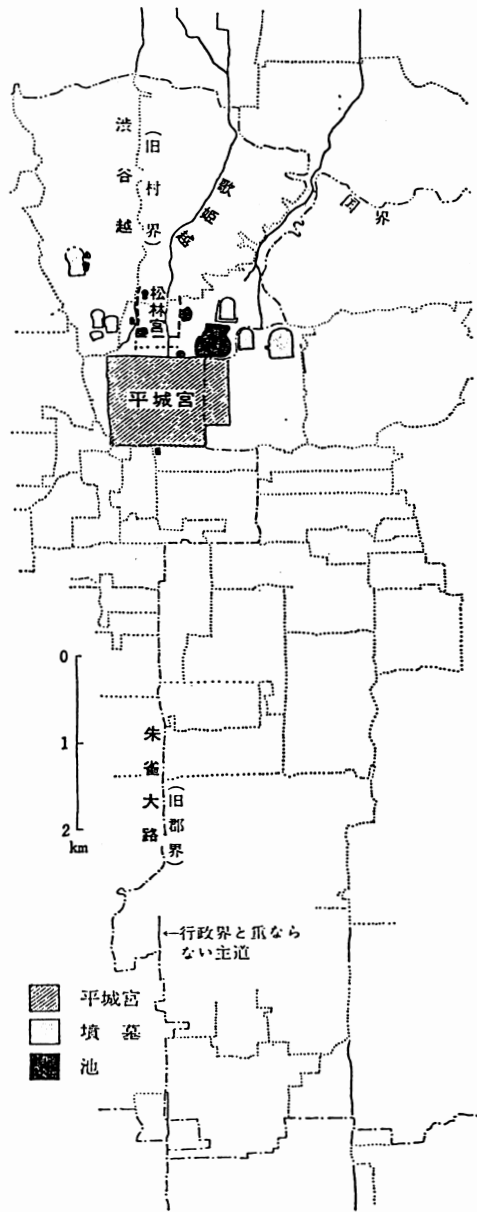


図12 下ツ道―洪谷越と旧行政界 (仮製地形図による)

【図④】『探訪古代の道』1 46頁より抜粋

あとがき

○ 木津町（一部精華町）の離宮跡／寺院跡の二説がある「樋ノ口遺跡」の調査概報、「木津古代の道」（広報きづ第二〇九号）にもこのルートが引用されている。そして少なくとも奈良時代は、下ツ道の北延長は「歌姫越え」ではなく「渋谷越え」が有力になつてゐることを知つた。

○ 木津町史 史料篇Ⅰ（七四五頁）に、次の史料があるのですが、このルートは奈良時代以後、官道ではなくなつたが、中世においても奈良と京都の往還に利用されていたのではないかと思える。

※サカナカノ八幡＝相楽神社。

一五三九（天文八）年一〇月、梅尾開帳参詣のため、多聞院英俊が吐師・相楽を経て京都へのぼる

「多聞院日記」天文八年十月条

廿八日、梅尾明後日開帳、参詣ニ京へ上了、後夜ノ過

（吐師）（相楽）

ヨリ坊ヲ立テ、法花寺ノ方へ行テ、ハセ・サカナカヘ行、シル谷ニテ山田ノムカキニ与七殿以下十人計

（祝園）

被来了、ハ、ソノ森ノ時分ニテ夜明了、天神ノ森ニ

（ヲカ）

テ飯ヲ食テ、ヨマキ行テ伏見ノ渡ヲ上了、ソレヨリ京へ七ノ時分ニ付了、宿ハ下京四条ノナラヤ三郎衛門所也、

一五三九（天文八）年一〇月、多聞院英俊の京都からの帰途相楽八幡宮まで迎えがくる

「多聞院日記」天文八年十一月条

朔日、下向了、上ノ如ニ下り了、

（相楽）

迎衆如前サカナカノ八幡ニテ中黒殿ヨリ道迎有之、奈良へハ夜ノ四ツノ時ニ帰了、

〇一・三・一五

ある明治人の日記より (三)

繪 内 正 久

明治二十四年(一八九二)五月十一日。訪日中のロシア皇太子ニコライ・サンドロビッチが滋賀県大津で沿道警備の巡查に切りつけられた。世に大津事件という。

「ある明治人の日記」の筆者南良吉は、この日の変事を新聞記事や目撃者の伝聞でかなりくわしくまとめている。今回は事件発生時の状況、次回は判決の二回に分けて彼の日記を紹介することにした。

ニコライ皇太子(一八六八—一九一八)は事件の三年後、父アレキサンドル三世の後を継ぎ帝政ロシア最後の皇帝となった。日露戦役はもちろん彼の治世下だった。

一九一八年七月革命で、一家七人もろとも銃殺刑に処せられた悲劇の皇帝だ。旧ソ連政府は二十二年前に七人の遺骨を発掘、遺伝子鑑定でそれぞれニコライ二世本人、アレクサンドラ皇后、アレクセイ皇太子、タチアナ、アナスタチア、オリガ、マリア四皇女と認定しエリツイン

前大統領が国葬を行い、改めて歴代皇帝が眠るサンクトペテルブルグ墓地に改葬した。昨年八月ロシア正教会も七人を無神論者の犠牲になった受難者として「聖人」の列に加え名誉を回復している。ニコライ二世は日露戦役敗戦と相次ぐ戦争で国家国民を疲弊させ、「血の日曜日事件」で民衆に銃を向け、怪僧ラスプーチンの政治介入を許したとして、ボルシェビキ政権の手で捕らわれ処刑された。

当時の日本はまだ不平等条約の下にあるアジアの一小国にすぎず、ロシアは世界の最強国を誇り日本の上下をあげてロシアの報復を怖れ、時の内務大臣西郷従道さえ「ロシア艦隊が江戸湾に侵入してきたら日本は占領される」と公言した。とにかく国民の大半はまだ英仏など連合艦隊の下関や鹿児島砲撃の恐怖が生々しく残り、京都では神戸碇泊中のロシア艦隊が神戸、大坂を砲撃、東京



ではロシアが宣戦布告をするとの噂が立つほどだった。

そんな物情騒然たる中、山形県最上郡金山村村議会は事件二日後、凶徒の滋賀県巡查津田三藏と同姓同名の「第一条 本村住民は津田の姓を付するを得ず 第二条 本村住民は三藏の名を命名するを得ず」と、村条例を可決。ロシアを怖れ国難退散を祈った対応のす早さに世人を驚かせた。

(註) 日記文を読みやすくするため、私の一存で適宜に一行あけや改行致しました。原文は句読点なく書き流しのためです。(筆者)

五月十日 我國賓トシテ上ハ帝室ヨリ下ハ四千万同胞が満腔ノ至誠ヲ以テ歡迎セシ露國皇太子殿下及び希臘國皇太子殿下ニハ、去月二拾七日午前八時長崎御着長崎鹿兒島兵庫大坂京都ノ諸府縣下御遊覽種々非常ノ御優待ヲ受ケサセラル 本月十一日當縣下ヘモ御來遊ナサセ玉フ御豫定ナリシヨリ官民一般ハ準備シ居リタルニ今朝ニ至リ、突然京都ヨリ兩殿下ハ同日直チニ御來遊アラセラルベシトノ報アリシカバ縣廳の混雜市民ノ狼狽一方ナラズ俄ニ國旗ヲ掲ゲ幔幕ヲ繞ラシ緑門花環等ノ出來ヲ取急ギ急ニ警官警衛ノ配置ヲ為スナド準備モ略ボ行届キ今や御來着遲シト待構ヘ居タルニ又々御模樣替トナリ愈十一日ニ決定セリトノ報京都ヨリ来リシヨリ市民一般茫然トシテ失望ノ体ナリシ

五月拾一日 午前九時兩殿下ノ御一行ハ京都ノ旅館ヲ出ダセラレ御來遊アリ 京都府滋賀縣ノ境界ニハ升形ノ緑門ヲ造リ上部ニ日魯希三國ノ國旗ヲ交叉シ色紙製ノ大ナル楠玉ヲ吊セリ 陸軍歩兵第九聯隊及び官吏送迎ノ有志ハ兩側ニ整列シテ奉迎ナシタリ カクテ兩殿下ノ御一行ハ木村警部ノ先導ニテ腕車ヲ轆セラレテ御着来アリシガ兩殿下トモ単色山高帽子ニ縞羅紗ノ背廣ヲ御着用在ラ

セラレ、イト御手輕ノ扮装ニテ御氣色麗ハシク直ニ三井寺ニ赴カル 月見臺ニテ両殿下及有栖川威仁親王殿下ヲ請ジ奉リ御小憩アリ茶菓ヲ饗シ書ヲ英語ニ翻譯シテ御覽ニ供シタリ 且ツ琵琶湖ノ風景ヲ御賞覽アリ此時三保ヶ崎ニテ烟火ヲ数多打上ゲタリ 正法寺ニ入ラセラレ石山寺ノ寶物圓満院及坂本来迎寺其他ノ什器寶品ヲ御覽ニ供シタリシガ應舉ノ七難福ノ圖卷ハ最ト御感歡被遊シ御模倣ニアリタリキ

右了りテ三保ヶ崎ヨリ御召艦ニ御乗船御召艦ハ湖南瀛船會社ノ保安丸ニシテ滿船綠葉ト種々ノ花卉類ニテ美麗ニ飾リ立テ甲板上ニ日魯希ノ國旗ヲ交叉シ御居間ハ天鵝絨ビロウヲ敷キ中央ニテーブルヲ据ヘ綺麗ナルケーキノ類ヲ盆上ニ盛り諸般ノ準備能ク行届ケリ 特ニ本船ハ今般御召艦ニ供スルタメ塗り直シタレバ一層ノ美麗ヲ添ヘリ 両殿下ハ接伴ノ貴顯高等官等ト共ニ御乗船ニ相成リ其他ノ隨行員ハ凌波丸矢橋丸ノ二船ニ搭シ出發ニ數十発ノ煙花ヲ打上ゲ 三船舳艫相啣ンデ発船セシハ午前十時十分頃ニシテ此日ハ晴天温朗湖上風淨カニ浪穩カニシテ滿船ノ裝飾波間ニ襯映シ壯麗譬フルニ物ナシ 御召艦ノ唐崎ニ着スルヤ沖ニハ日章及奉迎ノ二字ヲ記セシ旗ヲ樹テ

之ニ黒ノ烏帽子ヲ戴キ緋絨ノ鎧ヲ着セシ者十數人ヲ乗セタル二艘ノ船御召艦ノ左右ニ分レテ奉迎シタリ 十時四拾分御着同所ニテ煙火ヲ打上ゲ官民奉迎シテ神社ノ拜殿ニ飾付アル甲冑ヲ御覽ニ供シ尚松樹ノ下ニ金屏風ヲ引廻シ御座ヲ設ケ茶菓ヲ供ス

両殿下ハ御小憩有名ナル松樹ヲ御覽且此日特ニ漁セシ鯉鮒鯉鱒鮠等ヲ綠葉デ飾リシ舟ニ盛り活ケタルヲ御覽セラレ御喜悅斜ナラズ手網ヲ以テスクヒ上ゲ等シテ御娛ミアラセラル 又當日坂本村々民數十名ハ日吉山王祭禮ノ節用ユル甲冑ヲ着シ近村小學生徒數百名敬禮奉迎シ其他老若男女數知レズ或ハ陸ニ或ハ舟ニ麁集シテ拝觀ヲ成シ松樹ニ高ク三國ノ國旗ヲ掲ゲ紅色ノ球燈ヲ吊ス等近來ナキ賑ナリキ カクテ両殿下ハ再ビ御乗船アリ十一時同所御発船湖上恙ナク太湖瀛船船會社棧橋ニ御歸着アラセラレテ御上陸、濱通ヲ東ニ境川ヲ南ニ滋賀縣廳ヘ御到着セラレタリ時ニ同四拾分 正廳御休憩所ニハ國旗ヲ掲ゲ中央ニ卓ヲ設ケ椅子ヲ併列シ左右ニ光琳及ビ應舉ノ金地草花ノ屏風ニ雙ヲ立テ生花ヲ四隅ニ飾リタリ 食堂ニ充テタル縣會議事堂ニテ洋食ノ御晝餐ヲ召上ラレシガ三井寺唐崎各所ニオケル縣民歡迎ノ模様ニハ頗ル御満足ノ御

寺唐崎各門ニ置カレ興
 迎ニ摸擬六願ル御満足ノ御
 摸擬ニテ沖知事ニ向ミテ御
 挨拶アリ洋酒モ快ク数杯ヲ
 傾ケ玉ヒ古書畫及び縣下ノ物
 産御覽種々御買上アリ休
 憩所ニテ御小憩アリ午後一
 時三拾分御出門アラセラル
 呼世界ノ樂國露國皇太子皇
 崎海門ニ浮ミヨリ至ル所盛
 飾奉迎シ綠門媚ヲ含ミ紅
 燈彩ヲ呈シ青山モ濃翠ヲ
 御衣ニ滴シ晴川モ空明ケ駕
 上ニ逗シ歎呼ノ聲ノ中嚴カニ御
 巡覽アラセラレ京都御旅館ヘ御車
 曳セラルル數分間豈圖ラン嗚呼豈圖ランヤ一箇ノ凶豎ノ
 タメニ端ナク我樂國ノ佳名ヲ抹殺シ風雲色ヲ變ジ全國震
 駭恐多クモ 至尊宸襟ヲ惱マセ玉フ
 樂園トハ露國皇太子皇叔ノ言ニシテ東洋ノ日本國ハ其
 風俗ト云ヒ人情ト云ヒ君民ノ一致和合セル世界無比ノ樂
 國ナリト云ハレシヲ以テナリ 明治史上ノ一大汚点又一
 大事變 嗚呼吾人ハ兩殿下ノ恙ナク御巡遊ヲ終ラセラル
 而シテ萬民歡呼ノ中ニ奉送ノ辞ヲ草スル能ハズシテ此一
 大凶變ノタメ筆ヲ把ルノ止ムヲ得ザルニ至ルヲ悲シム黯
 然長恨ノ至リニ堪ヘザルナリ

御
 静
 京
 都
 御

模様ニテ沖知事ニ向ヒテ御挨拶アリ洋酒モ快ク数杯ヲ傾
 け玉ヒ古書畫及び縣下ノ物産ヲ御覽種々御買上アリ休憩
 所ニテ御小憩アリ午後一時三拾分御出門アラセラル
 祥霽深ク籠メ瑞氣長ヘニ黷キ國家ノ貴賓艦影ノ長崎海
 門ニ見エシヨリ至ル所盛飾奉迎シ綠門媚ヲ含ミ紅燈彩ヲ
 呈シ青山モ濃翠ヲ御衣ニ滴ラシ晴川モ空明ケク駕上ニ逗
 シ歎呼ノ聲ノ中嚴カニ御巡覽アラセラレ滋賀縣廳ニテモ
 御満足ノ御模様ニテ微醺ヲ帶サセラレ京都御旅館ヘ御車
 曳セラルル數分間豈圖ラン嗚呼豈圖ランヤ一箇ノ凶豎ノ
 タメニ端ナク我樂國ノ佳名ヲ抹殺シ風雲色ヲ變ジ全國震
 駭恐多クモ 至尊宸襟ヲ惱マセ玉フ
 樂園トハ露國皇太子皇叔ノ言ニシテ東洋ノ日本國ハ其
 風俗ト云ヒ人情ト云ヒ君民ノ一致和合セル世界無比ノ樂
 國ナリト云ハレシヲ以テナリ 明治史上ノ一大汚点又一
 大事變 嗚呼吾人ハ兩殿下ノ恙ナク御巡遊ヲ終ラセラル
 而シテ萬民歡呼ノ中ニ奉送ノ辞ヲ草スル能ハズシテ此一
 大凶變ノタメ筆ヲ把ルノ止ムヲ得ザルニ至ルヲ悲シム黯
 然長恨ノ至リニ堪ヘザルナリ
 扱而殿下ノ御一行ハ午後一時三拾分縣廳ヲ御出門同門

前ヲ北ヘ京町筋ヲ御通行アラセラレシガ豫テ万一二備ヘタル護衛巡查八十間毎ニ一人ヲ配置シ都合百三拾六人ニテ警戒甚ダ嚴重ナリシガ一行ハ京町通ヲ西ヘ五町計リノ處ニ成ラセラル、部分ヨリ京都御歸館ノ順序ヲ立テ隨從員ノ腕車ハ六拾輛計リモアリシニ奉送者ノ腕車四拾輛計リヲ加ヘ總計一百餘輛ノ車ヲ列子タルガ魯國皇太子ノ腕車ニハ先曳二人後押二人ヲ附セラレツツ列ヲ乱サズ徐々ト京町通五丁目ナル大字小唐崎五番屋敷津田岩治郎ノ門前ヲ成セラル、折柄同店先ニ立番シ居タル縣下守山分署三上村駐在巡查ニシテ三重県伊賀國阿拝郡上野町大字徳居町出身土族津田三藏安政元年十二月生レナル者一二歩進ムト見ル間ニ右手ニ帶劍ヲ抜キザマ右側ヨリ皇太子殿下ノ頭部ヲ目懸テ斬リ附ケタルガ殿下ノ被ラセ玉ヘル山高帽子ノ縁ヲ切断セラレテ車上ヨリ轉落シ耳ノ上部ヨリ顛顛ヘ懸ケテ傷ヲ負セ參ラセ續ケテ二刀同ジ邊リヲ斬リ込ミタルガ殿下ハ不意ノ狼籍ニ驚キ玉ヒ淋漓ト鮮血ノ流ル、部分ヲ右ノ手ニテ押ヘナガラ高ク聲ヲ上ゲサセラレ四五間前途ヘ避ケサセ玉フヲ行凶者ハ猶追ヒテアハヤ其距離二間計リトナリシ際殿下ノ次列ニ乗車サレタル希臘皇太子殿下ハ御急變ヲ見ソナハスト同時ニ偉大ナル御身

ヲ憤然トシテ車上ヨリ跳下リ玉ヒ滋賀縣廳内物産陳列所ニテ御買上ニナリタル草津名産ノ太キ竹鞭ニテ行凶者ノ後ニ迫リ碎クルバカリ背部ヲ亂撃シ給ヒケレバ行凶者ハ之ニ驚キ少シ躊躇フ所ヲ殿下ノ御召車ノ左ノ後押ヲナシ居タル車夫向畑治三郎ナル者我身ヲ忘レテ行凶者ノ両足ヲ力ヲ極メテスクイケルニ行凶者ハ堪ラズ劍ヲ落シテ俯伏シニ倒ル、所ヲ續ケテ追ヒ来リシ希臘皇太子殿下ノ御召車ノ左ノ後押ヲナシ居タル車夫北賀市市太郎ナル者スカサズオドリカカリ取り落シタル劍ヲ拾ヒザマ行凶者ノ後頸部背部ノ二ヶ所ニ斬リ付ケ氣息奄々タル所ヲ二三名ノ車夫が折重リテ押エル所ヲ御先導ノ木村警部ハタダナラヌ物音ヲ聞キツケ劍ヲ抜キナガラ疾風ノ如ク駈ツケ直ニ行凶者ニ乗懸リ他ノ巡查ヲシテ繩ヲカケシメタリ

此際有栖川威仁親王殿下ニハ希臘皇太子殿下ノ次ニシテ魯國皇太子殿下ヨリハ三番目ノ人力車ニ召サセラレシガ凶變ヲ見ソナワスヤ直ニ腕車ヨリ飛下リ皇太子殿下ヲ擁護ナシ一行ノ人々ト共ニ介抱シテ同町十五番屋敷呉服商長井長助方ヘ入ラセ參ラレシガ御傷ハ思ヒノホカ浅手ナリシモ頭部ノコトトテ出血夥シク右ノ臉ヲ傳ヒテ御頬

ノアタリヘ流シ鼠色ナル御召服ノ袖ヲ染メヌ 殿下ノ侍
醫ハ甲斐々々シクモ治療シ參ラセントスル處ヘ接伴ノ人々
駈付ケ亭主長助ヲ呼ンデ水ヲ求メ店內ニ有合フ白本晒木
綿ヲ取寄スルヲ侍醫受取り皇太子ヲ促シ溝ニ臨メル同家
ノ店床几ニ倚ラセ參ラセ手桶ニ汲ミ來レル水ヲ取りテ頭
部ニ注ギヨクヨク疵口ヲ洗ヒ參ラスルニ殿下ハ少シモ苦
痛ヲ訴ヘ玉フ御容子ナク頭部ヲ下ゲテ侍醫ノ洗フニ任せ
玉ヘリ

斯クテ侍醫ハ取替エ取替エ水ヲ四桶マデ汲マセテ漸ク
洗ヒ終リ彼ノ白木綿ニテ頭部ヲ繙帶シ參ラス 此際殿下
ハ繙帶ノ脛ノ上ニ垂レカカルヲ五月蠅氣ウツルサゲニ拂ヒ上ゲ侍從
ニ卷煙草ヲト仰セラレ謹ンデ差上グルヲ受取り神色自若
トシテ喫煙アラセ玉フ御有様実ニ勇マシク見受ケラレタ
リ 此間日本側接伴官頻リニ周旋シテ長助方ノ奥ノ一室
ニ御休息所ヲ設ケ假ニ御寐所ヲ仕ツラエタルモ夫ニハ及
バズトテ御入リナク又此凶變不意ノコトトテ一行ノ驚擾
ハ名状スベキ無ク有栖川親王殿下ハ非常ノ御痛心ニテ種々
御介抱ノ際ニモ暗涙ヲ催サレ其他ノ供奉員接伴官ハ只々
驚悚シテ手の措ク處ヲ知ラザルモノノ如シ 此報ノ縣廳
ニ達スルヤ齋藤大尉ハ二中隊ヲ率ヒ現場ニ至リヒシヒシ

ト皇太子殿下ヲ護衛ナシヌ 又市街ニテハ凶報ノ傳ハル
モ人民ハ孰レモ信ズル氣色ナカリシガ追々事實ナルコト
ノ分明セシヨリ孰レモ驚駭狼狽ナシ争フテ御遭難ノ現場
ヘ駈ケツケシモ最早警衛ノ巡查ハ繙ヲ路上ニ張り一人モ
通行ヲ許サズ嚴重ニ警固ナシヌ

斯クテ御手傷ノ手當モ終リタレバ殿下ハ間モ無ク人力
車ニ召サレ幌ヲ下シ靜ニ縣廳ヘ立戻ラセラレ希臘皇太子
有栖川親王殿下ヲ始メ何レモ徒步ニテ前後ヲ擁護シ奉リ
九聯隊ノ護衛兵ハ嚴シク警固ナシテ縣廳ニ歸リ玉フ時ニ
午後二時ナリシ 夫ヨリ正廳ニ御寢所ヲ設ケ梶井軍醫正
其他諸醫ノ診斷ヲ受ケサセラレ先ニ取敢ズ繙帶シ參ラセ
タル白木綿ヲ解キ更ニ綿撤糸ヲ以テ繙帶ヲ施サレタルガ
御疵ハ右方顚顚ニケ所ニテ長サ三寸同二寸四分淺疵ナリ
ト カクテ廳内ハ俄ニ靴ニ儘ニ昇降スルヲ禁ジ裸足ニテ
御用ヲ勤メ極メテ靜肅ヲ旨トシテ何レモ憂色面ニ上リ廳
内鬨トシテ聲ナシ 又廳ノ警衛ハ元來凶行者ガ巡查ヨリ
出デタルナレバ共謀者ノ有無モ未ダ判然セザル折柄ナレ
バ巡查ノ殿下ニ接近セバ御感情ノ如何アランヲ察シ構内
ハ警部数名ト歩兵第九聯隊二中隊ヲ以テ嚴重ニ護衛ナシ

片原町ニ奉送ノタメ出張シタル内藤聯隊長ヲ呼び寄ス
當時ノ驚擾狼狽供奉セル當局者モ誤報ヲ内務省へ上申ス
ルニ至ル 以テ當時ノ驚愕騷雜ノ光景知ルニ足ルヘシ

又有栖川威仁親王殿下ヨリ直ニ 天皇陛下へ御慰問ノ
タメ行幸アラセ玉ハンコトヲ上奏遊バサル 殿下ハ一時
本縣ニテ療養遊バサルルヤニテ京都大坂神戸ノ諸名醫ニ
来津アリタキ旨ノ電報ヲ發シタリシガ午後三時三拾分ニ
至リ京都ノ御旅舎へ御歸館ニ決シ御發アラセラレ殿下ハ
御顔少シク青ザメ玉ヒシモ別ニ御苦痛ノ模様ナク階段ヲ
徒步ニテ腕車ニ召サセラレ其他二殿下以下一行ハ徒步ニ
テ警衛前ノ如ク大津衛戍兵ハ縣廳ヨリ馬場停車場マデノ
両側ヲ銃劍嚴カニ警衛ナシ停車場邊ノ岡阜ニモ散兵ヲ布
キタリ 四時發ノ汽車ニテ有栖川宮及ビ醫官ト御同乗ニ
テ殿下ニハ御横臥遊バサル 接伴官ノ注意ニテ汽笛ヲ鳴
ラサズ蕭々トシテ進行シ吐出ス煤煙ハ黒暗々トシテ大津
市街ヲ籠メテ此大凶變ノ痕跡ヲ印シ去ル如ク鬱葱タル青
山深碧ノ湖水モ蹙容ヲ帯ビ停車場マデ御奉送ナシタル人々
及び軍隊モ只暗然長嘆スルノミナリト

此凶變アルヤ大津及京都電信郵便局ハ一時其筋ノ内訓

ニ依リ殿下ノ凶報ニ係ル一切ノ私信ヲ受付ザリシガ午後
十時ヨリ其禁ヲ解ケリ 縣廳ハ諸官吏徹夜ニテ各地へ發
送スル電信引キモ切ラズ係官ハ二人曳ノ車ニテ深夜ニ至
ルマデ電信局へ疾驅ナシ前後車ヲ望ム程ナリシ マタ名
古屋憲兵隊ヨリ五十名来津直ニ京都へ趣キタリ 沖滋賀
縣知事齋藤警察部長ニハ怠慢ノ罪逃レズトテ其筋へ進退
伺ヲ差出シ大津守山署長モ知事ニ同伺ヲ差出シタリ

露國皇太子殿下ニ對シ兇漢危害ヲ加ヘタル旨ノ電報當
縣ヨリ宮中へ達シタルハ殆ド同日午後二時三拾分頃ニテ
此凶報アルヤ土方宮内大臣ハ直ニ御前ニ伺候シ恐レ多ク
モ右ノ次第ヲ具サニ上奏シ奉リシニ陛下ハ御氣色ヲ變ジ
驚カセ給ヒシコト一方ナラズシテ其後ノ皇太子ノ御容躰
ハ如何ニヤト深く大御心ヲ痛マセラレテ直ニ侍從ニ命ジ
電話ヲ以テ北白川宮殿下ヲ召サレ陛下ノ御名代トシテ取
敢ヘズ御見舞ノタメ該地へ出張命ゼラレ續ケテ高木池田
ノ兩國手ヲ急使ヲ以テ召出サレ是又出張ノ儀ヲ御沙汰相
成リ其ウチ宮中ヨリ兇變アリシ次第ヲ各親王殿下諸大臣
文武親任勅任奏任官へ急報セシニゾ何レモ取急ギ參内シ
タレバ宮城内ニ馬車腕車ノ往来織ルガ如ク其混雜云ハン

方ナク総出仕ノ有様ニテ宮中ハ未曾有ノ取込ミニテアリ
シト漏レ承ハル

斯テ天皇陛下ハ御親問トシテ京都へ行幸可被爲旨仰出
サル

天皇陛下ニハ御遭難御親問ノ爲十二日午前六時皇居ヲ
御出門同三拾分發ノ臨時列車ニテ御發輦御直行ニテ午後
九時十五分七條停車場へ着御アラセラル 又馬場停車場
御通行ノ際ハ当縣官吏歩兵第九聯隊奉迎シタリ 畏レ多
クモ此日ハ龍顔御憂ノ色顯ハレ痛クモ宸襟ヲ悩マセラレ
タル御模様ニテアリタリト或ル奉迎者ノ談ナリキ

五月拾三日 主命ヲ奉躰シ蒲生郡苗村大字林へ旅行ス
午前五時三拾分主家ヲ發シ紺屋ヶ關ヨリ汽船ニテ郷里本
家ニ立寄り暫時談話我家ニ立寄ル 汽車ニテ苗村十時着
鏡村野州川ヲ經テ午後二時我家ニ歸リ二三ノ親族ヲ訪問
酒肴ヲ飲食本家ニ立寄り午後七時主家ニ歸ル 遠近ノ別
ナク露國皇太子殿下御遭難ノ説囂轟口ニセサル處無ク余
ノ大津ナルヲ知ルヤ道中ノ人露國皇太子殿下御遭難ノ実
況ヲ尋問ス故ニ之ニ答フル汲々幾回ナルヲ知ラス 又守
山ニテ耳ニスルニ御遭難の夜大津ヨリ兇暴者守山分署三

上駐在所津田三藏ノ宅へ搜索ノタメ出張シタル裁判官警
部巡查等多クシテ一時ハ如何ナル珍事ノ起リシ乎ト人心
自ラ騒然タリシト

(以下次号)



西の京慰霊塔公苑内に建つ「萬葉歌碑」

暖かな大和晴れの一日でした。くっきりと空を限った春日山を背に、小径を挟んで秋篠川がさわやかな瀬音を響かせていました。

「奈良市に万葉歌碑を建てる会」の二十七番めの歌碑が此処五条町に建てられ、御揮毫の網干善教先生をはじめ、関係者に依る除幕式が、三月二十二日、午前十時から挙行されました。

「万葉集」(一六三九) 大伴旅人 作

沫雪のほどもほどもにふりしけば

ならの京師みやこしおもほゆるかも

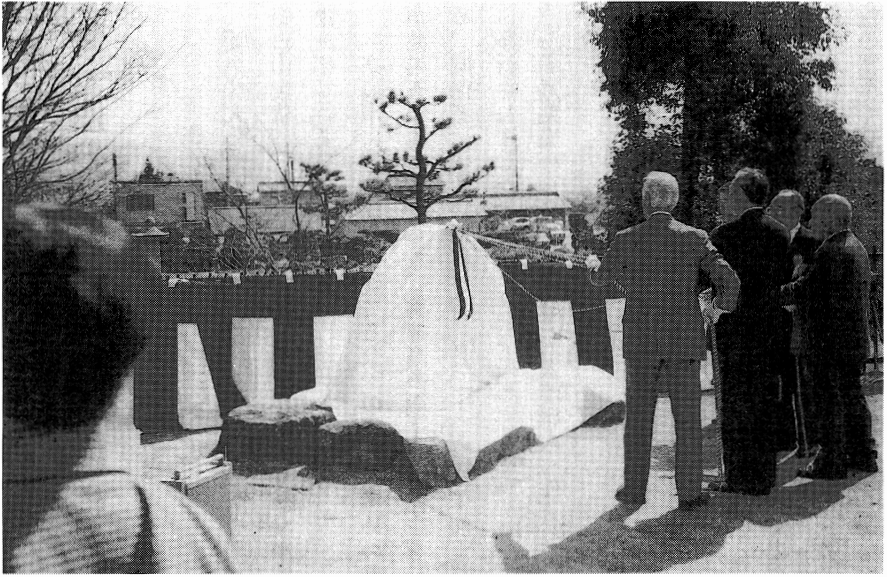
長官として西下した太宰府で赴任後、間もなく妻を失うという不幸を歎きつつ、鄙の侘び住まい……殊に灰色の雲重く垂れ込めた雪の日など、やるせなく切ない思

いを酒に慰め、故郷平城への書きぬ慕情に涙しつつ、詠まれた思いが痛い程、伝わってきます。

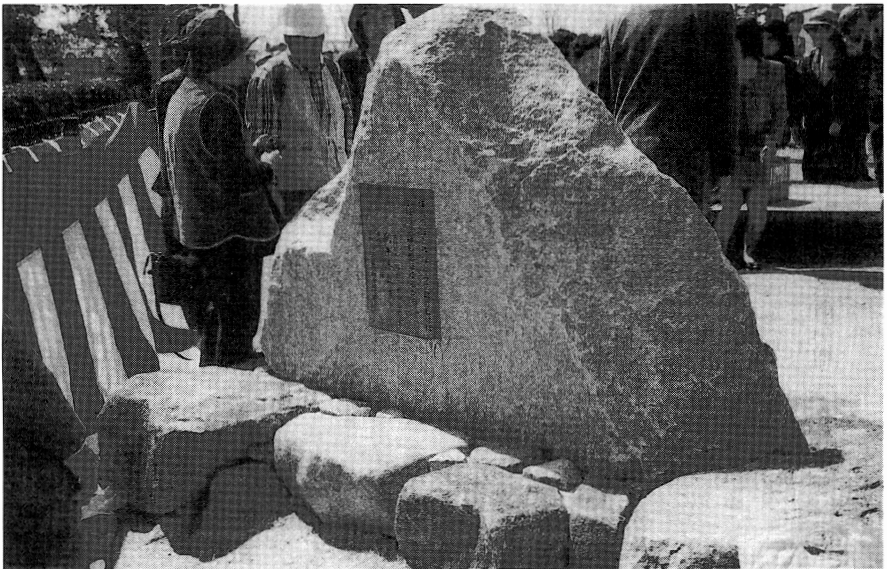
西に唐招提寺、南に薬師寺の森を控えたこの小公園には、こぼれそうな程多勢の人々が集い、お祝の言葉が述べられ、網干先生が自作のお歌を吟じられました。

“あわゆきのほどもほども……”の雪の風情そのままの「庵治石あじいし」(四国産の石)にくっきりと刻まれた旅人望郷の歌、台石の「生駒石」が足許に坐り、趣よろしく引きしめています。かつての「平城のみやこ」の五条大路、西一坊と推定されるこの場所、都の中心に近い此処に建てられた歌碑に“旅人”もさぞ慰められることでしょう——

西の京散策に、又一つ名所が増えました。



除 幕



碑の背面

乃雷注

一乃然亦名に

解之乃

一乃球其亦解之

思之乃
乃先

旅のアクション

宮川 恵美子

従来なら一月十五日はめでたい日である。早くから、公用で富山行きが組み込まれ楽しみに心待ちしていたにもかわらず、大雪が日本海側にもたらすと云う予報を聞きながらの出で立ちであった。

雪積二メートル、氷点下六度と云う予期せぬアクショントの世紀明けとなった。

用事も果し、気楽に車中は観光気分を楽しみながらと、サンダーバード特急の帰途である。

銀世界に閉ざされた民家も山も見事な造形美を作り、時の流れを止めたかのように凜然とした風景には、身も心も引き締る思いの感動をいさながら、住む人の心さえ伝わって来る。しんしんと降り続く雪に私の心も次第に洗われてゆく。日頃眺めることの出来ない情緒に誘ひこまれて、やっと辿りついた加賀温泉駅までの六時間余りの車中にアナウンスされ、ドアを三十分ばかり開放

すると云う。「飲料水や食糧を売店で求めてください。」と云う声の流れ、通路まで乗客を詰め込んだ二十四時間の列車ホテルになるとは誰しも予期せぬ事態である。

天災とは思いつつも、あちこちよりJRを罵る言葉が飛び交い騒然とした車内に様変りした。

朝食と飲み物は用意するとの事だが、帰着する迄の明日の食べ物を用意しなければと下車したものの、七百人余りの乗客の外出には、またたく間に欲しい物は無くなり、日頃、口にしないスナック菓子や炭酸ジュースのよくな物は残っている。若い男性達はスパーや、コンビニを探し遠方まで道なき道の夜道を走る事が出来るが、私達夫婦はそれも不可能で少しばかり求めていた土産物で生きつぐ事にした。

隣の若い男性の方が「如何がですか？」と差し出してくれたミニパンの一袋の美味しさと心の暖かさが身体

を癒してくれた。今、思い出しても嬉しくて涙が出て来る。それに反して深夜中車掌さんに喰いかかる人、煙草を吸って車輛の空気をよごす人、大きな声で、たわいもない話で迷惑をかける人それぞれである。

正月より半月後になり、それぞれの生活活動が始まった時期で赤ちゃん子供達がいなくても幸いであった。

戦後五十年して忘れかけていた良い体験であったと思いつつ京都に翌日十七時三十分に着することが出来た。

日頃、忙しさの余り見失いかけていた自分自身を見つめ直す良いチャンスに遭遇したことで物の大切さ、人のやさしさが切実に感じられ、現在社会に氾濫するマスクミ渦状報道に踊らされることなくIT時代を如何に取り入れ年を重ねてゆくべきかと思う反面、この災害の少ない奈良の地を愛し、自然にさわらわらず心にゆとりのある生活を願う旅になりました。

短歌 五首

梅田

家びとの老いを省に來し 大阪のとよもす町は、
住みがたきかも

日本橋

道頓堀 橋のうへより、おほさざき 神のいらかに
棲る鳥の見ゆ

道頓堀

ひたすらの心なごみや。古き小屋に、天井をながめ
人顔をながめ

天下茶屋

年あけて 初卯の今日ぞ。道に出でて、人を眺めむ。
春のころもを

四天王寺

西門はたそがれて 風吹きにけり。經木書かむと
言ふ人のあり

〔大阪詠物集〕より

奉賀網干善教先生揮毫太宰沫雪歌

筆蹤的歷跳歌碑

卿相望鄉宛轉支

太宰雪花鎮白石

篠川橋畔萬祥移

筆蹤的歷ひつしやうてきれきとしてかひ歌碑おとに跳り

卿相けいしやうの望鄉ぼうきやう宛轉えんてんとしてささ支ささふ

太宰だざいの雪花せつか白石はくせきに鎮しずまり

篠川しやうせんの橋畔きやうはん萬祥ばんしやう移うつる

奉悼鬼頭清明先生御逝去

温良如玉靜思深

國史講筵推症臨

堪惜不時顛教職

憶師惆悵眷親心

温良おんりやう玉たまの如ごとくせいし靜思せいし深こく

國史こくしの講筵かうえん推おしてのぞ臨のぞまる

堪た惜た不ふ時じ顛た教職たおに顛たおらるるを

師あもを憶おもふてちうちやう惆悵ちうちやう眷親けんしんの心

秋篠川の傍に萬葉の歌碑建つ 七首

網干善教

春霞む奈良の都の春日山背に建つ旅人萬葉の歌碑

太宰府に移りて旅人望郷の平城の都は淡雪の朝

遠きにて妻逝く旅人寂しさに雪降る奈良を想いて涙（妻||大伴郎女）

沫雪の舞いし奈良にも春来り旅人しのびて歌碑の建つ日は

せせらぎに玉藻なびきて川面には柔き陽の映ゆ秋篠の川

東の高円山に春萌えて平城の都はにぎわいにけり

萬葉の心を誘う秋篠の川のほとりにわが碑建ちけり

深秋

荒居智子

北の宿三時に覺めて大風呂を開ける手不意に躊躇いにけり
雜木々の梢に秋の日の差して光りつつ紅の風となりゆく
苔の上に動かぬ蝶が透けてきぬ明日は風に舞い立つらんか
越し行きし人の残せる紅薔薇秋の朝の光りに開く
再びを子と連れ立ちて参らんか談山神社の猿樂の会えに

菩薩さま

大浦小枝子

斑鳩の尼寺におはす菩薩さま半跏のスタイル女性美あふる
世紀末の疲れはてたる人人の眼を身に受けて如何に思惟されむ
空の碧に海を見たるは誰ならむ鰯・鯖雲呼び名やさしく
樹下に坐す齡古りし鹿の風貌かほ古代ギリシヤの哲人の相
一面の濃霧に一点見詰めれば雨の粒子か細かく踊る

春

岡田越子

庭に出て春の光を待ちわびて草引きをする手もとはぬくし
山ありし里を忘れず庭に来てうぐひす鳴きて春をつげつげくれる
寒けれど茶道資料館の陳列は春の道具を一つづつ見る
ちらし寿しいちご大福雛に飾り女を味はふ春も味はふ
わが家に小犬の来たりて落ち込みし娘にも春来ていそいそとする

神功の春夏早秋

片桐一夫

早春の池面に映る青柳あおやぎの芽吹き枝垂しだれて風に揺れおり
中堤ちゆうていの春爛漫のさくら花映る池面に風わたる見ゆ
五月朝さつきそよ風に揺れ真白ましろなる空木うつぎの花はなの灰ほのかに匂ふ
青垣山越えきし白き積乱雲人界見お下ろし睨みて迫り来く
葉月宵涼よいしさ覚ゆ草かげに鈴虫蟋蟀はや鳴き初めぬ

花 筏

木 庭 和 子

花筏浮かべてゆくよびわ湖疏水 明治の気概の花と咲きゐて
沙漠にも春来たるらし黄砂降る乾く大地の歎きのシグナル
水沫みなわより生れし記憶あやヒトゲノム生き継ぎきたる証あかし刻みて
力強き飛翔のかたちあざやかに火の鳥の守るキトラの古墳
まろやかに滋味ある筆の旅人の歌碑寂寥もとけむ平城ならの春陽に

秋の記憶

玉 置 小 代

からからと楯の枯葉の道にまろぶ俯き歩くわれ追ひ越して
花水木のさいごの一葉今日散りぬ今年の憂ひを送るがごとく
庭先の小さき畑に豌豆を今日は蒔かむとジーパンを穿く
ふて箱も裁ち鉄などもさながらに亡母在すごと茶だんすにあり
夢なかにエプロン姿の亡母のゐて何か語るも聞けず目覚めぬ

都しだれ

寺嶋 りくお

信楽の深堂みとうの郷さとの丘への上に古りし桜の雨に濡れをり
山里を深堂の郷と呼びなして人は都の日々を偲びぬ
そのかみの驕おごる平家の夢偲ぶ深堂の郷の都しだれは
都落ちの辛たづき生活を丘の上の都しだれを見つつ耐へけむ
濡れそぼつ枝垂桜は山里あに生れし京師みやこの春を偲ぶや

早春

中川 都哉子

早春のカナダイアンロックキーわが視野に蒼き氷河を抱きて連なる
エリザベスパークの丘は静寂なり満開の桜ひとり陽を浴ぶ

(バンクーパーにて)

萌黄いろのチラシ ランダムに鋏入れ無地封筒に飾ればたのし
わが鬱ふさのなほどのことや五月の朝のあめつちかくもうるわしきものを
「モンゴルの十七歳草原に育つ」とう新聞一頁の写真に魅せらる

職去りし日々

馬場 恭子

職を去り自然体にと生くる夫畑を耕し虫と語らふ

「恋人に逢いに」と夫は手を振りて目覚めとともに菜園に向かふ

階段に手摺りをつけて安堵せり六十路を前のわが老い仕度

山道を歩く呼吸はリズムカル樹々や大地の氣をもらいしか

枝先に固き蕾の並びるて風冷たくも静かに春待つ

旅窓

福井 秀子

特急の窓に続く紅白の梅の花咲く畑を視てゐる

パルケエスパーニャのカルメンホールに孫らと情熱的なフラメンコに魅せらる

ホテルの窓にライトアップの大阪城暗き中空に鮮やかに煌めく

新緑の朝の陽光に照らされて大阪城の鯨の光れる

黄昏の大阪城ホールのコンサートに人ら長蛇の列なし入りゆく

晩秋

松村せつ子

ひさびさに草野球する子等の声澄む青空に吸い込まれゆく
十六夜の名残りの白く浮かぶ朝すすきの原に吹く風清しすが
収穫をされないままの柿の実が刈り田彩る大和路も秋
紅葉をさらりと脱ぎて街路樹は冬迎えむと凜と立ち居る
夕暮れて豆腐屋さんのラッパの音遠く聞ゆるあすは立冬

春を待つ

森田陽子

婚家去りしひとの幸思うたそがれに寒菊朱く雪降りやま
ず
もろもろの愁いあるままに春を待つ心に選ぶ 赤きセーター
大和路の春浅き城 梅紅く光集めて宙に伸びゆく
車椅子の老人の髪梳るナースに春の日射しがまぶし
燦然と紀州の海に落日は 春のおぼろを黄金に染むる

月光

安田和子

古代究む師は水茎を石文に旅人たびと偲びて平城恋ふる歌

師の朗歌うたにインドの大地暮なずみ祇園精舎へバスは急ぎぬ

朝まだき祇園精舎は霧の中読経の声の響きこもれる

み佛よ降りたまへときざはしをかけたし今宵王舎城の満月つき

み佛の恵み降りしく月光つまかけに包まれてゆく壁画の中の聖人ひと

顔がぐる

棉源 瑛

わらぶきと柿とカラスの画のノレン年毎秋に懸けて見飽かず
突然に角曲り来し顔がぐるに異星人かと一瞬足停む

ちんぼこのさきに落ちたるめしのつぶにハエとまりにき幼な日の夏

おのずなるままがよきにを紫に染めたる髪のおぞましきかな

陽に映申る艶なめらかに豊かなる乙女はたちの玉のくろかみ

グループからの便り



歴史教養講座

奥村 國男

歴史といえば、むかし小学校の歴史（当時は国史と云いました）の時間に、「いざ、連合し入鹿討て」を大化の改新（正しくは「乙巳の変か）の年号として覚えさせられて以来、殆んど歴史や考古学に関心を持たない生活を過してきた小生が、縁あってこの平城ニュータウンの地に終の栖を得て、四分の一世紀余り。

そんな小生が、何等の基礎知識も持たないままに毎月の第二火曜日の十時から始まるこの歴史教養講座に参加して、早くも二年近くになります。

思えば、大津京跡の近くに生れ育ち、紀元二千六百年の記念事業で行われた近江神宮や橿原神宮の外苑の整地や植樹に中学生の身で、建国奉仕隊の一員として汗を流した我々が、当時「科学する心」とかで、文科系より理科系を優先する風潮にも乗せられ歴史や考古学に目を向

けなかったのも事実です。

この講座はその様な小生にもよく理解出来るように網干先生が自ら資料を作り、自ら配付され、軽妙な語り口で説かれる時事問題や日本書紀の解説で、本当に有意義な時間を過ごすことが出来る講座です。

さて、この一年を振り返りますと、歴史や考古学に関連のあるニュース記事が幾度か新聞紙面を飾り、それらについて網干先生から解説をいただいた事柄が多くありました。

まず昨年の二月、明日香村の亀形石造物の発見を機に「瑞龜出現」という標題のもとに、懇切丁寧な解説を受けることが出来ました。

四月には、島根県大社町の出雲大社境内から「古代神殿の柱根」について、さらに六月には、御所市の鴨都波遺跡の一角から四世紀中頃の葛城氏の勢力の実態を解明する「三角縁神獸鏡などの資料」が出土し、詳細な解説を聞くことが出来ました。

八月に、橿原市の方形植山古墳が双室墳と判明し、日本書紀で講義中であった推古天皇と竹田皇子の合葬陵の可能性が高いとされていますが、先生も被葬者について

は別というお話でした。

十一月には、例の東北旧石器文化研究所の元副理事長のねつ造事件があり、世間を騒がせました。

明けて今年の三月には、明日香村のキトラ古墳の第三回目の調査が大トピックでしょう。前二回の調査に比べて、更に精巧なデジタル機器を使用しての調査との網干先生のお話で、その結果の解説は、五月に行われる当文化協会の総会で特別講演として先生が解説されます。

また同じ三月に唐招提寺の近くに「奈良市に萬葉歌碑を建てる会」によって、網干先生の揮毫による「大伴旅人」の歌碑が建立されました。

一方『日本書紀』の講義は、巻二十二から巻二十三に進み、推古天皇の崩御からこれに伴う皇位の継承に関わり「息長氏」と「蘇我氏」の争い、あるいは明日香村の石舞台古墳の根拠となる出来事、蘇我氏系の勢いの終りを示す田村皇子の即位のところまできました。

新しい年度に入り、いよいよ舒明天皇の時代に移ります。

时期的にも公私とも非常にご多忙である網干先生が、この講座のために貴重な時間をさいていただいているこ

好意とご熱意に深く感謝し、今後この講座が永く続くことを念じつつ筆を措きます。

先史学講座

光学 祐彦

奈良大学・泉 拓良（たくら）先生による先史学の講座も二年目に入り、先史学の基本的な問題についての解説や（例えば年代測定のことなど）、先生が直接参加しておられるシリヤ・パルミラ遺跡発掘の成果なども、折りにふれスライドを用いて紹介して頂き、国際的な視点からの考古学の講義を、何時も興味深く拝聴しております。

今年さらさら縄文土器に刻まれている文様がどのようにして造られたか、自ら体験する実習が粘土を使って行なわれたことが大変印象的でした。久方ぶりで小学生にもどった気持ちで、わいわい言いながら縄をよって見ましたが、だんだん複雑な縄になるにつれ日頃の器用さの実力が出てくるのには閉口しました。なおこの実習のため近商の文具屋の粘土の在庫が無くなったとか？

これまで私など、縄文土器は簡単にそのへんの「むしろ」のようなものの上に、土器を転がせて文様がつくられた様に想像していましたが、実習で簡単な縄から、複雑な種々の縄まで作って、粘土の上にそれらを転がせて転写すると、意外に多種で複雑な文様が生まれることを体験できたことは正に驚きでした。

おおげさに言えば、縄文人の知性とアート感覚の素晴らしさに接した思いがしました。それ以来各地の発掘成果の展示土器を見る目も、少しは変わったように思います。

本年も原則として第三月曜の三時から一時間半講義して頂く予定ですが、九月までは先生の海外出張のため休講となります。十月以降のことについては事務局の山内さんにお問い合わせ下さい。先史学、考古学に関心をお持ちの方でしたら、何時から参加頂いても十分お楽しみ頂けると思います。

最後に、お忙しい中いつも熱心にご講義頂いております泉先生のご親切に深く感謝申し上げます。

古代史講座

鬼頭清明先生の御心に感謝して

渡邊 馨

この「古代史講座」は、平成十二年度をもって幕を閉じることになりました。それは指導者であった鬼頭清明先生が、われわれ受講者たちの祈りと願いも空しく、不婦の客となられたからであります。そんな事態になろうとは誰の頭にもないことでした。しかし事実は冷酷にわれわれの前に出現しました。先生のご葬儀（二月二十三日）を終えた四日後のわれわれの「講座」の日に、今後どうすべきかを出席した二十名余で相談しました。結論はこうでした。鬼頭先生が逝かれた限り「古代史講座」の名は続けられないであろう。しかし先生の暖い指導のもとで、われわれが楽しみながら学んできた「統日本紀」は、われわれ自身の手で、共に学び、共に論じ、共に考えながら読み続けようということでした。それで十三年度からは、講師なしで「統日本紀」を読む会」として

出発、再生することになったわけです。

読む会の進行は、前年と同じように(一)テキストを読む。(二)そこに付されている注釈を読む。(三)さらにテキスト以外の参考文献、資料などから、理解を深めるのに必要、また役立つとみられるものを紹介する。(四)それらをふまえて、各自が自由に意見を開陳し、質疑し、論議を交わすといった具合で展開することです。

読む会のテキストは、従来から使っている東洋文庫刊 ●直木孝次郎他訳注の「統日本紀」（全四巻）で、読みやすいように拡大コピーしたものが支給されます。もちろんこれは原本の現代語訳ですから、誰もが取り組みやすいものです。注釈はテキストに所載されている分のほか、岩波書店刊 ●「新日本古典文学大系」のなかの「統日本紀」にある詳しい注釈を中心に、可能な限り有用な参考文献・資料を活用するようにしています。

いまわれわれのグループには二十五名の同好の志がいます。これは私が四年前に「古代史講座」に加入したときの約二倍で、しかも男女数が逆転して男性多数になっています。これは心のやさしい「オニさん」と呼ばれ、慕われていた鬼頭先生の不在に基因するのかも知りませ

んが、一つは高齢化社会における時流の変化の現われかもしれませんね。まあそれはそれとして、「古代史講座」から新生した「続日本紀を読む会」の実態をご理解のうえ、ご加入、ご支援下さることを念じています。



鬼頭清明先生をしのんで

廣田 好實

雅子さまご懐妊―宮内庁発表のうれしいニュースを耳に、僕はいま全くうらはらな、悲しい思い出を記そうとしている。

この早春、六十一歳の若さで永眠された東洋大教授・鬼頭清明先生は東大大学院卒業を待たずに奈文研に招かれ、二十四年間右京四丁目に住まわれた関係もあって地元の文化協会にも創設時から参加、『古代史講座』を担当された。

告別式は二月二十三日、秋篠セレミューズで無宗派葬として営まれ、文化協会からも松岡禮一副会長ら十六人

が参列した。

和やかな笑顔の遺影は花々に包まれ、故人の愛したクラシックの流れを合図に開式。

「おい、オニやん。君はそう呼ぶことを許してくれると思う」。

弔辞者の第一声がかチンときた。なにがオニなもんか。協会員にとっては、生きボトケ様。それ以外のなにさまでもなかったんだ。

先生の講義の始まりは『日本靈異記』、『木簡』に次いで『続日本紀』。僕は文武朝以降に入会させていたのだが先生の誠実さに一目ぼれ。以来、皆勤賞。配られる資料は全文漢字の原本ではなく、直木孝次郎編の現代訳（平凡社・全四巻）。理解しやすいコピーだった。

「無味乾燥な官報と考えてください。庶民の暮らし向きなどには触れていない」。これが先生の口癖。それでも受講生の質問は毎回、矢のように飛んだ。

三つ子を生んだ母親に、時の朝廷はまわた四ツを下賜された。「四ツ、どれほどの量ですか」。先生の答えがふるっていた。「当て推量は可能かも知れない。しかし当時の分銅計は未出土。だから、分らない」が正解」。



山田寺にて

裏付けされないものは不明——それが鬼頭教授だった。先生は春秋の二回、みんなを大阪の遺跡探訪にいざなってくれた。懇切丁寧な説明付きで。

そんな先生が九十五年初夏、桜井市内の講演先で突然倒れ、救急車で病院へ。脳シントウ。半身不随。古代史の会は六月二十七日、教授の再起を固く信じて会の続行を決めた。みんなで先生の著書をひもとき、和同開珎、奈良への遷都などが続いた元明・元正女帝期を乗り切った。

そして訃報。柱を失った古代史の会はいま『続日本紀』を読む会に名を改め、大仏建造へ進んでいる。

雅子さまのご出産は、順調に運べば十二月。鬼頭教授を超える英知と温厚な赤ちゃんのご誕生を願ってやまない。

鬼頭先生のことを書いて



片桐 一夫

いま鬼頭先生のことを認しためようとしてゐる私は、古代史講座で先生から『続日本紀』の藤原京・平城京時代の色々のことを、教えて戴いたのであります。

先生はお若い時から古代史など多くの著書や論文を発表され、学界の進展に大いに貢献され、また平城宮跡や奈良県文化財の保存運動に努力されてゐました。

奈文研の平城調査部や藤原調査部での御活躍や、東洋大学教授に移られてからの、諸分野に亘る御研究など、素晴らしいものがあつたと思います。

その頃御住居の奈良では、先生は古代史講座のお世話をなさつてゐられ、現地見学会など元気なお姿でした。

お変わりなく御健康でありましたのに、一九九五の春、先生は思はざる病魔に倒られました。是は本当に残念なことでしたが、先生は敢然として療養にはげまれ、旁かたわらら「リハビリ」をなされ、大学に通はれる状態にまでなられました事は、先生の御努力、奥様の涙ぐましい御介

助の力であつたと思います。

折角このようになられましたのに、其の後また病状が進み、悲しいことになって終いました。

御安らかな御最期でございましたことを承りました。

告別式には、多くの方々が参列され、先生をお偲びする「ブラームス交響曲」が奏楽され、先生の御生前の關係の学者の方々のお別れの言葉があり、立派なお別れの式でありました。私達も御霊前に献花、心から御生前の御礼を申し上げ、御冥福をお祈り致した次第であります。いま先生の思い出を辿ればいろいろのことがあります。

昨年春、先生が再入院された頃だと思ひますが、その秋発行の「層富」の古代史講座のグループ原稿のお届けに参りましたとき、先生とお話することが出来ました。それが先生との今生のお別れになるとは、思つてもありませんでしたし、入院は辛いことであると拝察しても、何ともお慰め申し上げようもなく、お別れて終つたことでした。今更致し方ないことですが、あの時、何かお慰めになることを申し上げれば良かったのにと、その事を申し訳なく後悔するのであります。

先生に対して又思ひ出すのは、私達の質問に対して本

当によく分かるように教えて下さったことです。

その御親切が私達には何よりも嬉しく、思い出されるのであります。これはやはり先生の温い心の現れで、良いお人柄だと皆で話し合ってたことでした。

この先生の温和な御態度や、いつも静かな御様子や、やはり先生への思い出の最たるものであり、忘れることが出来ません。御生前の先生の面影を思いますれば、何れのこと懐かしい思い出ばかりです。考へれば私達は、先生からこの尊い良い思い出を賜ったのでした。

また良き御薫陶を夫々に与えて下さった今は亡き我が鬼頭先生のことを、私達は忘れず過してゆきたいと思っております。本当に先生有難うございましたと申し上げる次第でございます。

鬼頭先生に捧げまつる歌二首

『続日本紀』講じ給いし師の君をなどか忘れむ年は経るとも

またの世に師の君に会いなば人の世に共に在りし日語り合はなむ

鬼頭先生を悼む短歌五首

大浦小枝子

肩書きをまとはぬお人柄なりてお別れの日にその偉大さを知る

ブラームス協奏曲一番一楽章流るれば生前好まれし理由
諾なふ

「続日本紀」の講読つづきて事半ば病に臥され逝かれて
しまひぬ

少しだけ早過ぎしかと老生徒を天の学び舎に待ちてくれ
むか

研究の稔りの時に真向ひし台風あとの無・二度と戻ら
ず



飛鳥にて

鬼頭先生に感謝して

西村美佐子

杖を片手に重い足を、懸命に歩いていらっしやったお姿が忘れられないです。いつも前向きに、不自由をものともせずにとり組んでいらっしやることに、ただ、ただ、頭の下る思いでした。古代史の勉強もさることながら、先生のお人柄から、たくさん学ばせていただきました。本当に、有難く感謝致しております。もっと、もっと、一ばい教えていただくことができましたのに。

先生の御冥福を、お祈り申し上げます。

合掌

鬼頭先生 有り難うございました

大井 政子

温厚なお人柄で、学問一筋の先生とっておりましたら、奈文研時代には研究の傍ら、遺跡の保存に尽くされたり、「オニサン」のニックネームで、皆に親しまれて

おられた事、クラシック音楽がお好きだったり、色々な面を持っておられた方と知りました。

お元気だった頃にもっと——教えて頂きたい事、お聞きしておきたかった事も多々ありましたので、とても残念です。

各地で木簡出土のニュースを聞く度、今は彼の地で解読されて居られるのでは……、と思っております。

先生、長い間、有り難うございました。

◇ ◇ ◇
亡き鬼頭先生へ感謝の心をこめて

西島 芳子

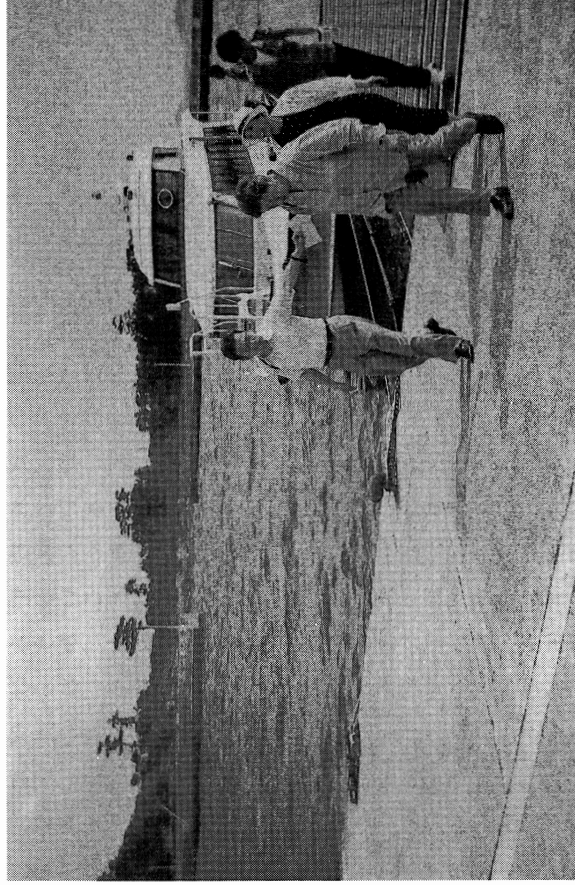
今でも高の原中央病院の前を通りかかると、鬼頭先生がまだ入院していらっしゃるような気がして、先生、どうしてはるやろ、一寸御見舞に寄ろうかしら、と一瞬思ってしまう。だが同時に冷たい現実に戻ると、そこにはもう見舞うべき先生の御姿は見えない。

先生は去年の五月頃、再度の入院を余儀なくされ、御見舞に訪ずれるたびに、病状は次第に悪いほうに傾いて

いるように感じられた。ひょっとしたら二度目の再起は望まれないかも、と不吉な予感に胸は重く沈むばかりだったが、とうとう今年二月二十日にその命を閉じられてしまわれた。

告別式にわざわざ東京から参列されていた、東洋大学の女子学生の方が読まれた弔辞のなかで、先生が始めて大学の教壇に立たれたとき、その風貌から、（先生は不断からあまり風采にこだわらないほうだったし、まんの悪いことにそのとき、おでこに絆創膏を貼っておられたという。）なに、この先生は？と、よい印象を持たなかったが、そののち先生の御指導を受けるにつれ、その御人柄の良さがよく分ってきた、と言われていた。そのとき参列していた古代史講座の古き聴講生たちは、恐らく心の内で一寸苦笑しながら、我が意を得たりとばかり「さもあらん、鬼頭先生という人はそんな人なんや、あとからじわじわと味の出ってくる、深みのある御人柄だった。」と涙ぐみながらつぶやいていたに違いない。

古代史講座では一年に二三回、現地講座ということで各地の歴史的遺跡などを見学してきたが、三輪山に登った時のことである。遠くから見る優しい山容とは違い、



磯島にて

険しい岩の道を上りあぐねていた私達に、先生が「みなしんどかったら此処から引き返そうか。」と声をかけられた。その時、今思うとよくあのようなことが言えたと思うのだが、思わず、「折角此処まで上って来たのに、引き返すなんて、あとは這ってでも登ります。」と言った途端、先生がさあっと私のそばまで下りてこられ、私の肩からリュックサックを外し、御自分の肩にかけ、何事もなかったように黙ったまま、また上ってゆかれた。何だかあつという間の出来事のように、私は暫らく呆気に取られていた。だがあの時着ておられたグレーの長いコートの背中に、赤いリュックサックが乗っかっていた先生のうしろ姿が、あれから何年か経た今でも、鮮明に記憶のなかで生き続けている。

もう日時も貝学場所も忘れてしまったが、現地講座の帰り、確か櫃原神宮前の駅近くまで来て、「先生、お茶でも御一緒にいかがですか。」とお誘いしたら「いや、私はこれから真直に東京へ行きますので」と断られ、「えっ、今から？東京へ、ですか——」と言ったきり言わなければならない挨拶も、しどろもどろだった。そのときまで東京へ直行することなど、一言も言われず、一

日中全行程を私達に付き合って下さったのだった。

先生は御自身の専門である、古代史関係の研究や執筆など、それだけでも大変なことなのに、その上、文化財保護の為の運動や、もろもろの頼まれごとなども引き受けられ、その多忙のあまり、寿命を縮まれたのではなからうか、と或る先生が弔辞で述べられていた。先生の御忙しいことはよく分っていた積りだった。東洋大学の教授になられてからは、週に二、三回奈良と東京を往復されていることも知っていた。だが先生が古代史講座の為に、割いて下さっていた時間は、超過密のスケジュールのなかから生みだされていた、かけがえない貴重な時間だったのではなからうか。

先生の、既刊『層富』の十号のグループ便りに書かれている文章を、適当に抜粋させて頂く。

古代史講座では、筆者の予想に反して、永くつきき、結局三年がかりで読みおえることになったのである。講師役の私は毎回『日本霊異記』を読み上げることになる。資料を読む場合でも、普通は黙読だけでおわってしまうところも音読したわけだから、私自身にとっても大変勉強になった。音読して耳か

ら文章を頭へ入れていくのは、目だけをたよりに黙読するよりも、史料の理解は深められる。こうした経験は、ある古代史の先輩が、史料の難解なところになると音読されているのを聞いたことがあって、その史料理解についての有効性は学んでいたつもりだが、身をもって充分に覚ることができた。古代史講座を始めてから講座のおかげで勉強したことは数々ある。下しらべの折に気をついたこと、会員の方々の質問に、新しい問題点を見いだしたことなどとならんで、音読の効用もその大きなものの一つである。

また会員の方からの質問は、直接史料に関係のあることもないことも、広くしてもらうので、ある会員の表現をかりると、この講座は狂心（たぶれごろ）の会といえるほど、質問も回答もあっちにとび、こっちにとびしてなんともまとまりのない会になるのだが、それが会員の方々から斬新な思いつき、質問がとびだし、講師の私としては改めて勉強をさせてもらえることになるのだ。云々――。

今から七年前、まだ御元氣だったころ書かれたもので

あるが、古代史講座もまた、先生の酷使された御身体を蝕んでいった一因ではなかったろうか、と気になっていたが、亡くなられたのちに改めてこの文を読み、先生御自身は勉強になったと言われているが、先生より年長のおばはん？。否、おばあちゃんたちの、不慮な質問にたじたじとなりながら、結構リラックスされていたようにも感じられ、少しは胸のしこりも消えた。

だが古代史講座の会員にとって、偉大な、よき師を失って、ぽっかり空いた精神の穴は、当分埋まることはないだろう。



鬼頭先生に捧ぐ

木庭 和子

鬼頭先生に依る「古代史講座」は「木簡学」から始まりました。町の古書店で「発掘された木簡」の写真集をみつけ乍ら、チンプンカンプンで手の出なかった私は一番に馳せ参じました。

「モツカン」という鍵で古代史を探っていらした若き

日の先生、峻厳と哀愁の入り混じった瞳が、微笑まれるとぐっと親近感を増し、古代史学の「権威」などという仰ぎみる存在であることも忘れ、バカみたいな初歩的な質問をする私にも真摯にお答え下さるのでした。

地方から、租税の一つとして土地の産物が朝廷に収められその際、付けられる送り状が木簡で、紙が貴重品であった古代、産地・品名、貢納者名等、使命の終わった時点で捨てられました。その「ゴミ」から千年の昔の人々の生活が解明されるのですが、その中に「大贄」^{オホニエ}があつて、それについての解説を受けるうちに、それらの収穫された所を見学しようということになり、初夏の伊勢湾を渡って佐久島へ——、さわやかな海の風の匂ひまで、夢のように思い出されます。

平城宮地は勿論のこと、お若い日に発掘に通われたという河内の百済寺跡等、史跡見学を重ねる中、圧巻は「三輪山登拝」。この神域に足を踏み入れるという貴重な経験に感激して下山の後、箸墓に集まりお話を聞いている中に気分が悪くなった私のために先生が一生けんめい御配慮下さったこと等、忘れぬ椿事として心に残っています。そしてことある毎に「あの時木庭さんはね……」



池上曾根遺跡にて

と先生にしてはめずらしくいたずらっぽい口調で笑い乍らそれをおっしゃるのでした。“あの時”運悪く（私にとっては運良く）先生に呼びとめられたドライブ中の“奈文研”の寺崎先生（そごうの建築事前調査中十万余点の木簡出土で一躍有名になられた）も“僕の友だちだから大丈夫、気を使わないで…”等とおっしゃって下さったお優しいさ……。御病気で手足の自由を失くされてからのリハビリにかけていらしたあの粘り強さ……。新出土の遺物たちも、先生の精査を心待ちにしていたでしょうのに……。

並大でいでなかった先生の頑張りも空しくなった口惜しさにこうして書き進むうちに涙がこみあげてきました。

む “木簡の社会史”にみる暖かき目差しの君屋と生れまさ

む 冬空をほのくれないにうるむ屋ペテルギウスを君と仰が

万葉講座

八田 和子

松岡先生に

感謝。そして、感動しています。

それは――。

最近、「その時、?歳」と言うコピーを二枚いただきました。一種の《年表》ですが、とても面白い《年表》です。それを見て、「ナント、細かい所まで、調べて下さったものだ」と、オドロキです。驚きです。

そこには、舒明天皇時代の六三〇年代から、奈良朝の終末まで、―― 具体的には、大伴家持の死亡の頃迄の王位継承を初め、事件や色々な事項が、年代に併せて記載されています。そして、天皇、皇子、皇女や皇族等は勿論、『万葉集』の中の有名人が、その時々々の事件、事項にかかわった時の年齢は、『何歳であったか』、と言う事が即座にわかるようになっていきます。それは、とても便利な《年表》です。

毎日、明日香、藤原、平城の都のどこかで、発掘が行

なわれています。土器や木簡などの遺品の話がニュースとなる度に、その時代に登場する人々について、この《年表》がとても役に立ちます。今までに、色々の資料をいただきましたが、この《年表》の「その時、?歳」は、私にとっては最高の品物となっています。



只今、勉強をしている『万葉集』のテキストは、先生の手作りのテキストで、普通の『万葉集』の説明書とはとてもかわっています。

『万葉集』の歌には、必ず原文が併記されていて、文字を持っていなかった当時の人が、記録するために如何に苦労したか、と言う事がしじみと伝わってきます。一番変わっているのは、長歌の記載法です。松岡式とも言うのか、このような長歌の解説は始めてです。それは、B4の用紙を縦にして、四段に分かれています。上の段から、現代文、原文、解釈の文、そして、一番下の欄には、上の解説文の場所に合わせて語句の解説が記載されています。

今、丁度、『万葉集』での一番長い長歌を勉強してい

ます。

高市皇子の尊の城上の殯の宮の時、柿本朝臣人麻

呂の作れる歌(原 漢文)(巻一・一九九)

と言う歌です。

この長歌は、長いです。一四九句もある、とても長い

歌です。テキストでは十三ページにもわたっています。

それに反歌が二首もついています。(別に「或書反歌一

首」があります)。

これだけ長い歌ですが、その内容は、とても素晴らし

く、興味があります。「壬申ノ乱」の様子や高市皇子様

の死に対するや悲しみが、読んでいる者をひきずり込ん

で行きます。

『万葉集』とは、このように面白いとは思いませんで

した。

毎月の第一の月曜日ですが、いつも、待遠しい月曜日

です。

先生、いつまでも、お元気で、私達を教えてください。

お願いいたします。

読書会

林 美智子

平成十二年度、読書会の活動

四月 文学散歩 淡路島五色町方面

五月 夢枕 猓著 陰陽師 上・下 製本作業

六月 夢枕 猓著 陰陽師 上・下

七月 文学散歩 京都晴明神社方面

八月 枕草子聴講 松岡先生による講義一回目

九月 枕草子聴講 松岡先生による講義二回目

十一月 夏目漱石著 ころろ

十二月 夏目漱石著 行人

一月 帚木蓬生著 逃亡 上・下

二月 松村緑編 石上露子集

三月 妹尾河童著 河童が覗いたインド

特別対談 著書 & 読書会会員

妹尾河童著「河童が覗いたインド」を読んで

○絵入り解説が面白いですね。

河童「文章で表現できないものは絵で、できるだけ正しく伝えられるような気持で、記しました。」

○字が小さくて、天眼鏡が必要でした。

河童「全頁の文字を手書きにしたのは、読んで下さる人に直接手渡す感じにしたかったのです。しかもできるだけ沢山のことを伝えたくて。」

○ホテルの俯瞰図は大変でしたね。

河童「見学のあと、泊まった宿に帰ってすぐ、その部屋のスケッチは、かなりシンドイ仕事でしたが、この記録のメリットは、旅のインデクスとして役立つと思いました。」

○沈黙の塔（鳥葬）のところは、よく理解できました。

河童「ゾロアスター教徒の葬法で、鳥に死体を与えるのは人生で最後の功德である、という考えからきています。」

○マハラジャパレスに行ってみたいです。

河童「ド金持ちの本宅ですから凄い！ この宮殿は十六年間の歳月を費やして建造されたといわれています。——その間の歴史を説明あり——天井はステンドグラス、柱と壁は金色とトルコブルー。現在

は州立博物館として公開されています。

○少し違ったインドを読むことができました。

河童「実際は、物乞いの物凄いダツシユにあったり、トラブルもいろいろありましたが、それはインドのごく一部にすぎず、インドという国を紹介することにはならないと思いました。」

○この本を読んで、来年の文学散歩は、インドにしたいと思いましたが。

河童「皆さん、もう十歳ぐらい若い方がよいと思いますよ。とにかくインドは広い。同じ国でも季候がちがう、言葉がちがう、宗教がちがう、生活習慣がちがう。僕はインドのごく一部を、節穴から覗いただけですが、とてもエネルギーを使いました。この本を読んで下さって、少しでもインドの面白さ(多様さ)を理解していただけたらうれしいですね。」

(あと書き)

心やさしい河童さんならきっと許して下さると思い、仮説の対談を造り上げました。

山歩きの会

西幹 友雄

山と自然を楽しむ

山歩き会が発足してはや十五年になります。

発足当時は、私たちの山登りは周囲の景色などあまり見ず、ただひだすらに山頂を目指していましたが、最近では自然を楽しむ様になりました。それもそうでしょう。発足当時は平均年齢は三十四、五才で意気盛んなころでした。今では平均年齢はそれなりになり、無理をせず自然に親しむようになりました。自然の美しい山道を、適度にウォーキングした上に、汗を流し、素朴なもてなしを受け、その暖かみは実に素晴らしいことだとおもいます。又それと反対に時として手厳しい自然を相手にする登山という行為を楽しむ者にとっては、安易な気持ちで足を踏み入れてもらいたくないのは当然です。自己の責任において登山を楽しむというルールを守らなければなりません。最近では自然をゆったり楽しもうという中高年層や家族連れの方々が、山に足を向けはじめ爆発的に

増えてきました。その中には、いわば山のルールを知らない人がふえてきております。山の大切なルールを知ってもらうのはもちろんですが、登山の形態自体が変化していく中で、「山ヤ」の意識もかわっていかねばならないと思います。

山歩き会の私達が心掛けていることがあります。もちろんのことですが、①安全を優先し行程にゆとりをもたせて、ゆっくりと自然と触れ合いながら歩く。②悪天候の時は無理に頂上を目指さない。③コースを難易度によって選ぶ。

最後に、なぜ人は山に登るのか？ あいにく、この問いかけに対する唯一の答えはない。おそらく登山者の数と同じくらい、さまざまな動機や目的があるにちがいないとおもいます。

山歩き会からのお知らせ 二〇〇一年度計画

五 月度 皆子山

六 月度 峰床山

七 月度 六甲山

八 月度 霊仙山

九 月度 竜王山

十月度 武奈ヶ岳

十一月度 葛城山

十二月度 愛宕山

俳句入門講座(ならやま句会) 牧野 和代

春駒が逝ってから、早や一年半、春駒のあとをお受けしたものの、この重責を背負ってゆけるかどうか不安で一杯でしたが、会員の皆様の努力と熱意に励まされて、ここまで続けることが出来ましたことを嬉しく感謝致しております。

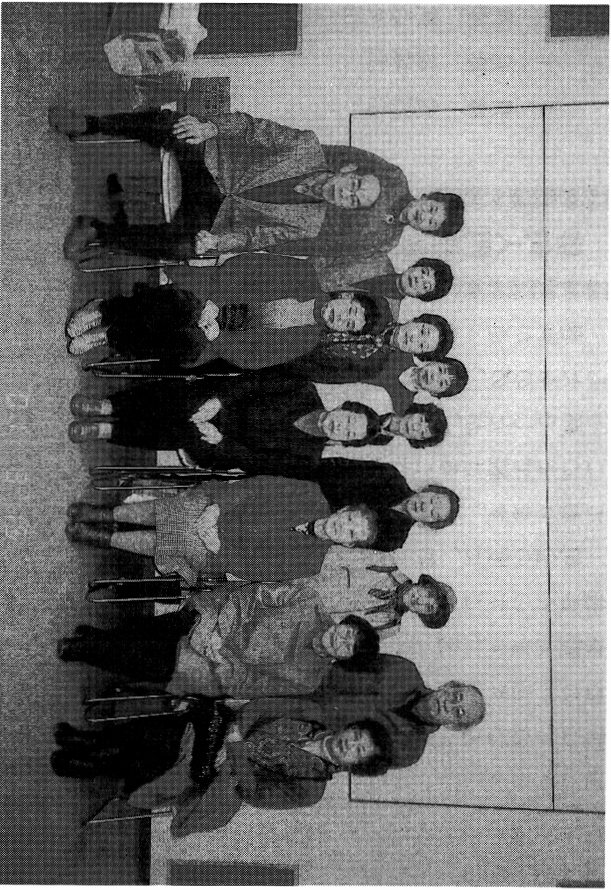
句会の度に、特に席題に取組んでおられる時、会場に皆さんのすごい集中力と熱気が、ひととき張りつめるのを覚えます。選に入る入らないは二の次であって、私はこの一ときの集中力と熱意こそ、この会で収得出来る貴重なものであり、大切にしたいものと思っております。これからは、「見えて見えてない世界」を「聞いて聞いて聞こえてない世界」を探して詠ってみたいと考えております。

春駒選・和代選による月刊「ならやま」が、平成十三年一月で、百号を迎えました。会員一人ひとりの足跡をしっかりと残すことが出来うれしいことでございます。次は四年後の百五十号を目指して、更に力強く大きい足跡を残してゆきたいと願っております。

祝「ならやま」百号

草萌に足跡著くありにけり 牧野 和代
導びかれゆくならやまや松みどり 和田美代子
百号の句座に侍りし初音かな 藤沢 陽子
百号を祝ふ句会や梅の宿 伊藤 柳紅
梅歳々初心に還り句会かな 堀池 敏子
春風に句集百号駆けつづく 南村 照栄
咲く梅に多作多捨して早や百度 込山 山歩
ものの芽やならやま結ぶ赤き糸 多田 文子
百号となりて綴じたる鐘霞む 西山佐代子

「俳句をやってみたいなあ」「だけど私は俳句の素質なんて」とお考えの方は、一度平城西公民館へ見学に来



て下さい。そんな不安はふっ飛んでしまいますよ。キャリアのある人もない人も句会の度に同じスタートラインに立たされます。安心してはじめてみませんか。



辻田しま代

大阪市より当地へ移りまして、文化協会の「詩吟の会」へお誘い頂き入会させて頂きましたが、「俳句入門講座」ならやま句会」もあると言うことを聞いていました。ある年、故郷へ法事で帰りました折、駅々の桜が満開でした。

四姉妹法事帰りの花の駅 しま代

この句が私の処女作です。あれこれ思案をした上で、牧野春駒先生に、「ならやま句会」の入会をお願い致しました。「ならやま句会」は、平城ニョークン文化協会に入っている方々で月一回、それとは別に、平城院句会が月一回あり、春駒先生は、「平城院句会」へも出る様にすすめて下さいました。知らないという事は結構な事です。

京都・大阪・神戸・須磨・高槻・亀岡等より、波多野
爽波・大峯あきら・森一郎・原田暹・田中裕明・岸本尚
毅・太田文明各著名なる先生方がお越しになられました。
その日の兼題は「萍」^{うきくさ}でした。

翁来て竿で萍寄せてゐし しま代

の句を爽波先生が特選で採ってくださいました。よろこ
びが落着くと空恐ろしくなり、努力努力と言ひ聞かせて
いました。その頃、四国八十八ヶ所参りに誘われ、「平
城院句会」は欠席がちになりました。「ならやま」句会
は、今も続けさせて頂いております。

春駒先生は、背布団を背負われ御無理なされたと思ひ
ますが、何時も柔和なお顔で十数年熱心に御指導下さい
ました。春駒先生も小康状態が続き、春駒選のならやま
集が月一回発行される様になりました。句が出来ない、
選にもれたとか、わあ、特選やとか、落ち込んだり希望
をもつたりの明るく楽しかった句会も、春駒先生の御逝
去により淋しい限りでございましたが、その後、大黒柱
を失った句会をお忙しい中、牧野和代先生が御指導くだ
さり、句会もまた活気が戻って参りました。

二十一年一月号が、「ならやま集百号」となり記念行
事は、に京阪奈公園へ吟行、百一号より新しい試みとし
て、一句二座欄を設けられました。

春駒先生に見守られ、和氣藹々と和やかに一步前進の
年になりますよう願っております。私の句作りは、呆け
防止、日誌代りとも思っています。気楽に俳句作りを、
楽しませて頂いております。

御希望の方は非御入会をお勧め致します。

園芸の会

北村 孫衛

花作りに醍醐味を求めて

園芸の会の会場を自宅にして、もう十年を越えました
が、十六年は一昔、夢だ……と源氏の武將の熊谷は、出
家しました。今の世の中十年は一昔で、変らないのはこ
の十年間ず——っと、不景気だと言うことだけです。

人の心と花の香は、うつろい易いものだそうです、
近年、園芸の会は、茶花と山野草と、最新のピッカピカ

の外來草花類が話題の中心です。

そして、そのいづれもが、花が咲けば、切花にして、生活を飾ろうではないか、暖い季節には竹籠や、食器棚のガラスの器に、寒い時季なれば、眠っている徳利にでも、花をさりげなくいれてみよう、と話は続きます。花を眺めた後は、再びの生命を求めて、挿芽をしてごらんなさい。私達が考える以上に根の出易い植物はたくさんあります。

こうして例会は、床に活けた花の育て方から、いけばなの扱いに至るまでを話題として進行します。

又、話題となった花苗を持ち帰り育てて、楽しみを共有することも大切だと考えています。

現在では、花付ポット苗を比較的安価に入手することが出来ますが、矢張り種子から育てたり、挿芽や地伏せで殖やすことも、花が咲いた時のよろこびは一人です。五月の連休から、六月一杯にかけては、挿芽の絶好期です。菊やサツキ、女郎花、藤袴、桔梗もホトトギスも、花手鞠やベゴニアは殊の他簡単です。椿だって冬か春には、親木と同じ花が咲きます。

出来るだけ長期に恒り花を愉しむための、秘伝を伝え

たい。どこのお宅にも花がテenko盛りに咲いている。ウォーキングしていても、わくわくする様な街になって欲しい。今は世を挙げて、いやしの時代、花との対話で、又元気をいたたく、園芸の醍醐味であります。

フランス語講座

根来 良子

まず、このフランス語講座を開講され、長年にわたり熱心に、誠意を持って私達を指導してくださっていた、高橋節子先生がご都合で、退かれることになりましたことをご報告いたします。この紙面をお借りしてフランス語講座より厚くお礼を申しあげます。また復帰される日を一同切にお待ち致しております。

なお、この講座は相変わらず続いておりますので、フランス語に興味のある方ならどなたでも、のぞいてみてください。和気あいあいとした雰囲気の中で、テープを聴きながらの日常会話の練習や、関連した文法的演習をやっております。

今回は改まって何かを書くという材料を持ち合わせて

おりませんので、思いつくままの「語学の楽しみ」をいくつか挙げてみたいと思います。これはフランス語に限ったものではなく、どの言語にも共通するものではないでしょうか。

一、話し言葉の楽しみ

会話によって外国人とのコミュニケーションを広げることが出来る。

旅行、買物に役立つ。

テレビのCMの意味や映画で俳優のしゃべる外国語が聞き取れる。

歌やシャンソンも歌詞がわかれば一層楽しい。

二、書き言葉の楽しみ

話し言葉と違って、文字から異文化に接する方法であり、辞書を片手にゆっくりと楽しむことが出来ます。

新聞や週刊誌を読む。

文学作品を原書オリジナルで読んでみる。

日本語と比べてみる（構文・意味等）。

料理を楽しむ会

岩井 静栄

長寿社会と言えども、だれもが願う事は、健康で長生きする事です。それには規則正しい生活、食事、運動をぬきにする事は出来ません。めまぐるしい社会変化の中で、食事についても、大きく変化してきています。その内の一つをとってみますと、昭和二十年を境とした戦中、戦後の食糧難時代には、いかにして空腹を満し、栄養とカロリーを上げるかが第一の課題でした。ところが昨今は、成人病予防のためにも中性脂肪、コレステロール値を気にかけて、低カロリーで一日三十品目のバランスのとれた減塩、減糖、減脂の食事内容へと変化してきています。合わせて、おいしく、楽しく食べる事も大事な事で、調理をする主婦の果す役割は大きいものです。この会に参加して、私が最近見直した事は、スクランブルエッグを自分流に決めつけて油を使っていたましたが、湯せんにして仕上げる。この方法は何でもない事です。がみんなもうな○な○き○でした。料理の会では、松村リーダーを中心に、安くて身近に手に入る季節の食材を使った

家庭料理をみんなでワイワイと楽しんで作って試食しています。作る人が楽しんで作ると食べる人も楽しんで食べてもらえるようです。年令も四十代から七十代と巾広い仲間です。ニュータウンの特徴である人と人との交流の少ない中で、同じ意とする者同志が活動を通して仲良くなり、人の輪が広がり、助け合い、生き生きと生活出来る仲間作りにとって、文化協会の果す役割は大きいものと実感しています。この会は月一回で第三木曜日十時〜十二時まで平城東公民館で行なっています。費用は毎回違いますが六〇〇円前後です。まずは見学においで下さい。お待ちしております。

因みに、これまでのメニューを紹介します。

十三年二月

十三年一月

ピロシキ

白菜とみかんサラダ

ウインナーピラフ

ブロッコリーのスープ

蟹ごはん

里芋の柚子みそ和え

百合根まんじゅう

茶碗蒸し



表装の会

平田 忠子

軸装とは、切紙細工みたいにな、順序立てて切り継ぎ、張り合せていくのですから、誰にでも出来る作業です。でもそれが0.5mm 1.0mmの違いが、最後には全体に響いて、曲ったり、反ったりして、中々思う様には、出来上りません。でも先生がついていて下さるので、マジックの様に何とかうまくまとめて下さいます。

遅々として、上達しない私共六人ですが、一回毎に、少しづつ進み、今では西島先生を頼りながら、何とか、仕上げていきます。

何分場所をとる作業ですので、人数をふやす事が、むつかしく回転率が悪く、心苦しく思っています。御希望の方がありませんら、一度、第二・第四木曜日、午前十時頃から午後四時すぎまで、北部出張所会議室で、集っていますので、のぞいてみて下さい。

みんな気心が合い、和気あいあいと、五時頃まで、お茶を飲んでたのしいひと時を、過ごしています。

木目込み・押絵同好会

谷口 直子

春の便りを一番早く運んできてくれる沈丁花や水仙に重なり、「こんな色合いもあるの?」と感嘆の声が出る位色とりどりのチューリップ。目線を上げると雪柳、見上げると桃に桜やレンギョウ等、朝夕の花冷えをちょっとり我慢すれば日中の日差しの明るさと暖かさは、今が一番体に心地よく、散策する足どりは、あっちこっちの花々に魅せられ、眺め佇む時の長いこと。「そうだわ」、秋蒔付けの花の種が、寒い冬を越して固い土を突き上げて芽を出すに、丹精した水やりや適切な肥料やりは、荒らい桐粉の人形のボディを絹の膚に迄磨き上げ、補正する動きのそれと同じで、一番手が抜けなくて、もうこの辺でと思う気持が、咲き開く花とちりめんや金欄を装った人形に、正直に現れるのではと思います。

だからと言って、花作りも可愛いがりすぎて、芽が出てからも枯らすこともあり、人形作りも一生懸命すぎて嫌気が差すこともあるでしょう。でも我がグループは、生きる達人、名人の多い強者揃い、押しより引き手の妙

味を心得、疲れてくるとお茶にお菓子に手が伸び、大いに口がなめらかに動くのです。感心の一語です。手作りの細かくて長い過程、お勉強じゃない遊び心が長続きの大事なことと、会員の皆様から教えられるのであります。人形に少しでも興味をお持ちの方、月の第一と第三の曜日、「どんなんかな」と覗いてみませんか。

和やかな雰囲気に入部してみようかなという気持ちが起るかも知れません。お待ち申しております。

詩吟の会

西村 諄輔

私が詩吟を習らおうと決心した動機と云いますと、一昨年六月に永年連れ添いました糟糖の妻に先立たれて、心身ともに疲労困憊に達していた際、若い頃より何かとお世話になり尊敬しておりました大先輩の吉本音市先生より、世の中多くの人の人生は、その八〇パーセントが苦難試練との戦いであり、真の幸せは僅かに二〇パーセントに過ぎない。その二〇パーセントをより良くエンジョイする為、積極的に自ら動き捉える事が大切と諭され、

ストレスの解消と健康保持の為に詩吟を一緒に勉強しようと思われ、大きく心が動いた為です。亡妻の祭祀が終り心の落ち着きを取戻した、平成十一年九月一日から教室に入れて頂きました。当時吉本先生は明治四十一年生れの九十一歳、現在九十三歳のご高齢ですが、全然齢を感じさせない若々しい迫力と声量豊かな吟声に、唯々感嘆と畏敬の念を抱くばかりです。また吉本先生を援けて私達をご指導して下さる西尾弘子先生は、女性らしい細やかな心配りと熱心なご指導で、私達を根気よく導いて下さっております。紀元六、七百年の昔、中国唐の時代に輩出した数々の有名な詩人、我が国においては、幕末から明治にかけて、激動の世に生き、活躍した偉人の心情が偲ばれる詩歌等懇切丁寧な説明を聞き、悠久の各時代をそれぞれ遅しく生きた人々に心をはせ、気分の改まる思いをいたします。秋に催されます真風流阿倍仲麻呂を偲ぶ月見朗詠の夕、平城ニュータウン文化祭、新年会、詩歌にまつわる史跡のバスツアー等々、楽しい催事も数多く実施されております。ストレスの残らない適度の緊張感を憶えることは、人を生き生きと蘇えらせて呉れます。自律神経系の交感神経が興奮して、心臓や血管

の働きと老廃物の代謝が促進させるので、顔色も良くなり、脳の血液循環も活発化され、何時までも生き生きと若々しさを保つことが出来ます。若さを保ち美しい老後を過すためにも適度の緊張感を持ちましょう。大きく声を出して詩を吟ずることこそ、最適だと思っております。時として、雑談に花咲くこともあり、人生経験豊かな皆さんの体験談を聴く等々、大変楽しい集いであり、毎月第一、二、三の水曜日に、午前と午後に分れて練習をして居ります。午前は主として女性、午後は男性（女性の方もおられます）と、それぞれ頑張っております。お暇な時、一度覗いて下さい。

野草をしらべる会

前川 良雄

二十一世紀の幕開けの春になりました。一番春らしく感じられるのは、野草です。野山の枯れ草がだんだんと芽生えて緑化して春がきたと実感できます。萬物すべてが野草、樹木、小鳥、虫、牛馬犬猫、人間等々が春をたのしみ、喜び、希望を持って明日へ向って努力しようとする

がんばっています。それらの中でも「犬のふぐり」が一番早く紫の可愛い花を咲かせます。ついで「つくし」が親まれる雑草です。つぎに「よもぎ」です。よもぎは餅になり、やいとこの原料になり、春を代表する野草です。三号公園では暖かい広場にタンポポが黄色のじゅうたんを作って子供たちの楽しい遊び場になっています。他に桜も咲き揃って、本当に休憩するのに絶好の広場に感じられます。ついでつつじの一種「ひらど」が美しく咲きみだれ、藤の花も棚より咲き出して、本当に春を楽しむことができます。これらの樹木の間よりつぎのような雑草が生えてきます。ヤエムグラ、スズメノエンドウ、カラスノエンドウ、カスマグサ、セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ、フキ、スマレ、レンゲ、パンジー、チューリップ、シヤガ、フリージャー、カリン、スズメノヤリ、スズメノカタビラ、アザミ、ヒメジョン、ハハコグサ、チチコグサ、サクラソウ、スマレ、カタバミ、シロツメクサ、レンゲソウ、アカツメクサ、ミヤコグサ、キツネノボタン、ハコベ、ウシハコベ、ミニナグサ、ツメクサ、ハルタデ、スイバ、スズメノヤリ、カズノコグサ、カモジグサ、チガヤ、ス

ズメノテッポウ、タカサブロウ、カラスウリ、オオバコ、ヘクソガズラ、ヒルガオ、マツヨイグサ、チドメグサ、ヤブガラシ、ヤハズソウ、ツルマメ、クサネム、ナデシコ、スベリヒユ、ギシギシ、イタドリ、ドクダミ、クワクサ、スベリヒユ、ネジリバナ、ツユクサ、ズメノヒエ、ノビル、エノコログサ、オヒンバ、メヒシバ、イヌビエ、ヒメコバンソウ、カラスムギ、アキノノゲシ、アメリカセンダングサ、ヨメナ、セイタカアワダチソウ、オナモミ、ワレモコウ、イノコズチ、イヌビエ、イヌタデ、オオイヌタデ、ボントクタデ、ミゾソバ、ヒガンバナ、カヤツリグサ、ススキ、ジュズダマ、チカラシバ、等々の草花が生い茂っています。本年はこれらの草木の標本を作ってみようと思っています。また野草の会は第三水曜日の午前十時より右京集会所で開きたく計画をしています。電話は七一局の〇六八二にして下さい。會員の皆様この野草の中でいくつこれだといえますか、十コから二十コまで言えるとうよいと思います。三十種類言えると優秀です。

英語講座

加藤 啓子

会社に外人のお客様が来社されることや英語で電話がかかってくるが多くなり、もっとスムーズに対応できるようにになりたいと思って、自宅近辺で英語の教室を探していたところ、ご近所の島田さんから「先生が非常にいい方で」とご紹介頂いたので、この英語講座との出会いました。それから早や五年、月二回土曜日午前中の英語講座が私にはとても楽しみな時間となっています。

前半は中学二・三年の教科書を使って進められ、そして後半はちょっとハイレベルなテキストに取り組んでいます。前半と後半の間は、ヒアリングや、英語の歌や、フリートーキングなど、気分転換の時間です。最近では一つのテーマを決めて簡単なスピーチをする宿題が出ることもあります。平日は自宅と会社を往復するだけで一杯で、予習・復習はもちろん宿題さえできていない私ですが、何とか続けていけるのは、やさしい鎌田先生やメンバーの皆さんのおかげと、感謝しています。

授業以外では、新年会と夏の食事会のほかに、昨春秋



2000年11月18日 浄瑠璃寺にて (英語講座)

には「英語クラブハイキング」が行われ、私は残念ながら参加できませんでしたが、JR平城山駅から浄瑠璃寺までを徒歩で往復。また今年の春は有志で西大寺・盆梅で有名な菅原神社・喜光寺・薬師寺へと散策するなど、教室外の活動も盛んです。

メンバーの方は、皆さん英語以外にもいろいろな多趣味多才として博識でいらっしゃるの、会社では得られないような情報や話題がいっぱいで、とても楽しく有意義なサークルだと思います。これからも、無理をせずマイペースで、ずっと続けていきたいと思っています。

押し花を楽しむ会

西山佐代子

梅、桃、桜もすっかり終り、水木の花の見頃となりました。幼い時、四ツ葉のクローバーをさがし、マンガ本にはさみ押花を作りました。

現在では、色落ちのしない便利な乾燥マットがあり、大へん重宝しております。

押花で一般的に使い易いお花は、小花です。身近にあ



ります、パンジー、ノースポール、バラ、エメラルドセイジ、芝桜等です。又、数々の色がありますが、赤、白、黄、ピンク、紫等が、仕上りが良いと思います。緑は、残念ながら、色が褪せてしまします。

花はお天気の良い日に、七、八分咲きのものを摘みます。先生は、花を摘む時には、「ごめんね。ごめんね」と、断わっておられるそうです。その謙虚さが花にも通じ、仕上りの良い押花になるのかも知れません。

つつい甘えてお花を頂戴いたしております。会員の方も、いろいろと材料を提供して下さいます。ほんとうに感謝しております。

路傍の草花も、とても良い材料になります。カラスのエンドウ、つくし、タンポポ、スマイレ等沢山あります。押花は、額面にしたり、タイルにはったり、バックのアクセントにいたします。

お祝や、お見舞いのカードに添えるのも良いものです。昨年、さそわれて、苧麻草カラムシソウを取りに行きました。

今年も、そろそろ芽吹く時期でしょうか。文化祭に向けて、お花も集めたいと思っています。

先生をはじめ、会員の皆様とても熱心で、半日がすぐ

たつてしまいます。月二回、第一木曜日、第四水曜日、十時より講座がはじまります。御都合の良い日に、是非ご参加ください。歓迎いたします。

拓本を楽しむ会

込山 博介

昭和六十四年秋、文化祭で拓本展を見て、豫て自分も三十年程前からやっていたので早速入会させていただきました。会員は二十名程で、當時、会長は渡辺亮斗氏でした。

採拓は、山の辺の道をはじめ千里南公園、伊丹市昆陽池公園、又遠く信州迄一泊で出掛けたり、みな元氣一杯で採拓し、又春秋の展示会を目指し、表装に力を入れてきました。平成四年渡辺氏手術入院され、その後体調勝れず、不馴れな私がお世話する仕儀となりました。当初は相変らずあちこち採拓に歩いていましたが、いつしか十年余り過ぎ、会員一同も共々に十年といふ年齢が加わりました。

なにぶん拓本を採るのは、天候に左右され、道具一式

をリュックに背負ひ、現地でもうろうろと歩きまわることも多く、十年経ってようやく会員に疲れ、無理が見え出し、加えてこの十年程の間に数名の方が亡くなられ、会も淋しくなってきました。それかあらぬか、久々に淡路へ行こうか、と話まとまりましたが、明石大橋が出来たため、今迄、利用していた快速艇がなくなりバス路線となり、その時間を調べ、採拓許可を頂き、宿も予約して、さて参加者を問うたところ、手を挙げたのは一名だけで、話はお流れになり、又日帰り採拓に四、五人で行く時も、当日朝に体調悪く不参加の人が出たりして、今迄になかったことが現われ、もし現地で体の変調でも出れば困ると思ひ、昨年十一月会員の方々と相談しましたところ、尚今後も拓本を続けると申される方が数名おられ、その方に会の継承をお願いしましたが、会としてではなく、同好の寄り合いとして折々誘い合わして行き、文化祭には自由出席の形で出したいとの意見でした。

このため残念ながら、会の解散と決まり、十二月九日北部出張所会議室でお別れ会をしました。

永年に亘り、ご協力下さいました会員の皆様、誠にありがとうございました。

「書」その果てしない世界

書は心を養う世界です。筆をとって紙に向かう人は、たとえ未熟の筆であっても、こころを澄ませてその時は純粹な境地を得るものであり、机上に古人の名蹟や拓帖を展げるときは、目前に展開する筆跡のすばらしさに感じ入るものです。それらは凝縮された精神の世界として、見る人の心にうちひびいて、他の芸術ではうかがえない直接な触れ合いを知ることができます。

しかし、書は厳しすぎるために、親しみにくいということも否定できません。だが厳し過ぎるほどの世界であればこそ、絶対の光を放つのではないでしょうか。

眼に触れる風物の面白さや、心に響く感銘をどのようにして表現にとどめるか、生きることの本当の意味を問うて東西の文明はそれぞれの絵画や彫刻を生み出しています。書は、本来実用の記号でありながら、実用の領域を遠くぬけ出して、直ちに精神の披瀝になり、絵画や彫

刻のような煩雑なテクニックでは到底表現がおぼつかない、もっとも奥深い純粹な精神を端的に直截的に表現できる文化として、中国・朝鮮・日本に独自のジャンルを形成してきました。

書の歴史をたどってみますと、特に書の文化発祥の地中国を例にとりますと、いつの時代にも書く人の教養の深さや、精神の広がりがある作品の価値を決定づけるものとなっていました。

しかも書は、文字を書くことに限定されるだけに——現在では絵画的魅力の演出もみられますが——その制作は古代から現代に至るまで一貫して共通した表現によっています。したがって、書を学び鑑賞するのに、あえて目の前の現代に視野を限ったり、ごく近世の書人だけに焦点を合わす必要はありません。自分が魅力を感じるからといって特定の作家や、最初に手がけた範囲だけに自分の視野を限定することはもったいない話だと思おうのです。

果てしなく広がる書の世界に一人でも多くの方が刮目されればと願っております。

中国語同好会

乙部 美鈴

私達の会は発足してから、今年で四年目になります。

毎週木曜日の午前中に、約十名程の者が集まって松村如洋先生に中国語を教えていただいております。

会員の中には、以前中国で中国人に日本語を教えておられた方や、中国に何度も旅行で行かれた方がおられる一方、まだ勉強を始めてから一年足らずの方がおられるりと、レベルはまちまちですが、松村先生を中心に皆んな仲良く、楽しく中国語会話や新・旧の中国事情を学んでいます。

この三月には、中国の長春（吉林省）から奈良女子大学に来ておられる留学生を招いて、中国語会話のひと時を楽しみました。留学生の方は、二十代の若くて聡明な女性でしたが、世代を越えて本当に一生懸命私達の話聞いて下さいました。又、私達もたどたどしい中国語ではありましたが、皆んな必死で中国語で気持ちを伝えました。ある程度中国語の漢字は読めますし、ゆっくりとなら会話を聞き取る事も出来るのですが、彼女に日常会



中国からの留学生を囲んで（01年3月22日）

話の速さで話していただく、殆ど聞き取れませんでした。ここで、皆んなリスニングの難しさを痛感しました。

松村先生は、この貴重な経験をこれからの授業に活かそうと、四月からはもう一度初心に戻り、基礎から正しい四声（発音）の復習をして下さっています。

今なら、初めての方でも大丈夫です。現在、男性会員は、たった一人です。もしよかったら、男性の方、私達の会にお入りになりませんか？ 勿論、女性の方も大歓迎です。さあ、皆さんと一緒に中国語の勉強を始めましょう！

地酒を味わう会

松本 敏夫

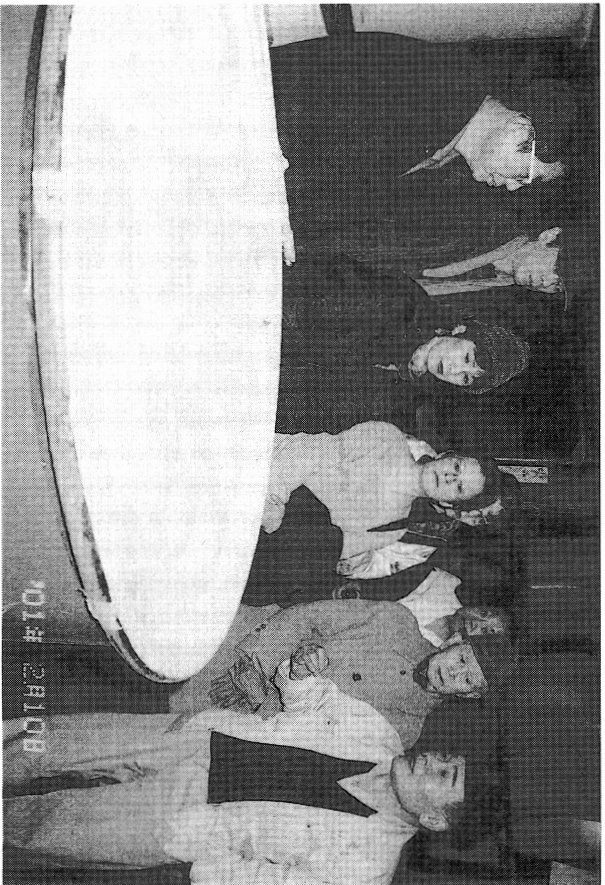
昭和五十八年四月二十三日に市役所会議室で第一回例会が十六人の同志の集まりで行われた。それから十八年二カ月、今年六月の例会で二〇〇回の節目となり、M社宝塚保養所での一泊合宿を予定している。同所名物の神戸牛のすき焼きで盛り上がることだろう。振り返れば第一〇〇回は、うまい具合に二月恒例の酒蔵見学・利き酒

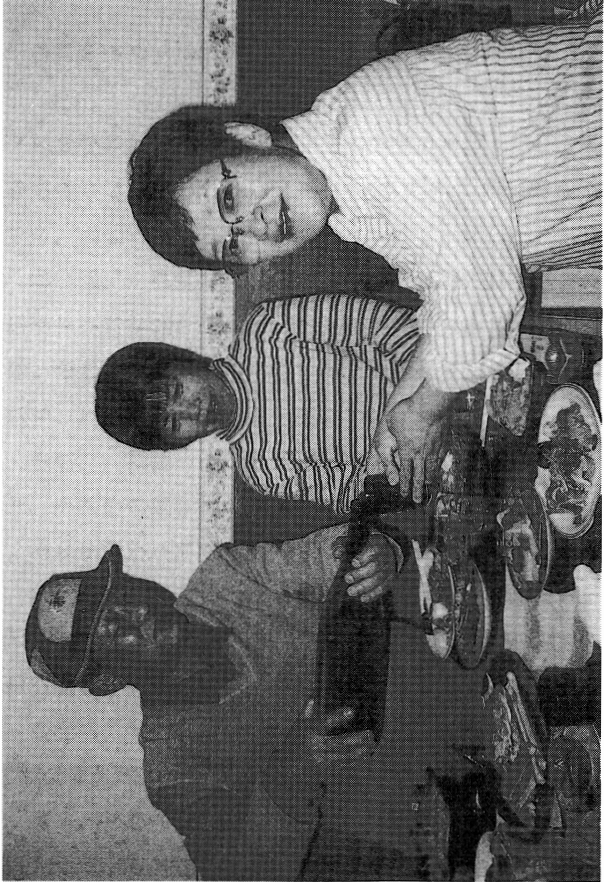
と合致した県酒造組合連合会主催の「奈良県寒造り・新酒まつり」がありそれに参加した。（平成四年二月八日 県新公会堂）

同催しの平成五年二月には利き酒会で約三〇〇人の挑戦者の中、我が会員の福田政則氏が見事二位に入り、東京での全国大会に進出している。残念ながらその種の荣誉はそれ以後久しく聞かれない。どなたか我こそはという方は一度例会をのぞいてみてください。

この一年の活動報告を簡単に写真と共に紹介します。まず二〇〇〇年五月から。般若寺前の「御逢詞菓」にて澤乃井（東京）純米大辛口などを飲む。十七人参加。井上昭夫氏進入会。六月は十九人参加で右京の「味杉」にて高知の純米吟醸「亀泉」などを。七月は小西通りの日本料理「恵方」にて「東洋美人」（山口）などを飲み、二次会のカラオケでも盛り上がった。八月は三井ガーデンホテル屋上ビアガーデンで飲み放題。九月は県庁裏の「天平倶楽部」でてっちりを着に「東北泉」（山形）の純米大吟醸「風露」など。十九人出席。十月は三条通りの「梁山泊」にて「繁樹」（福岡）など。十一月「味杉」に







て。「神亀」(埼玉)など。丸山朋代氏新人会。十二月忘年会は「御逢詞巢」で十九人出席。「強力」(鳥取)などを。

二十一世紀の幕開けは文化協会「筥の会」主宰者でもあった故中野昭三氏の追悼会となったが「天平倶楽部」で二十三人が集まった。「下天の夢」(兵庫)など。二月の酒蔵見学は吉野町「花邑」。利き酒後、地元に戻り「味杉」でうどんすき。三月は初の趣向(酒肴?)焼きふぐを新大宮の「なり田」で。酒は「天寶一」(広島)などを。四月は新祝園まで遠征。創作料理「塾」で「初亀」(静岡)などを。佐藤元信氏が新人会、十七人出席。こんな具合で毎月第二土曜日六時半から場所不定ながらどこかで飲んでいます。(会費は三五〇〇円から五〇〇〇円の範囲です)。

連絡は当会事務局長・鈴木(七一・一六九〇)または松本(〇七七四一七三一八一八四)まで。

パッチワーク研究会

新司 輝江

以前にパッチワークを少し教えてもらった事があり、また機会があったらと思っていました。昨年 of 文化祭の展示を見に行ったのをきっかけに入れていただきました。各々が作りたいものを考え、それに先生が適切なアドバイスをしてくださり、一つの作品が出来上がっています。それぞれ個性的な素晴らしい作品ばかりです。

また、二時間くらいで出来るような小物を考えてくださって、材料まですべて用意して下さるので、その場でかわいい作品がしがたていきます。目の前にへたでもすぐに作品が出来るととてもうれしいです。

月二回、三時間たらずの間、楽しいお話に耳を傾けながら、適当に手を動かしながら、マイペースでやっていくてらいいなあと思っています。(作品作りに大事なセリがかけているのが、ちょっと心配です。)

これからもよろしく願っています。

写真同好会

寺嶋りくお



4月度八席「練行」

写真同好会の毎月の例会に、それぞれが写した作品を持ち寄り、展示し、「いつ」「どこで」「絞りは」「シャッタースピードは」「どういう意図で」写したかということとを作者が説明し、疑問があれば質問し、「もう少し左から」とか「下から写せばもっと背景が良くなった」などと批評し、出席者全員が生徒であり、先生として質疑応答をします。

同好会で写真を始めた人は、それが普通だと思っておりますが、実は、私が大阪で始めて入会した他のクラブなどではそうではないのです。それぞれが写した作品を持ち寄り、展示するのは一緒ですが、各人が自分以外の作品を五点選び、なぜ選んだかという理由（良い所）を伸べるだけで、作者が日時や場所やデータや意図などを話すことはありません。

たまに初心者が質問したとしてもあいまいに答えるだけで、はっきりと教えてくれません。盗むか自分で研究するしかないので。なぜなら、互選や先生選は一年間集計してその点数によって順位づけするので、他の人の作品が良くなれば相対的に自分の順位が下ることになるからです。

私はこの四月から全日写連平城支部に入会し、三月の支部例会で先生が選んだ五点に入り、四月の本部例会で奈良県内十五支部から選抜された七十一人の中で八席に入りました。いづれ朝日新聞奈良版に名前が掲載されることになるかと思いますが、これも同好会で三年間多くのことを教えていただいたお陰だと感謝しております。

これからも、同好会で学んだことをフォトコンなどどのように評価されるのか、同好会は奈良県でどの位置にいるのか試してゆきたいと思っております。

どうぞ、初心者の方も私たちと一緒に写真を楽しみませんか。

「管作りの会」

赤井美津子

「管作りの会」は発足して十年が過ぎました。『層富』の「No.12」に命名の由来が記されていますので引用させていただきます。「発足の始めに、先生の作品を拝見して、あまりに完成度が高く、その美しいのに驚きました。そんな訳で、ただの『箱』では気持ちが悪くないので、

『玉手管』と同じ『管』を作るつもりで、『管』と言う字を当てる事にしよう、と相談がまとまり、『管作りの会』と命名したのを記憶しています」と書かれています。この十年の間には、中野昭三先生の御指導によって、美しい管、実用的な管、思い出の詰まった管、愛嬌のある管……：etc、数々の管達が会員の手から産れてきました。『いつも笑顔の先生』と『おしゃべり大好き叔母ちゃん達』の「管作りの会」は、ワイワイガヤガヤ……それはそれは賑やかです。

今年も例年通り楽しい新年会からスタートの予定でした。ところが十一年目を迎えるこの新春に突然、中野先生急死の訃報が流れたのです。誰もが耳を疑いました。あんなにお元気だった先生が何故……。しかし、悲しい事実を私たちは受け止めるしか有りません。

「管作りの会」は今後どうしたらよいか？。副会長、事務局長のお二人にアドバイスを頂き、話し合いの場もたれました。結論は「今まで先生に教えて頂いたことを基に、会員相互の協力と創意工夫で、会を継続していきますましよう」と言う事になりました。今まで同様の作品は出来ないかもしれない。それでも皆で智慧を出し合っ

て、無理をせず、欲を出さず、楽しくやって行きたいと想っています。

現在、会員十三名。一人の退会者も無く、何処からか先生の声も聞こえて来そうな、相変らず賑やかな「笹作りの会」です。三人寄れば文殊の智慧。それにベテランの諸先輩も居られます。第二の「笹作りの会」はしっかりと歩み始めました。是非、覗きにいらして下さい。そしてお仲間になりませんか？。

短歌を楽しむ会

安田 和子

「層富」、SOHFU 優しい音だわ。

私は平城ニュータウン文化協会の会誌「層富」の一冊を手にしながらか、そう思いました。そして先日「短歌を楽しむ会」で、突然、原稿を手渡された時の状況を思い出しています。

入会して未だ二、三年しかたっていない私は、「グループからのお便り」欄に寄稿する。というお役目が廻ってくるなんて、思いもしなかったものですから、少々吃驚

してしまったのです。

「あらっ困ります。これー」

「みんな書いて来たのよ。書ける書けるっ」
気の弱い(?) 私は黙ってしまいました。結局諒承ということになってしまいました。故に只今、無我夢中で悪戦苦闘をしている最中なのであります。

平成十一年の晩秋の或る日、枯葉舞う美しい「高の原」の町の「文化協会」のドアを、そうっと、押して入ったのがこの町の「文化協会」との交流の第一歩でした。

親戚に推められて「文化協会ニュース」のコピーを讀みながら、その中に「短歌を楽しむ会」というのがあるのを見つけました。講師・網干善教とあります。網干先生と言えはあの高松塚古墳を発掘なさった先生ですよ。これにしよう。歴史を感じながら短歌が作れる。ラッキー。」と、喜び勇んで門を叩いたのであります。

残念ながら先生は滅多にいらっしやらない。との事でした。どうしようか。迷う事はありませんでした。私はそれ以来、この会に居坐っているのです。「短歌」この日本古来の美しい「三十一文字」の詩的な世界に惹かれ



2001年1月16日 於エルバ

ている私でした。

と云うことで、この会は、同好の志の集りでありまして、お互いの短歌を持ち寄り、楽しむ、ということになります。飛び交う皆様の御意見を参考にしながら、次の回に挑戦するという、なかなか面白い会であります。

扱『古今和歌集』の中で紀貫之は、

「和歌は、人の心を種として澤山の言の葉となつたのである。この世に生きている人は辱すこと、する業が多いので、心の中で思うことを、見たり聞いたりすることには託して言い出した言の葉も数多くなつたのである。花の間で鳴く鶯や水の中にすむ蛙の鳴声を聞くと、人のみならずこの世の中のあらゆる生き物が歌をよむことがわかる。」(古今和歌集・全訳注、久曾神昇)

千年前の紀貫之は、鶯も、蛙だつて歌を詠んでいると言っているのです。これを読むと少し気が楽になりました。気取らずに、自然に歌えればいいですね。

記・紀・万葉の昔から我々日本人の御先祖は、言葉に靈力があることを信じ、自分達も言葉によって救われ、力を与えられる事を知って、その不思議さを喜び和歌と

して伝えて来たのでしよう。この会でも皆様、とても伸びのびと、時には人麿呂、茂吉、又晶子や万智さんに負けない程にお上手で、作歌を楽しんでいらっしやいます。身近な人々の嬉しい出来事のある時、又慰めてあげた
いお悲しい時など、さりげなく一首作って差上げるのも喜んでいただけるのではないでしょうか。

「平城ニュータウン三十六歌仙」と恰好つけてみたところなのですが只今会員は二十名ならず。三十六名には少々数が足りないようでございます。まだまだ空席がございますので皆様急いで御入会下さいませ。

会員一同心より歓迎申し上げます。

まだまだ未熟な私ですが、会員思いの諸兄諸姉の温い援護をいただきながら、これからも頑張ってまいりたいと思っております。

皆様何卒よろしく御願ひ申し上げます。

手踊り同好会

島川恵美子

毎年の文化祭にご参加の方は、「まりと殿様」や「松の木小唄」等をご一緒に歌って踊って下さっているのをご存じと思いますが、皆なの知っている楽しい歌を誰にでも簡単に踊れるようにと考え、工夫して作られたのが手踊りです。

飛鳥華蓉（毛利公子）、岩井梅香（山内梅乃）の二人のお名取りに、手踊りの他、古典から新舞踊まで丁寧にご指導して頂いています。教わる方の私が覚えが悪い上に休みがちで、誠に申し訳なく思っております。

今一番の悩みはお仲間が少い事です。どうか、気分転換がてら体を動かして（口を動かしている時間の方が長い時もあります）来て下さい。

第一と第二の金曜日、十時から十二時まで、北部出張所の会議室、又は右京三丁目のふれあい会館で練習しています。お気軽に覗いてみて下さい。お待ちしています。文化協会の講座、同好会をご指導、お世話して下さい。ている方々に、心より感謝しております。

今後共、よろしくお願い致します。

銅板レリーフ同好会

中村 一郎

私は当同好会に入会させて頂きまして早や三年が経ちました。

生来、無芸大食無趣味を自負していたのですが、講師先生の懇切な御指導と仲間の先輩の助言のおかげで、現在迄で続ける事が出来ましたことを感謝しております。

現在会員は、男子七名女子二名の計九名で、例会は月二回第一、三の金曜日一時半〜四時迄平城西公民館で習作を行なっておりますが、皆さん熱心な方ばかりで、一時頃には全員集まり、和氣藹々の内に作品の製作に没頭してあっと云うまに時間が来てしまいます。

銅板レリーフとは厚さ〇・一ミリの銅板に浮きぼりを施します。お孫さんの姿を愛情を込めて楽しく創られるKさん、佛像の造形に独特の境地を開かれるYさん、緻密に動物の生態を追求されるKさん、独自の作風を誇るIさん等です。小人数ながら多士済々です。私も皆さん

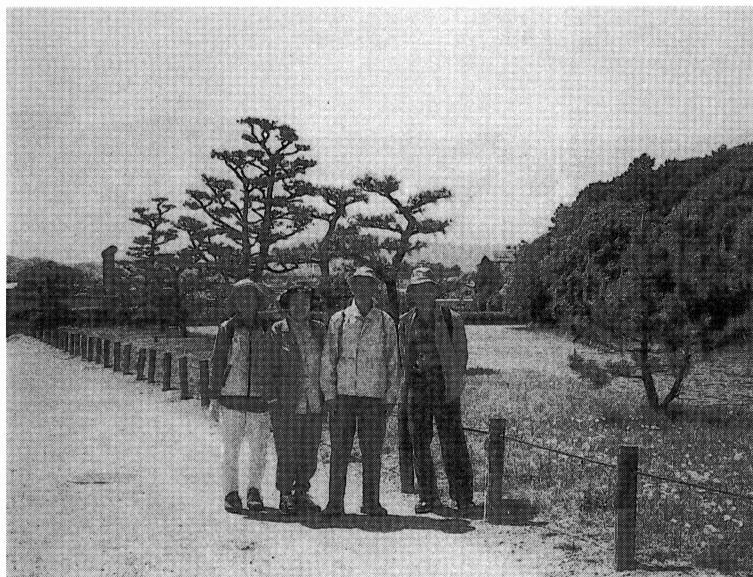
に取り残されないように頑張ってまいりたいと思っております。

只、問題は作品の着色がむずかしく同じような着色が出来なく液の濃度も関係しますが、作品の仕上げの磨きも大切のように思われますが、この点を今後の研究課題としてこれからの作品にて追求しようと思っております。現在は平城西公民館で習作を行っており、文化協会の名のもとに頑張っております。

本年の行事として銅の会（同好会）として、四月に学園前大阪ガスのギャラリーを借りまして、作品展を開催しましたが、これは一度やって見ようとY氏の提案で行い、多数の来場を頂きこの点はとても嬉しく又身の引きしまる思いで一杯で、今後皆さんとともに頑張っていくと思っております。

興味のおありの方、第一、三金曜日、一時半〜四時迄、平城西公民館で習作を行っております。

お遊びに来て下さい。

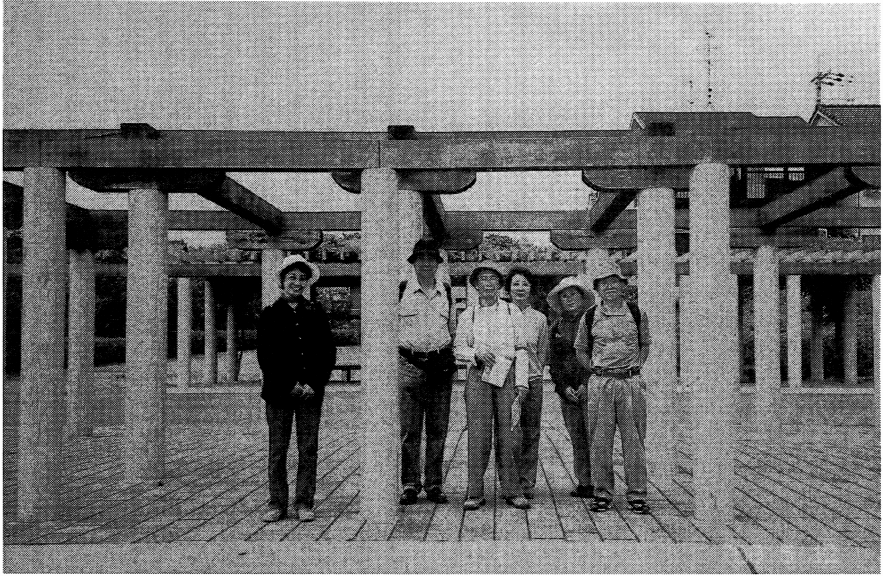


西大寺から薬師寺迄 垂仁天皇陵（4・23）

「……歩く会」に私が入れてもらってから歩いた距離はどのくらいの距離になるのでしょうか。歩きたびに何か新しい発見をしたり、教わったりすると何か得をしたような気がします。そして今まで歩いた道に想い出は残っています。

世紀末から新世紀へ、「……歩く会」の平成十二年度は左記の様に歩きました。

四月二十三日（日）晴 西大寺から薬師寺迄の二回目
前回（三月二十四日）とは違って変わって晴天で秋篠寺から西大寺へ。学問の神様で知られる菅原道真を祭る菅原神社では、お宮参りでしょうか、可愛い赤ちゃんが家族に抱かれてお参りされていました。この地が道真誕生の地であり、近くに道真の産湯に使ったと伝えられる小さな池があります。神社の近くに行基菩薩によって創建された喜光寺は、東大寺造宮にあたり本堂を参考にされたという伝承から大仏殿の「試みの堂」として知られています。近鉄橿原線が側を通る住宅地造成中に、古墳に立てる埴輪を焼いた窯跡を保存のため整備された菅原



正道官衙遺跡前で（5・12）

はにわ公園で昼食、垂仁天皇陵から薬師寺迄、春風に吹かれながら、人家に咲く花や、畦の草花を愛でながら、人家の庭に咲く花や、畦の草花を愛でながら歩きました。（参加者五名）

五月十二日（金）晴 京都府城陽市久津川付近

近鉄京都線、久津川駅から寺田駅迄、古墳を巡って歩きました。駅の近くの平井神社からJR奈良線の工事中に発見されたという車塚古墳や付近には丸塚古墳、芭蕉塚古墳、等が散在していますがこの辺に勢力をもっていた大王の陵でしょうか。住宅街の中、小高くなっている下大谷古墳の小公園で昼食。食事後、前方後円、方墳、円墳、など小さな古墳が集まっている、上大谷古墳群を巡りました。郡の役所跡が復元されている正道官衙（しようどうかんが）遺跡をみて水度神社へ。絵馬の「御蔭踊図」は約百七十年前の庶民の生活の一端をうかがえて有名です。今日はこれで終わり近鉄寺田駅へ。（六名）

六月二十五日（日）曇り後雨 五月の久津川の二回目三時終了。高の原駅に着くと雨が降り出しました。



上大谷古墳群（6・25）



柳生の里（9・22）



畝傍山 (11・24)

(参加者七名)

九月二十二日(金) 柳生の里

近鉄奈良駅前よりバスで柳生行に乗車し坂原で下車、バス停の近くに昔ながらの鍛冶屋さんがあるというので行くと、私たちの幼い日の記憶に残っている、まさに村の鍛冶屋さんである。仕事場を覗いて見ると、丁度御主人がおられ、家の前の畑から野菜を引き抜いて「持って行きや」、とくださった。そこから近くの南明寺の縁側を借りて昼食。おふじの井戸から柳生の里への峠越え。

疱瘡地藏から柳生家の菩提寺である芳徳寺へ。裏には初代の宗厳から中央に宗矩を始め約八十基以上の墓碑が苔むして静に眠っています。剣の時代からミサイルへの移り変わりをどのように感じているでしょうか。正木坂道場の横を通り旧柳生藩家老屋敷を見学し十兵衛杉と呼ばれる大きな枯れ杉が見えるバス停から帰途へ。

現代と江戸時代を行ったり来たりしているような気持ちになった一日でした。(参加者六名)

十月二十二日(日) 晴

柳生の里の二回目

十一月二十四日 金(晴) 畝傍山周辺

大和三山のうち畝傍山が一番高く、その回りに初代の神武天皇陵から、二、三、四代の天皇陵があります。高くと云っても畝傍山は百九十九米で、頂上から大和盆地、藤原京跡を望む事が出来ました。山を下り、仙人が空を飛んでいる最中、川で洗濯する女性の足にクラックときて墜落してしまった—という誰でもが知っている人間臭い仙人のエピソードの久米寺にお参り致しました。

最後は橿原考古学研究所付属博物館に寄り付近から発掘された数々の出土品が展示されていて、古代の人々の生活をしのびました。(参加者七名)

平成十三年三月二十五日(日)一雨

畝傍山周辺の二回目、雨で中止

二十世紀最後の年、平成十二年度も無事歩くことができました。ご一緒下さった皆様、有り難うございました。みんながよく知っている道を、初めて歩く時、いろいろ

な発見は驚きと何か得をしたような気になります。

平成十三年はどこを歩くのでしょうか？

又、又、お願い。楽しく歩く道を教えて下さい。そして皆様のご参加をお待ちしております。

絵画の会

梶野 哲

この会には、楽しい会員が沢山おられます。紙面の都合で皆紹介出来ないのですが、今回は、男性の方のお話をしましょう。女性の方のお話は後日のお楽しみとします。

上田善次氏は、凄く多芸多才な方で、和菓子、建築、商業デザイン等の社長を経験され、絵画でもアメリカでスーパー・リアリズムの風景画を依頼されて描いておられたそうです。入会されて絵作りの極意を体得、見事なイメージ力で、魅惑的な光琳風の装飾画を描かれます。

大野貞男氏は穏やかな方ですが、NHKコンクールに入賞された程の童話作家で、詩人であり、画壇の会員であった優れた画家です。絵はファンタジックで深い人生観が感じられ、一度観たら忘れられない程魅力的です。

小西淑彦氏は、発酵醸造学の学者で、実業界での研究開発にも携わられた方で、「人生至るところに、食品加工“あり”という、おいしいお話がいっぱい書かれた著書を近代文藝社から出しておられます。絵は、谷内六郎や、熊谷守一にも共通する、率直で飾らない、天衣無縫な素晴らしい心の表現だと思います。普通は誰でも、上手に見せようとかするのには、羨ましい限りです。

北嶋輝夫氏は、仏様の日本画に精進されてられます。余程の信仰心がなければ、描けるものではありません。それは、仏画の模写や仏像彫刻の単なる写生ではなくてご自分の心の中にある仏様の心象を表出されるのです。絵を透かして彼方に真の仏様が居られる感じます。

南村勝次氏は、近鉄の駅長さんや桃山キャッスルランド副社長さんを歴任された方で、本場イギリス風の本格的水彩画を描かれます。特に、風景画は重厚な雰囲気で見入っていると、心が落着く気がします。対象に対する細かな気配りと愛情が感じられます。見事な絵です。

西村通弘氏は、この会の世話人をご担当して下さいます。他に、平城ニュータウン・スポーツ協会テニスクラブの会員であり、公民館の音楽関係のクラブの指導

等もされています。多方面で活躍をされている方で。作品は、大らかで余裕ある画風です。日本の弥生時代をテーマにした想像画では、多彩なモチーフを、確かな絵画構成力を駆使して、統一されたのに感心しました。

広田省吾氏は、奈良高等学校時代美術部のキャプテンだったそうですから、相当長い画歴のベテランであり、当時の同級生に二紀会委員で文部大臣賞等を受賞された高瀬善明氏、後輩には東京芸術大学教授の絹谷幸二氏等錚々たる方が居られます。それだけ美術部が優れていた事が推察されます。流石に見事な絵を描かれ、洒脱な画風で、これは一朝一夕に、出来るものではありません。

最年長の山崎 明氏は、銅板画の会の代表で、平城西公民館自主グループ会長ですから、ご存知の方も少ないと思います。唯、漫然と世界を見て描くのでなく、若々しい感性で実に端的に、大切なモチーフを選んで簡潔で明快な構図に纏める卓越した能力をお持ちです。

ところで、会員は対等で、先生はいません。何故かと言うと、会員の皆さんが人生経験も豊富な方で、その上絵の道でも相当の修業をしておられるからなのです。

私は、幼少時から日本画家だった祖父に教わりました

ので、画業六十年になりますが、皆さんの実力は決して遜色ありません。修業年数が問題ではないのです。こと芸術に関しては、誰にも教わらずとも、ご自分が持つておられる天才の力で出来るのです。その証拠に、幼児は

教わらないでも、自由に絵を描きます。

何時でもご入会出来ます。お気軽にお越し下さい。

私達人間は、芸術があつてこそ、生き甲斐ある人生を、生きられるのです。

「層富」投稿記事の追記訂正

片桐 一夫

これは昨年層富No.17号に投稿した私の「地球の自転軸の移動について」の左記事項の、追記消去訂正に於いての、お願いのことであります。

まず24ページの上段左から3行目の経度は、春分点の経度のことですから、経度の前に春分点の文字を追記して下さる様に、お願い申し上げます。

次に26ページの附表の左下の、縄文時代の13,000年前から10,000年前までの、左側の空欄に草創期の文字を追記して下さる様に、お願い申し上げます。

次に27ページの附图の北極点移動円の中心を、誤って「北極海」と書いてありますので、この文字は消去して下さい。

次にまた青森、大阪への位置表示矢印が、少し外れてますので、青森は約▲■■下(北)の黒丸印、大阪は約●■■上(南)の黒丸印の位置に訂正して下さい。

以上いろいろと御世話になりますが、何卒宜しくお願い申し上げます。



第十八回 文化祭 記録

上演の部

◎ 日時 二〇〇〇年十一月三日(祝) 午後一時三〇分
～四時三〇分

◎ 会場 北部出張所会議室

◎ 主催 平城ニュータウン文化協会

上演 一三時三〇分 挨拶 文化協会会長 網干 善教
来賓挨拶

1) 箏曲 一三時四〇分 菊地雅千絵

「砂 絵」／沢井 忠夫作曲

第1 箏 林 雅千鶴

第2 箏 田頭雅千香

「黒田節による幻想曲」／沢井 忠夫作曲

ソロ 菊地雅千絵

第1 箏 南湖雅千紗・山内正子

第2 箏 比良 尚美・福井栄子

十七弦 田頭雅千香

尺八 津田 岳山



2) 詩吟 一四時 詩吟の会

吟題 作者 吟詠者

涼洲詩 王輪 独吟) 西村諄輔
 峨眉山の歌

李白 独吟) 津崎美津子
 崖壁の母 藤田まさし

望海 藤井竹外 独吟) 杉田英二
 独吟) 花田清美

九月十三夜

上杉謙信 独吟) 宗徳岳宗
 青葉の笛 松口月城 独吟) 小森国弘

道灌衰を偲るの図に題す

大榎盤渡 独吟) 中川岳婉
 松口月城 合吟) 花田岳娟・越智岳彩

母

四海波 本宮三香 合吟) 宗徳岳宗・津崎美津子

周藤吉雄・杉田英二

花田清美・小森国弘

譯曲) 西村諄輔

峨眉山の歌

李白 独吟) 吉本堤瑞

3) 合唱 (中国語講座) 一四時三〇分

曲目 「紅蜻蜒」 (赤とんぼ)

「玫瑰花开了」 (バラが咲いた)

「苏州夜曲」 (蘇州夜曲)

4) ギター演奏 一四時五〇分

出演 曲目

中村昭三ギターソロ

アルマンドとクーラント (バッハ)

唄とギター

唄 ・石井由美

ベサメ・ムーチョ

ギター・内山博之

フラメンコ舞踊

ギター・木村圭二

ガロティン

踊り手・木村あけみ

石井由美

ギター合奏

高井登貴男 内山 博之

ワルツ・ピカピカ

足立 昌浩 村上 和子

主よ人の望みの喜びよ

国武 三重 野中美紀子

5) 舞踊 一五時四〇分 手踊り同好会

「鶴亀 (庭のいさご)」 岡田 利一

「十三夜」 久門 富美

「まつの木小唄」 毛利 公子・小森美恵子

島川恵美子・山内 梅乃

「菊づくし」 林 育子

「山中節」 島川恵美子

「三つ扇」 山内梅乃

「祇園小唄」 小森美恵子

「正調博多節」 毛利 公子

展示の部

◎前期 十月二十五日～二十七日

◆絵画 梶野 哲 石川 和子 上田 善次

大野 貞男 小西 淑彦 込山 嘉代

◎中期 十月二十八日～三十日

◆短歌

| | | |
|-------|-------|-------|
| 網干 善教 | 荒居 智子 | 大浦小枝子 |
| 岡田 越子 | 柏原 英一 | 片桐 一夫 |
| 木庭 和子 | 玉置 小代 | 寺嶋 勅雄 |
| 中川都哉子 | 福井 秀子 | 松村せつ子 |
| 森田 陽子 | 安田 和子 | |
| 中野 昭三 | 赤井美津子 | 秋山 静 |
| 新司 輝江 | 櫛原千鶴子 | 岡田 越子 |
| 北村 源子 | 幸路 喜代 | 奥村 淳子 |
| 杉山 啓子 | 林 美智子 | 若原 和子 |

◆寫作りの会

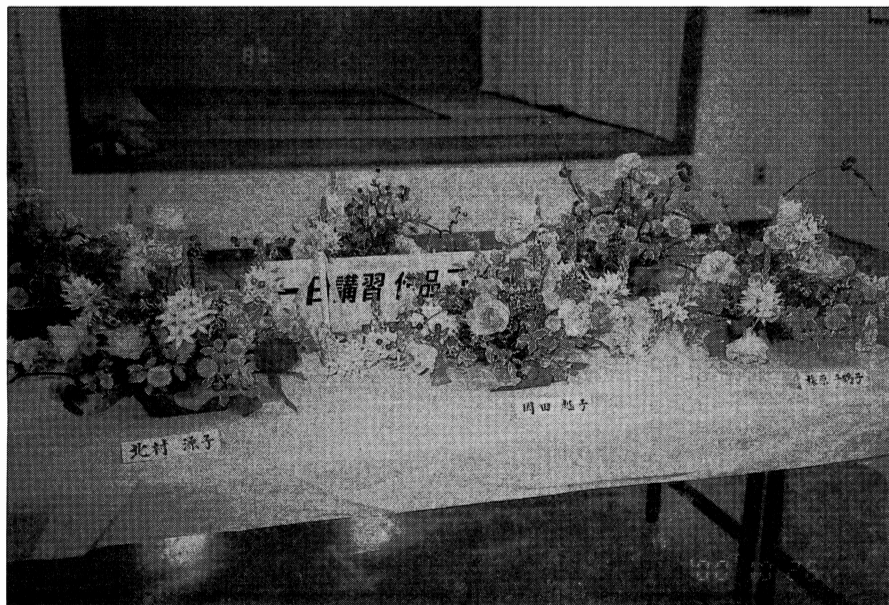
◆銅板

| | | |
|-------|-------|-------|
| 澤田 実子 | 北嶋 輝夫 | 高橋ゆかり |
| 出口真喜子 | 南村 勝次 | 西村 道弘 |
| 広田 省吾 | 山崎 明 | 山田 晴美 |
| 吉沢 幸江 | | |

レリーフ

◆軸装

| | | |
|-------|-------|-------|
| 込山 博介 | 皆藤るみ子 | 杉田 英二 |
| 西村 通弘 | 山崎 明 | 山田 晴美 |
| 西島 芳子 | 大橋 芳子 | 加藤 秀子 |
| 西村 従子 | 平田 忠子 | 水野 繁三 |
| 山本 康彦 | | |



◆パッチワーク

打田 照子 櫛原千鶴子 岡田 越子

◆写真

赤坐 右一 栗田 菊枝 伊藤 昌一

◆地酒

写真・日本酒ラベル

◆木匠人形

沼尻 侖 原 昭子 石森千代子

◆園芸

北村 孫衛

◆押絵

谷口 直子 網干佐和子 石森千代子

◎後期 十月三十一日～十一月二日

◆俳句

牧野 春駒 牧野 和代 伊藤 柳紅

◆押し花

東山 幹子 御手洗敦子 森本 登子

上田 善次 岡 良子 木村 長子
 込山 山歩 周藤 智子 多田 文子
 辻田しま代 南村 照栄 西田たまみ
 西山佐代子 藤井 善治 藤澤 陽子
 堀池 敏子 森田 陽子 山内 梅乃
 吉沢 幸江 和田美代子
 ◆拓本 込山 博介 宗徳 郁雄 高橋はる江
 高橋 友示 中村 弓子 南村 勝次
 西島 芳子 西山佐代子 平田 忠子
 広田 省吾 山下 昌一 渡辺 亮斗

山下 彰子 鷺塚 順子 宇野木久代
 広崎 光子 伊藤 京子 奥谷 敏子
 岡島 恒子 岡田 越子 杉岡安貴子
 木村 洵子 鈴木 幸子 高橋 笑子
 杉山 安枝 住吉 紀子 西山佐代子
 榊 鈴子 南村 照栄 久本 美鈴
 西田 安代 林 美智子 御手洗敦子
 袋井 妙子 松村せつ子 島津 益子
 山中優美子 若原 和子

2001 (平成13) 年度

第19回

平城ニュータウン文化協会総会

日 時 2001年5月20日 (日)

受付 PM 1:00

開会 PM 1:30

場 所 北部出張所会議室

I 開会の辞

II 会長挨拶

III 来賓祝辞

IV 議長選出

V 議 事

(1) 2000年度事業報告

(2) 2000年度会計報告・監査報告

(3) 役員改選

(4) 2001年度事業計画 (案)

(5) 2001年度予算 (案)

(6) その他

VI 閉会の辞

第19回総会 記念講演

午後 2:30から

『キトラ古墳の話題』

講師 関西大学名誉教授

網 干 善 教 氏

懇 親 会

午後 4:00から



2000年度事業報告

- 2000年4月1日 ニュース1号発行
5月8日 協会報発行 全戸配布
21日 第18回(2000年度)総会
記念講演「飛鳥新出土の亀形石について」
講師 網干 善教先生
6月1日 ニュース2号発行
8月1日 ニュース3号発行
19日 常任理事会
9月9日 右京小学校週休五日制推進協議会主催に参加(押し花を楽しむ会)
13日 観月の会
29日 文化祭展示部打ち合わせ会
24日 右京小学校運動会出席
10月1日 ニュース4号発行
1日 右京幼稚園運動会出席
7日 協会報発行 全戸配布
10日 「層富」発行
19日 フラワーアレンジメント 指導 勝島 和代先生
10月25日～11月2日 文化祭開催
25日～27日 前期展示の部 絵画、銅版レリーフ、表装
28日～30日 中期展示の部 短歌、筥作りの会、園芸、パッチワーク、
地酒の会、書
31日～11月2日 後期展示の部 俳句、拓本、写真、押し花、
木目込み人形・押し絵
11月1日 ニュース5号発行
3日 文化祭記念講演 「世界の植物園(アイルランド編)」スライド上映
講師 光岡 祐彦先生
3日 上演の部
詩吟、舞踊、箏曲、ギター独奏、歌唱(中国語講座)
3日 ごくろうさん会
2001年1月1日 ニュース6号発行
7日 「新春を祝う会」参加
2月1日 ニュース7号発行
15日 手芸講座 講師 谷口 直子先生
3月24日 常任理事会

2000年（平成12年）度決算報告

平成12年4月1日～平成13年3月31日

【収入の部】

（単位、円）

| 項 目 | 予 算 | 実 績 | 増 減 | 備 考 |
|--------|---------|---------|---------|-------------|
| 前年度繰越金 | 152,335 | 152,335 | 0 | |
| 会 費 | 585,000 | 577,500 | △ 7,500 | @1,500×385人 |
| 後 援 費 | 70,000 | 70,000 | 0 | 各自治連合会、自治会 |
| 寄 付 金 | 10,000 | 20,000 | 10,000 | 講師お礼戻り |
| 戻 入 | 0 | 3,000 | 3,000 | 助成金戻り |
| 雑 収 入 | 665 | 163 | △ 502 | 銀行利息 |
| 合 計 | 818,000 | 822,998 | 4,998 | |

【支出の部】

| 項 目 | 予 算 | 実 績 | 増 減 | 備 考 |
|--------|---------|---------|----------|-----------------|
| 事 業 費 | 80,000 | 44,743 | △ 35,257 | 文化祭、セミナー |
| 助 成 金 | 87,000 | 87,000 | 0 | 講座、同好会 3,000×29 |
| 会 議 費 | 10,000 | 5,882 | △ 4,118 | 会議、資料、他 |
| 広 報 費 | 430,000 | 352,700 | △ 77,300 | 会誌、会報、ニュース |
| 事 務 費 | 30,000 | 9,702 | △ 20,298 | 事務用品、他 |
| 印刷、消耗費 | 80,000 | 78,750 | △ 1,250 | コピー機消耗品 |
| 通 信 費 | 5,000 | 1,890 | △ 3,110 | 郵送料 |
| 渉 外 費 | 10,000 | 5,000 | △ 5,000 | 協賛費 |
| 雑 費 | 10,000 | 0 | △ 10,000 | 項目にない出費 |
| 予 備 費 | 6,000 | 0 | △ 6,000 | |
| 積 立 金 | 70,000 | 70,000 | 0 | 特別会計繰り入れ |
| 小 計 | 818,000 | 655,667 | △162,333 | |
| 次期繰越金 | | 167,331 | | |
| 合 計 | 818,000 | 822,998 | | |

特別会計 南都銀行スーパー定期13年3月31日(出)現在 ￥155,232

備品 コピー機一台 LEODRY2540

平成13年4月19日

2000年度の会計帳簿・証票類他関係書類等を精査した結果、適正である事を認めます。

監事 東 叡 (印)
 西 村 美佐子 (印)

2001年度事業計画

はじめに

当「協会」は、地域での日常的な文化活動を通して、地域コミュニティー・住民の親睦と和を実現していくために、当時の自治会・連合会の「街づくり」の方針のなかで結成推進されてきたものです。

この設立趣旨にそって、地域住民の多くの方の、参画を期するとともに、会員の研究創作発表、相互の交流などの場としつつ、地域文化の発展に、寄与することを基本としていきます。

また地域四自治連合会をはじめ、スポーツ協会、教育懇談会、地区社会福祉協議会などの各団体の活動とも連携して、ひきつづき「街づくり」に貢献していきます。

おもな計画

- 1 講演会の開催
総会記念講演
文化祭記念講演
- 2 セミナーの開催
- 3 会誌『層富』の発行
- 4 会報の発行（全戸配布）
文化協会案内号
文化祭 案内号
- 5 ニュースの発行（隔月発行予定）
- 6 大和路見学会
春1回
秋1回
- 7 文化祭の開催
- 8 観月の夕べの開催
- 9 年間を通じて趣味の講座開催
- 10 その他

会の発展を期しての工夫など会員各位の、提案、役員会決定などにもとづき適宜事業を推進したい。

2001年（平成13年）度予算

【収入の部】

（単位、円）

| 項 目 | 金 額 | 備 考 |
|--------|---------|--------------|
| 前年度繰越金 | 167,331 | |
| 会 費 | 570,000 | @1,500×380人 |
| 後 援 費 | 70,000 | 各自治連合会、自治会より |
| 寄 付 金 | 10,000 | |
| 雑 収 入 | 669 | 銀行利息他 |
| 合 計 | 818,000 | |

【支出の部】

| 項 目 | 金 額 | 備 考 |
|---------|---------|---------------------|
| 事 業 費 | 80,000 | 文化祭、セミナー他 |
| 助 成 金 | 84,000 | 講座、同好会の助成 @3,000×28 |
| 会 議 費 | 10,000 | 会議、資料、他 |
| 広 報 費 | 410,000 | 会誌、会報、ニュース他 |
| 事 務 費 | 20,000 | 事務用品 |
| 印刷、消耗品費 | 80,000 | 印刷機器消耗品、コピー |
| 通 信 費 | 4,000 | 郵送料、電話代 |
| 渉 外 費 | 10,000 | 協賛費等 |
| 雑 費 | 10,000 | 各項目に該当しない必要経費 |
| 予 備 費 | 10,000 | |
| 積 立 費 | 100,000 | コピー機積立費 |
| 合 計 | 818,000 | |

講 座 ・ 同 好 会 一 覧

| | 定期講座・同好会 | 担 当 者 | ☎71局 | 曜 日 ・ 時 間 | 予定会場 |
|----|-----------------|-------------------------------|------------------|-------------------------------------|-------------|
| 1 | 歴史教養講座 | 網 干 善 教 | 6510 | 第2火曜日(10時~12時) | 北部出張所会議室 |
| 2 | 万葉講座 | 松 岡 禮 一 | 2964 | 第1月曜日(13時半~15時半) | 北部出張所会議室 |
| 3 | 先史学講座 | 泉 拓 良 問合せ 山内梅乃 | 1654 | 第3月曜日(15時~16時半) | 北部出張所会議室 |
| 4 | 書道講座 | 田 室 西 崖 | 7035 | 第3月曜日(13時~15時) | 北部出張所会議室 |
| 5 | 読 書 会 | 問合せ 山内梅乃 | 1654 | 第4金曜日(10時~12時) | 北部出張所会議室 |
| 6 | フランス語講座 | 根 来 良 子 問合せ 木庭和子 | 8253 3494 | 毎月曜日(10時~11時半) | 北部出張所会議室 |
| 7 | 英 語 講 座 | 鎌 田 時 栄 | 3150 | 第1・3土曜日(9時半~12時) | 平 城 東 公 民 館 |
| 8 | 中国語同好会 | 松 村 如 洋 <small>いづみ</small> | 9605 | 毎木曜日(10時~11時半) | 北部出張所会議室 |
| 9 | 俳句入門 (平城山句会) | 牧 野 和 代 問合せ 西山佐代子 | 1777 4950 | 第3木曜日(13時~16時) | 平 城 西 公 民 館 |
| 10 | 短歌を楽しむ会 | 網 干 善 教 問合せ 木庭和子 | 6510 3494 | 第3火曜日(13時半~16時) | 北部出張所会議室 |
| 11 | 絵 画 の 会 | 梶 野 哲 問合せ 西村通弘 | 3295 1296 | 第1・3火曜日(10時~12時) 第2火曜日(13時半~17時) | 北部出張所会議室 |
| 12 | 写 真 同 好 会 | 赤 坐 右 一 | 0111 | 概ね月2回日曜日、ニュースで通報 | 野 外 |
| 13 | 山 歩 きの 会 | 西 幹 友 雄 | 6102 | 第2土曜日(雨天中止の場合は第3土曜) | 野 外 |
| 14 | … … 歩 く 会 | 広 田 省 吾 | 0207 | 奇数月第4金曜偶数月第4日曜日 | 野 外 |
| 15 | 園 芸 の 会 | 北 村 孫 衛 | 0823 | 第4木曜日(13時~16時) | 右京4-7-5 |
| 16 | 野草をしらべる会 | 前 川 良 雄 問合せ 周藤智子 | 0682 1485 | 春・夏・秋年に3回程度 | 野 外 |
| 17 | 拓本を楽しむ会 | | | 自主活動 問合せ 事務局まで | |
| 18 | 詩 吟 の 会 | 吉本音市・西尾弘子 問合せ 花田清美 | 5036 2787 | 第1・2・3水曜日(10時~12時) (13時~15時) | 北部出張所会議室 |
| 19 | 手踊り同好会 | 毛 利 公 子 | 1989 | 第1・2金曜日(10時~12時) | 北部出張所会議室 |
| 20 | 押し花を楽しむ会 | 廣 崎 光 子 | 0774-73- 0702 | 第1木曜日(10時~15時) 第4水曜日(10時~15時) | 北部出張所会議室 |
| 21 | 表 装 の 会 | 西 島 芳 子 | 72-0335 | 第2・4木曜日(10時~17時) | 北部出張所会議室 |
| 22 | 料理を楽しむ会 | 松 村 せ つ 子 | 9605 | 第1木曜日(10時~12時) | 平 城 東 公 民 館 |
| 23 | 銅板レリーフ同好会 | 問合せ 山崎 明 | 43-3326 | 第1・3金曜日(13時半~16時) | 平 城 西 公 民 館 |
| 24 | パッチワーク研究会 | 打 田 照 子 | 2879 | 第2・4金曜日(13時~16時) | 北部出張所会議室 |
| 25 | 宮 作 り の 会 | 問合せ 若原和子 | 72-2508 | 第2・4月曜日(10~16時) | 北部出張所会議室 |
| 26 | 木目込人形・押絵同好会 | 谷 口 直 子 問合せ 石森千代子 | 3183 | 第1・第3水曜日(10時~14時) | 北部出張所会議室 |
| 27 | 地酒を味わう会 | 松 本 敏 夫 問合せ 鈴木昭弘 | 1690 | 第2土曜日(18時半~) | 会 場 不 定 |
| 28 | フォークダンスの会 | 宮 川 惠 美 子 問合せ 大浦小枝子・玉置小代 | 4651-0066 | 第1火曜日(10時~15時) | 北部出張所会議室 |
| 29 | 「続日本紀」を読む会 | 渡 辺 馨 | 72-4855 | 第4火曜日(13時半~15時半) | 北部出張所会議室 |

会 則

第一章 総 則

第一条 この協会は、平城ニュータウン文化協会と
いう。

第二条 事務局は、平城西公民館に置く。

第二章 目的及び事業

第三条 会員の研究・創作発表、知識の交換並びに
会員相互間及び他の文化団体との連絡提携
の場となり、総合文化に関する進歩普及を
はかり、地域文化の発展に寄与することを
目的とする。

第四条 前条の目的を達成するために、次の事業を
行う。

- 1 講演会・研修会・展覧会・発表会・文
化講座等の開催。

2 関連文化団体との連携及び協力。

3 研究の奨励及び研究業績の表彰。

第三章 会 員

4 会誌の発行。

5 その他目的を達成するために必要な事
業。

第五条 平城ニュータウンに在住又は勤務する者で、

協会の目的に賛同する者とする。会員の種
別は次のとおりとする。

1 正会員 年間会費一、五〇〇円
但し、高校生五〇〇円

2 賛助会員 この協会の趣旨に賛同する
者で年間会費五、〇〇〇円以上納める
個人又は団体とする。

二、会員の更新手続きは不用とするが会費
は総会後三ヶ月以内に納入のこと。但
し、二年間会費納入なき場合は退会と
見做す。

第四章 役 員

第六条 協会にはつぎの役員を置く。

会長一名、副会長三名、常任理事若干名、

事務局長一名、事務局次長一名、会計一名、

第七條

理事若干名、監事二名。

理事は、正会員中より選出する。

二、会長、副会長、常任理事は理事の互選

で定め総会の承認を得る。

三、事務局長、事務局次長、会計は理事中

より会長がこれを選任し、総会の承認を得る。

四、監事は会員中より二名選出する。

第八條 会長は協会を代表する。

二、副会長は会長を補佐し、会長事故ある

時は代行する。

三、理事は理事会を組織し、協会に関する

事項を審議し執行する。

四、常任理事は理事会の決定に基づき業務

遂行に当たるとともに、総会で決議し

た事項を執行する。

五、事務局長は会務の遂行に関する理事会

常任理事会等の決議に基づき全般の事

務連絡、処理に当たる。

六、事務局次長は事務局長を補佐する。

七、会計は会計事務を処理する。

八、監事は会計帳簿を監査し、通常総会に

おいて報告する。

第九條

顧問・参与を置くことができる。顧問・参与は理事会の同意を得て会長が委嘱する。

二、顧問・参与は会議に出席して意見を述べることができる。

第十條

役員任期は二年とし、再任は妨げない。

二、補欠より選出された役員任期は、前任者の残任期間とする。

三、役員はその任期満了後でも、後任者が就任するまで、なおその職務を行う。

第五章 会 議

第十一條

理事会は必要に応じ会長が招集する。但し、理事の三分の一以上から会議の目的を示して請求のあったときは、理事会を招集しなければならない。

二、理事会の議長は、会長又は会長の指名する者とする。

三、理事会は理事の二分の一以上出席しな

ければ議事を開き議決することができない。
ない。

四、理事会の議事は、出席理事の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決す。

第十二条 常任理事は、会長、副会長、常任理事、事務局長、会計によって構成し、必要に応じ会長が招集する。以下理事会に準ずる。

第十三条 通常総会は毎年一回会長が招集する。
二、臨時総会は、理事会が必要と認めたと
き会長が招集する。

三、総会の議長は総会出席者の中から指名する。

第十四条 四、総会の議事は、出席者の過半数をもって決し可否同数のときは議長が決する。
次の事項は通常総会に提出して、その承認を受けなければならない。

- 1 事業報告及び収支決算
- 2 会計監査報告
- 3 事業計画及び収支予算

4 その他理事会において必要と認めたる事項。

第六章 会計
第十五条 経費は会費並びに補助金、その他の収入による。

第十六条 会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。

第七章 会則の変更
第十七条 この会則は、総会の議決を得なければ変更することができない。

第八章 補則
第十八条 この会則施行についての細則は、理事会の議決を得て別に定める。

第十九条 この会則は昭和五十八年二月二十七日から適用する。

二〇〇一年度
役員名簿

會長 網干善教
副會長 光岡祐彦
事務局長 渡辺馨
山内梅乃
會計 大浦小枝子
監事 西村美佐子
東 川口 勇
参与 川口直子
谷口直子
赤坐右一
石森千代子
上中敏央
打田照子
大迫くき枝
岡田越子
梶野哲
鎌田時榮

理事

北村孫衛
木庭和子
込山博介
鈴木幸子
田中幸夫
玉置小代
田室西崖
南村照榮
西島芳子
西幹友雄
西山佐代子
花田清美
廣田省吾
廣崎光子
前川良雄
松村如洋
松村せつ子
毛利公子
大井政子
大工美智子

寛 ゆり子
河村美智子
喜多正恵
北川尚子
澤田實子
柴田晃良
濱口光良
山下良吉
山田綾子
吉村惣五郎

組織分担

『層富』編集部
部長

部長

広報部
部長

部長

文化祭上演部
部長

部長

文化祭展示部
部長

部長

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|-----|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 廣田省吾 | 込山博介 | 梶野哲 | 岡田越子 | 打田照子 | 石森千代子 | 赤坐右一 | 西村通弘 | 毛利公子 | 松村如洋 | 花田清美 | 鈴木幸子 | 北村孫衛 | 鎌田時榮 | 上中敏央 | 山内梅乃 | 梶野芳哲 | 西島和子 | 木庭和子 | 松岡禮一 |
|------|------|-----|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|

行事部
部長

部長

組織部
部長

部長

配布委員

神功地区 (廣田 省吾)

第一団地

一丁目

一丁目 ガーデンハイッ

二丁目 藤澤陽子

三丁目 土橋覺二

四丁目 高橋はる江

五丁目 酒井不二夫

六丁目 上田善次

右京地区 (山内 梅乃)

第二団地

三丁目 幸路繁三

四丁目 飯田雅代

三丁目 山内梅乃

廣田省吾
 前川良雄 | 東坐右一 | 赤坐右一 | 廣田省吾 | 松岡禮一 | 西山佐代子 | 木庭和子 | 廣田省吾 | 前川良雄 | 廣田省吾 | 前川良雄 | 廣田省吾 | 前川良雄 | 廣田省吾 | 前川良雄 | 廣田省吾 | 前川良雄 | 廣田省吾 | 前川良雄 |

四丁目

四丁目

五丁目

右京地区

左京地区 (久本 美鈴)

第一住宅

第二住宅

六丁目

一丁目

二丁目

三丁目

四丁目

五丁目

第一住宅

第二住宅

六丁目

一丁目

二丁目

三丁目

四丁目

四丁目

四丁目

四丁目

駅東団地

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|-------|-------|------|-----|------|------|------|-------|
| 大工美智子 | 岡本幸子 | 黒田節子 | 喜多正恵 | 久本美鈴 | 犬伏房子 | 永井圭子 | 鈴木幸子 | 大井政子 | 鈴木和子 | 岩井静榮 | 大工美智子 | 大浦小夜子 | 打田照子 | 下村圭子 | 大浦小枝子 | 西山佐代子 | 石川敏子 | 菅千尋 | 山田綾子 | 岡田越子 | 平田忠子 | 下司まさ子 |
|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|-------|-------|------|-----|------|------|------|-------|